



2007

イスラエルーパレスチナー日本
平和をつくる子ども交流プロジェクト

報告書

2007

イスラエルーパレスチナー日本
平和をつくる子ども交流プロジェクト

報 告 書



主催 '07 平和をつくる子ども交流プロジェクト実行委員会



共催
CHILDREN WITHOUT BORDERS



主管
NPO法人 聖地のこどもを支える会

平和宣言

これは、イスラエル・パレスチナ・日本の高校生たちがプロジェクトの 実りとして、自主的に起草、署名し、「語らいの夕べ」で高らかに読み上げた宣言文です。こうして彼らは、今後も手を携えて平和のために働く決意を表明しました。



平和宣言

「私たちはどうして調和に満ちた世界に生きることができないのでしょうか。私たちは皆、自由に生きるために生まれてきたはずです。」

私たち、パレスチナーイスラエルー日本の若者は、私たちの間に立ちはだかり、私たちを隔てている全ての壁や障害を取り除くために声をあげて誓います。私たちは、憎しみや抑圧、そして、圧制が満ちているような未来を望んではいません。私たちは、心の中にある敵意や人種差別をなくすことを誓います。また、良心に従って歩む人々が、平和の意義を一生懸命広め、核兵器の脅威が取り除かれ、世界中の国々の人々の心に平和と安定が訪れるよう努力することを望みます。

私たちは、信頼、尊敬、そして愛の架け橋を私たちの間に築き上げることを誓います。そして、皆さんが、私たちの将来を奪うような、障害と恐れを取り除くために、ともに立ち上がってくださるようお願いしています。

私たちは、互いに耳を傾け合い、理解し合い、ゆるし合うことをここに誓います。

<p>Israel</p> 	<p>Japan</p> <p>竹山 修平 安井 一馬 中村 菜穂 川原 史織 横山 唯一 石黒 朝香</p>	<p>Palestine</p>  <p>2007年8月13日 東京にて</p>
---	---	---



NPO法人
聖地のこどもを支える会



Declaration For Peace

"WHY CAN'T WE LIVE IN A WORLD WITH HARMONY,
WHEN WE WERE ALL BORN TO BE FREE."

We, the youth of Palestine, Israel and Japan, raise our voices to remove all walls and barriers that segregate and separate us. We do not want a future filled with hatred, oppression and tyranny. We want to eliminate the seeds of enmity and racism from our hearts. And we always hope that all those who have a conscience would work hard on spreading the word of peace and strive in order to achieve peace and stability in the hearts of all nations without the threat of nuclear weapons.

We wish to establish bridges of trust, respect, and love between us. Let us work together on eliminating the wall and barriers of fear that are captivating our future.

So, we hereby declare to listen, understand and forgive.

Israel

[Handwritten signature]

[Handwritten signature]

[Handwritten signature]

[Handwritten signature]

17/08/07

[Handwritten signature]

[Handwritten signature]

Japan

竹山 修平

安井 一馬

中村 栄太郎

川原 忠雄

横山 隆一

石里 朝香

Palestine

[Handwritten signature]

[Handwritten signature]

[Handwritten signature]

[Handwritten signature]

[Handwritten signature]

[Handwritten signature]

Tokyo, 13th August 2007

目次

平和宣言	2
1. 感謝のことばとごあいさつ	6
井上 弘子 (プロジェクト実行委員会委員長・NPO法人 聖地のこどもを支える会理事長)	6
イブラヒム・ファルタス (イスラエル・パレスチナ平和使節団 団長 CHILDREN WITHOUT BORDERS理事長・エルサレム カトリック教会主任司祭)	8
高見 三明 (カトリック長崎大司教区大司教)	10
ワリード・アリ・シアム (駐日パレスチナ常駐総代表・大使)	11
ハダス・メツアド (駐日イスラエル大使館広報官)	
2. プロジェクトの主旨と概要	12
3. プロジェクトの総括	15
プロジェクト実行委員長の総括	15
長崎実行委員長の総括	23
4. プロジェクトの準備	24
プロジェクト実行委員会の立ち上げ	24
長崎での準備経過	25
募金活動と協賛・助成・後援のお願い	26
一般募金活動 協賛のお願い 助成のお願い 後援のお願い	
チャリティコンサート	27
ゴスペルコンサート チャリティコンサートとディナーの夕べ バイオリンとピアノのデュオコンサート	
参加高校生の選出	31
日本の高校生 イスラエル・パレスチナの高校生	
参加高校生の事前教育	32
日本の高校生の事前研修 日本の高校生への宿題 イスラエル・パレスチナの高校生の事前教育	
イスラエル・パレスチナ来日メンバーの渡航準備	38



「語らいのタペ」で、高校生たちが参加者に配ったブローチ

5. プロジェクトの経過 41

那須高原	7月31日～8月5日	41
長崎	8月6日～10日	46
東京	8月11日～15日	52

6. 平和メッセージの発信 「語らいのタペ——平和への渴き」 55

7. 広報活動とメディア関連 62

8. 収支決算 64

9. プロジェクトに参加した喜び——参加者の声 65

参加高校生	65	同行スタッフ	88
リーダー	78	地域スタッフ	96
ファシリテーター	83		

10. プロジェクト参加者名簿 100

参加高校生・リーダー・同行スタッフ 実行委員会・地域協力者

11. 支援団体と支援者名簿 102

協賛団体 助成団体 後援団体 一般支援者

付 録 新聞・雑誌などに掲載された記事 105

1 感謝のことばとごあいさつ



井上 弘子

プロジェクト実行委員会 委員長
NPO 法人 聖地のこどもを支える会 理事長

長い紛争に苦しむ地に生まれ育ったイスラエル・パレスチナの高校生を日本に招いて、日本人高校生とともに「交流と対話」をとおして平和を学び、平和の働き人となつてもらう、そんな大きな目的を持っ

たわたしどもの「平和をつくる子ども交流プロジェクト」は、今回で2度目となりました。この度もまた皆様の温かいご支援のもと、予定通り本年7月31日から8月15日まで那須高原・長崎・東京で行われ、所期の目的を十分に達成して、無事に終了したことをご報告申し上げます。

来日してから2週間、遊び盛りで好奇心にあふれる高校生たちには過酷なほどの、密度の濃い充実したプログラムが組まれていましたが、彼らは一生懸命ついてきてくれました。帰国の途についた時の彼らの顔には、充実感と友情の絆に結ばれた喜びがあふれていました。別れは辛くても、これからは手を携えて平和のために働こうという決意を胸に、再会の希望に燃えて帰って行きました。

実は私ども NPO 法人はこのようなプロジェクトを実施するに当たり、あらゆる面で力不足を感じておりました。しかし、当初から物心両面で実にご協力とご賛同をいただいたことは心強い限りでした。

わけても白柳誠一枢機卿、高見三明長崎大司教、岡田武夫東京大司教、駐日イスラエル大使エリ・コーヘン氏、駐日パレスチナ常駐総代表ワリード・アリ・シアム氏のお力添えを深く感謝いたします。またサンパウロ、ドン・ボスコ社、あけぼの編集部、カトリック新聞、真生会館、長崎純心女子高等学校、活水高等学校、長崎教区、東京教区、さいたま教区が早々にプロジェクトの主旨に賛同して、後援名義を付与してくださったこともプロジェクト推進に大きな力となりました。またサンパウロには、プロジェクトの企画実施に当たり、あらゆる面で大変お世話になりました。

そして資金面でも、多くの団体や個人の方々から力強いご支援をいただきました。

今回もまた、カリタスジャパン、国際交流基金が多額の助成金を交付して下さり、新たに日本万国博覧会記念機構も助成金団体として加わって下さいました。大阪教区社会活動センター・シナピスと日本海洋掘削株式会社からも寛大なご支援をいただいております。とりわけ、JICA 地球ひろばは、協賛者として宿泊施設やその他の施設使用など、あらゆる面で便宜を図って下さり、わたしたちのプロジェクトを力強く支えて下さいました。

資金調達のためにチャリティ・コンサートがいくつか開催されました。ご協力くださった高輪教会聖歌隊、瀬田の丘ゴスペルファミリー、イスラエル

大使ご夫妻、ゴスペル・シンガー上原令子氏、バイオリニスト深堀純子氏に感謝いたします。

特筆すべきは、中東和平の実現を信じ、若者の平和教育の大切さを信じてくださる一般の方々のご支援です。NPO 法人「聖地のこどもを支える会」の支援者や「道の会」会員をはじめ、若者の心に平和の種を蒔き、また平和の若木を育成するというこのプロジェクトの主旨を理解して下さった実に多くの方々のご寄付をいただきました。

また前回と同じように、プロジェクト広告を無料で掲載して下さった「家庭の友」(サンパウロ)、「カトリック生活」(ドン・ボスコ社)、「あけぼの」(女子パウロ会編集部)の3誌にもお礼申し上げます。さらに「家庭の友」10月号では、編集長山内堅治神父の同行取材に基づく、16 ページにもわたる素晴らしい大特集記事を掲載していただきました。若者たちの2 週間の旅の様子を生き生きと伝えてくださっています。

プログラムの第1段階、美しい大自然の中で出会い、友情を育むことを目的とした那須高原では、多くの方々に支えられました。「聖ヨゼフ山の家」を提供し、心からのおもてなしをして下さったベタニア修道女会のシスター方、よさこい踊りなどで、入所者とのとびきり楽しい交流の一時をもうけ、いのちの輝きを見せて下さった「マ・メゾン光星」の方々、細やかな心遣いをもって(父のように兄のように)若者たちの活動を支えて下さった、さいたま教区の司祭方にも感謝しております。第2段階の長崎でも多くの方にお世話になりました。田上富久長崎市長と市当局の方々には温かく迎え入れていただき、ありがとうございました。また長崎原爆犠牲者慰霊平和式典に参加し、イスラエル・パレスチナの高校生がともに献花をすることを許して下さった原爆被爆対策本部および長崎原爆資料館、高校生たちの心深くに届くお話をしてくださった、語り部・廣瀬方人氏にも感謝いたします。

長崎プログラムの充実と円滑な実施のために尽力して下さった多くの方々(とくに事務局とCAN

の高校生)、高校生たちにホームステイという素晴らしい思い出を作ってく下さったホストファミリーの方々にもお礼を申し上げなければなりません。厚生年金会館ウェルシティ長崎には、宿泊施設として今年もお世話になりました。

旅の手配面で便宜を図って下さったフランストラベルセンター(株)、デザインでご協力くださった佐藤克裕氏にもお礼申し上げます。

このプロジェクトに参加した高校生たち、若者たち、また私どもスタッフ一同も、どれほど多くの方々の善意と寛大なご協力に支えられているかを実感しております。

プロジェクトは成功裡に終わりました。若者たちの心に今蒔かれた平和の種は力強く芽を出し、育ちつつある若木はますます大きく成長して、近い将来具体的な行動を起こして、イスラエル・パレスチナ・日本の間に「平和の架け橋」を築いてくれるに違いありません。

今「平和の働き人」となることを真剣に願っているこの若者たちを、今後とも温かく見守ってくださるようお願いしながら、あらためて皆様お一人おひとりのご支援を心から感謝いたします。

2007年8月31日



イブラヒム・ファルタス 神父

イスラエル・パレスチナ平和使節団 団長
Children Without Borders 理事長
エルサレム カトリック教会主任司祭

〈今日の子どもたちは、未来の大人である。〉これは、「国境なき子どもたち」の基本理念を表します。いまの世界は、子どもも、若者も、大人たちも、思いもよらない失望

を数々味わい、無気力と希望のなさにあえいでいます。そのため、豊かな未来へと希望をつなぐために、心のエネルギーを振り絞って生きなければならないのが現状です。

人生とは、ただ単に日々の糧を得て生き延びるためにあるものではありません。恩寵に満ちた存在に出会い、無条件の善意に触れ、尽きることない励ましを受けなければ、人は生きていくことができません。

子どもたちは未来の大人であるということをかみ、特にこの聖地で、子どもたちを啓蒙し、人

間的な成長を促すことができるように、わたしたちは懸命の努力を続けています。

わたしたちは、つねに子どもたちに対し、適正な価値観を行動によって指し示そうとしています。そして、整合性のある活動を提供することによって、子どもたちが、社会病理や個人的な絶望感を乗り越えて、本当の意味の「生きる」ことに目覚めることを目指しています。

そこで、エルサレムの「国境なき子どもたち」は、日本の「聖地のこどもを支える会」の支援を受けて、国境を越えて活動しています。聖地の子どもたちの、夢と希望と、あくなき好奇心を、世界の子どもたちのそれとつなげようとしています。

子どもたちは、いかなる制約をも受けることのない蝶々のようなものです。隔離、人種差別、偏見、性差別、盲目的な敵意に阻まれることなく、子どもたちは国境を越えることができます。



別れの前夜：プロジェクトが無事終わって、みんなの顔に笑顔が輝く。（東京JICAにて）

もし子どもたちが、この事実を体得することができれば、いずれ国籍、宗教、階層、性などの異なる子どもたちが、お互いの間に立ちはだかる国境を取り壊してしまうことができるでしょう。

聖地の子どもたちは、どの国の子どもにも通じる共通言語を持っています。他の国の子供たちが、ビジョンを口にするのを難しく感じ、夢をあきらめそうになったとき、聖地の子どもたちは生きた証人として、彼らに勇気を与えることができるのです。

彼らは生きた福音であり、平和、善意、愛、希望、期待の未来の大使であります。

彼らは日々、孤立させられ、孤独に苦しんでいます。したがって、彼らをそのまま孤立させておくと、その弊害はさらに大きくなってしまいます。子どもたちは、善良な心と、いまだ未熟な意思、そして、汚れない理性を持っています。彼らとともにいるということは、彼らのそうした善なる存在に、オリーブの枝のかぐわしさを届けてやることになるのです。

2007年に日本で行われたわたしたちのプロジェクトは、実り多く、大変有意義なものとなりました。パレスチナ、イスラエル、日本の子どもたちは、文化的、政治的、社会的な差異を乗り越えて、プロジェクトを組織してきました。そのなかで、以下の2点が、重要であると合意されました。

1. 子どもたちは、「すべての人間の内面には価値がある」という事実をもとに、協力し合いました。これがあったからこそ、子どもたちは、自分たちの価値を再認識するとともに、お互いの大切さに気付いていきました

2. 子どもたちは、お互いの見解の違いを尊重し合いました。違っていることは自然なことであり、違いを認め合わない限り、一丸となってよき未来を作っていくことはできないことに気付きました。

また、パレスチナとイスラエルの子どもたちが、日本人の皆様から学んだことは、大変貴重なものです。生涯を通じての宝物になるでしょう。日本と触れ合うことができたことで、パレスチナの子ども

たちにとっても、イスラエルの子どもたちにとっても、まったく新しい平和の概念が生まれました。これは、わたしたちがこれからも平和に向かって努力を重ねていく中で、新たな平和の種として蒔かれました。

最後に、わたしの信ずるところを皆様と分かち合いたいと思います。

わたしは、一人ひとりのなかに「内なる無垢な子ども」がいると信じています。人は、人生を生きている中で、誰かにそばにいてもらい、支えられ、安全な腕の中で守られていると感じたいときがあります。同時に、平和、善、共存、協力の大切さを子どもたちに示すためには、むしろわたしたち大人が自己の内への旅を始め、自分のこころの中に住む愛に飢えた小さい子どもと出会い、それを見つめていくことが必要なのです。

その子が、侮辱されたり軽蔑されたりする存在としてではなく、分け隔てのない兄弟として扱われたなら、わたしたちの魂の中いきいきと住む内なる子どもを覆い隠している先入観や怖れのヴェールが取り去られ、ついにすべての分け隔ての壁が崩れ去るのです。

国境なき子どもたちは国境なき大人たちとなるのです。



高見 三明 大司教

カトリック長崎大司教区 教区長

感謝と期待

二年前に続いて、イスラエル・パレスチナ・日本の高校生たちが、「'07 平和をつくる子ども交流プロジェクト」を那須高原と長崎、それに東京で実施されたことを大変喜ばしく思いますし、イブラヒム神父様を団長とする参加者はもちろんのこと、実行委員会委員長の井上弘子さんをはじめ、ご協力くださった多くの方々に心から敬意を表し、感謝いたします。

ただ、せっかく長崎まで来ていただいたのに、十分なおもてなしもできず、とくに最終日の「語らいの夕べ」に市民の参加者が少なかったことを大変申し訳なく思っております。

長年紛争の只中にあるパレスチナとイスラエルの高校生たちにとって、平和の実現が一朝一夕にはいかないだろうということは、容易に想像できます。2年前に、聖地巡礼をしたとき、イスラエルとパレ

スチナの間を切り裂くかのような高い大きな壁を目の当たりにして、暗澹たる気持ちになりました。物理的な障壁が心理的にますます悪い影響を与えるのではないかと懸念せざるを得ません。キリスト者にとっても、聖地は平和であってほしいからです。

長崎での「語らいの夕べ」でヤニーヴさんが、「物理的壁より心理的壁が問題」だとおっしゃったように、当事者同士が、話し合うために向き合うという具体的な行動を通して、さまざまな困難を乗り越えて人間として理解し合い、ともに生きようという意志を貫くなら、平和はやってくると思います。その意味で、短期間でしかも少数とは言え、イスラエル・パレスチナ・日本の高校生たちがそれぞれの生活や考え方や経験を分かち合い、平和を目指して連帯していこうと努力されたことは、大変素晴らしいと感じております。

今後もこのような地道な歩みを続けていってくださるようお願いし、そのために祈りいたします。どうぞ是非また長崎においでください。



ワリード・アリ・シアム氏

駐日パレスチナ常駐総代表・大使

聖地の子どもたちを援助してこられ、また現在も援助をしてくださっている方々および諸団体の活動に、パレスチナの人々を代表して、心から感謝申し上げるとともに、全面的に賛同いたします。

皆様方の活動は、この地球上に共に生きる人々について、また人生につい

て、子どもたちが前向きな考えを持てるようになるための手がかりとなり、重要な役割を果たすであろうと期待しております。人生に対する前向きな考えを持つことにより、子どもたちは、他者を理解し、さまざまな地域の人々とコミュニケーションする力を伸ばしていこうという意欲が湧くでしょう。平和で友好的な関係を築くために。

子どもたちはわたしたちの未来です。だから、わたしたちはあらゆる方法で、あらゆる所で、子

どもたちへの援助活動を続けなければなりません。わたしたちは、わたしたちの未来が明るく豊かで幸せで、平和なより良い未来となるよう最善

を尽くさねばなりません。

わたしたちの子どもたちのために、平和へ向けて団結しましょう。

プロジェクトのために大きなご支援をいただいた前駐日イスラエル大使 エリ・コーヘン氏は、2007年8月に離任されましたため、残念ながらご挨拶をいただくことはできませんでした。代って、広報官 ハダス・メツアド氏のメッセージを掲載いたします。

ハダス・メツアド氏

駐日イスラエル大使館 広報官

皆様、

中東育ちの一イスラエル人であるわたしにとって、普通に語られる「平和」という言葉は限りない切なる願い、望みを表します。

平和とは、政府間の合意とか、安全な国境を望むことだけではなく、中東の隣人たちとの開いた関係や相互理解も含まれると思います。まずは第一の隣人であるパレスチナ人との。

向こう側の人々の暮らし方、考え方、あり方さえも、取り上げてみればどの側面も偏見や誤った思い込みに塗りこめられています。そんな中で、皆様方の「平和をつくる子ども交流プロジェクト」は画期的な企画、実践であると確信しています。

若い世代が互いに知り合い、学び、友人となるために、そして、自分が思っていたよりずっと相手方は自分自身によく似ているのだと身をもって知るため

に、人々が手助けしていくことは、まことに重要で意味深い、未来への投資となることでしょう。

さらに広島について学ぶことで、地球をめぐる平和の大切さも強調されましょう。

「聖地のこどもを支える会」のすべての支援者、担当者の方々に感謝と敬意を表したいと思います。そして、日本・パレスチナ・イスラエルの子どもたちが末永く関わりを続けて、自分たちのこと、友人たちのことを学んでいけますように。何ととっても、じかに出会って友情を結ぶことこそ、新機軸を生み出す力なのですから。



感謝をこめて。

2 プロジェクトの主旨と概要

主旨と概要

初めに

NPO 法人《聖地のこどもを支える会》は、十数年前から人種や宗教を問わず、教育の機会を失っているイスラエル・パレスチナの子どもたちの教育支援を行い、さらに近年は若者たちの「対話」と「交流」にも力を注いできた。紛争と対立が続く中東で、平和の道を見いだすためには、子どもたちの基礎教育と若者たちの平和教育こそ最重要課題だと確信しているからである。

この度企画されたプロジェクトもまた、2005年と同様、紛争地イスラエル・パレスチナの若者を日本に招き、同世代の日本の高校生とともに、出会いと対話と交流を通して、戦争の悲惨さと平和の尊さを学び、《平和をつくる》大切さを体得してもらうためである。

プロジェクトの目的と意義

(1) 新しい種蒔き

イスラエル・パレスチナの若者のため

自分たちの国では「出会う」ことすらできないイスラエルとパレスチナの高校生たち、しかも親や祖父母の代から敵対する若者たちが、日本という国で、2週間の共同生活の間に、喜びや悲しみ、痛みや苦しみを分かち合うことによって、互いに理解し、受け入れあい、ゆるし合い、かたい友情

の絆で結ばれていくこと。

とくに原爆被爆という極限状態から平和への復興の道を切り開いてきた長崎で、「出会い」と「対話」を通して、戦争の悲惨さと平和の尊さを学んでくれること。

日本の若者のため

戦争とは何か、真の平和とは何かを知らない日本の若者たちが、紛争の中で生まれ育ち、自由と尊厳と安全に飢え渴き、必死に希望の光を見いだそうとしている同世代の若者たちと触れあうことによって、彼らの痛みや苦しみに共感し、自分が平和のために何ができるかを考えてもらうこと。

(2) 若木の育成

2005年に高校生たちの心に蒔かれた種は、今、大きく成長しはじめている。今回積極的にプロジェクトに関わってくれた若者たち（現大学生）が、新しい高校生たちのリーダー役を務めることにより、さらに「平和の若木」として力強く根を張り成長してくれること。

プロジェクトの概要

期間：2007年7月31日～8月15日

参加者数（実際に旅に参加する人）：35名

日本人：20名（若者7名 スタッフ13名）

イスラエル人とパレスチナ人：15名

（若者12名 団長1名 引率者2名）

各地での協力者：約40名

支援者：約450名

「語らいの夕べ」などの参加者：約300人

プログラム：前回の成果と反省をふまえ、
2007年のプロジェクトは3段階で行う。

（1）那須高原

最初の数日は、互いに不信感さえ抱いていた若者たちが、那須高原の雄大な大自然の中で、共同生活、あるいは登山やスポーツなどを通して心を開き合い、友情を育む期間である。

（2）長崎

次に被爆地長崎を訪れる。それは、さらに対話と交流を続けながら、同時に原爆被爆62年を記念する長崎で、「戦争の悲惨さ」と「平和の大切さ」をじっくりと学ぶためである。今紛争の苦しみのさなかにあり、憎しみと破壊を日々体験している彼らが、未曾有の悲劇を乗り越えて再生と復興を達成して「平和の発信地」となった「ナガサキ」の歩みを道しるべとして、「平和への希望の道」を歩き出すこと。

（3）東京

最後は東京で、ともに過ごした2週間を振り返ってこの旅を総括し、自分たちが平和のために何ができるか、どのような協力体制がとれるかを具体的に考える。

「語らいの夕べ」

さらに長崎と東京で、支援者や一般の人々を対象とした「語らいの夕べ」を開催する。2部に分かれており、第1部は、イブラヒム神父の講演「それでも平和への道を歩む」、第2部は、イスラエル・パレスチナ・日本の高校生たちが、力強く平和と希望のメッセージを発信する場となる。

終わりに

本プロジェクトは平和のためのほんの小さな試みに過ぎない。しかし継続していくことによって、新しく蒔かれる「種」と、成長を続ける「若木」たちが、次々と《平和のくさり》となって自発的に行動を起こし、国境を超えてイスラエル・パレスチナ・日本に、そして世界に「平和の架け橋」を築き、新しい時代の証人となってくれることを心から望んでいる。

'07 平和をつくる子ども交流プロジェクト プログラム

	日 程	プログラム	宿 泊
1	7/31(火)	イスラエル・パレスチナ高校生：テルアビブ出発 17:00 AFにてパリ経由東京へ 日本人：午後成田空港のホテルに集合 歓迎準備	機内泊 成田・ホテル
2	8/1(水)	日本人：歓迎準備続き 結団式 イ・パ高校生：成田空港着 18:00 出迎え後、全員で専用バスで那須高原へ	那須高原 (聖ヨゼフ山の家)
3	8/2(木)	那須高原の大自然の中で友情を深める4日間 午前：休息とオリエンテーション 午後：自己紹介 アイスブレイキング ウェルカムディナー	
4	8/3(金)	午前：各国プレゼンテーション 午後：グループディスカッション 自由時間(JUSCO探検) 夜：プレゼンテーション：「原爆について」	
5	8/4(土)	終日：茶臼岳登山・乙女の滝観光 夜：ディスカッション	
6	8/5(日)	午前：セッション「グループとチームについて」 午後：「マ・メゾン光星」訪問と交流 セッション続き「イスラエル・パレスチナ紛争の中で」 夜：立食パーティー	
7	8/6(月)	午前：那須高原から羽田空港へ(専用バス) 羽田—長崎(航空機) 午後：長崎市長表敬訪問 原爆落下中心地での献花 夕刻：長崎実行委員会高校生(CAN)による長崎紹介と歓迎会	
8	8/7(火)	午前：原爆資料館見学 「語り部」の被爆体験を聴く 被爆遺構で祈る 午後：セッション「原爆について」「わたしの家族の痛み、苦しみ」 夕刻：ホームステイ家族のもとへ(高校生と若者)	長崎 (ホームステイ) (スタッフ：ウェルシティ長崎)
9	8/8(水)	終日：伊王島エクスカーショ(海へ!) 海と平和の体験プログラム 夕刻：ホームステイ家族のもとへ(高校生と若者)	
10	8/9(木)	午前：長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典 参列 午後：全体ミーティング「続わたしの家族の痛み、苦しみ」とグループセッション 夜：自由時間(稲佐山)	長崎 (ウェルシティ長崎)
11	8/10(金)	午前：「語らいの夕べ」の準備と分ち合い 午後：「イブラヒム神父講演会」と「語らいの夕べ」 夜：フェアウェルパーティー	
12	8/11(土)	午前：長崎—羽田(航空機) 東京 JICA へ 午後：自由時間(ディズニーランド・東京観光など)	東京(JICA)
13	8/12(日)	午前：プロジェクトの振り返り 午後：自由時間(新宿界隈観光) セッション「平和のために私ができること、私たちができること」 夜：自由時間	
14	8/13(月)	午前：「語らいの夕べ」の準備 午後：「イブラヒム神父講演会」と「語らいの夕べ」 夜：フェアウェルパーティー	
15	8/14(火)	午前：成田へ イスラエル・パレスチナ高校生：AFでパリ経由帰国の途へ 日本人高校生・スタッフ：解団式	
16	8/15(水)	テルアビブ着 00:05	

3 プロジェクトの総括

プロジェクト実行委員長の総括

'07平和をつくる子ども交流プロジェクト実行委員長 井上 弘子

初めに

今回のプロジェクトの目的は2005年のプロジェクトで得た成果を深め、育て、さらに将来を担う若者の心に新しい「種」を蒔くことである。そのため今年もまたこのプロジェクトの立案者、エルサレムのイブラヒム神父の協力を仰ぎ、彼が主宰するChildren Without Borders(国境なき子どもたち)*をイスラエル・パレスチナ側の共催団体とすることになった。

彼らとの緊密な関係のもと、1年有余の準備の時を経て、「'07平和をつくる子ども交流プロジェクト」を、7月31日から8月15日まで実施し、無事すべてのプログラムを終了した。前回に引き続き、実に多くの方々のご支援とご協力により、非常に豊かな実りを得ることができた。

今ここに準備の過程とプロジェクト本体の経過を振り返り、今後どんな展望が開けているかを見てみよう。

*Children Without Borders(国境なき子どもたち)：イブラヒム神父が、イタリアをはじめ各国とイスラエル・パレスチナの子どもたちの交流のために立ち上げた組織で、エルサレム・カトリック教会内にある。

1. 事前の準備過程(24ページ参照)

(1) 実行委員会の活動

かねてからのイブラヒム神父の熱望を受け、2006年夏、NPO法人「聖地のこどもを支える会」理事会で、再度本プロジェクト実施を決定した。

同年10月、鈴木信一神父をはじめ、前回もプロジェクトに関わったメンバーを中心に実行委員会が立ち上げられた。さらに前回、高校生として参加した大学生たち数人が新たに加わったことは大きな助けであり、強みであった。実施まで15回にわたり、プログラム、イスラエル・パレスチナ・日高校生の選出と事前準備教育、宿泊施設や移動手段の手配、資金調達などについて話し合いを重ね、かつ実行に移した。

長崎においても、前回同様、中村神父が早速行動を起こし、グループ受け入れのためのあらゆる準備を調べた。長崎からの高校生選出、長崎プログラム(長崎市長表敬訪問、長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典参加、伊王島へのエクスカーション、「語らいの夕べ」、宿泊、食事、そしてホームステイなど)のきめ細かい手筈が調べられたのは、長崎チームの熱意と努力の賜物である。

(2) プロジェクトの実りを得るための工夫

a. イスラエル・パレスチナ・日本の高校生選出

参加者募集に当たり、

- 1) 「平和の問題に関心と興味を持っていること」
- 2) 「相互コミュニケーションのために必要な一定の英語力があること」を基本的条件として提示した。

日本人高校生については、2006年末、公立高校も含め、いくつかの高校に推薦をお願いした。結局、今回もまた広島学院、栄光学園、長崎純心高校、活水高校から1人ずつとなった。原爆被爆の地からも選ぶことが望ましいと思われたからである。

イスラエル・パレスチナ人高校生については、私たち日本側で参加者を選定することに固執した。それで2007年2月末から3月初めにかけて、私、実行委員長を含むスタッフ4人がイスラエル・パレスチナをおとずれ、Children Without Bordersのイブラヒム神父の協力のもとに、候補者の面接と家庭訪問をした。直接本人や両親たちと面談することによって相互信頼を深め、また本プロジェクトの主旨を良く理解してもらい、将来も何か平和のために働く意志と希望を確認することが目的であった。

最終的に高校生・若者リーダーを含め、紛争の現実を体験しているイスラエル6人、パレスチナ6人を選んだ。自爆攻撃や軍事行動などによって、身近な大切な人を失った者、難民キャンプで生活を余儀なくされている者、「分離の壁」などで自由を奪われている者、兵役を目前にしている者……彼らが、苦しみや恐怖、自由や平和への渴望を生で語ってくれることを期待した。

b. 事前教育 (32ページ参照)

日本人高校生に、イスラエル・パレスチナ紛争の歴史と現状、原爆被爆の実態などを学んでもらうため、3泊4日の事前研修を行った。来日するイパ高校生の話を理解し、対話に加わり、また日本人としての平和メッセージを彼らに伝えるために必

要なことだった。かなり厳しいプログラムであったが、高校生たちはくじけそうになりながらも、懸命についてきてくれた。

しかしそれだけでは不十分だったので、研修後ほぼ2週間ごとに、イスラエル・パレスチナ紛争、人権問題などをテーマにした英語の記事を与え、英語でレポートを出してもらった。彼らにとって紛争の実態についての認識と知識を深め、英語の語彙を増やすために大いに役立った。そのレポートにコメントをつけ指導していく上で、前回の参加メンバーである現大学生(石黒朝香、滝川理紗、横山雄一)に関わってもらった。これは初めての試みであったが、高校生と若いリーダーたちの成長にも寄与したと思う。

イスラエル・パレスチナの高校生たちは、選出後数回イブラヒム神父のもとに集まり、アントニー、ヤニーヴ(引率者・ファシリテーター)とともに、セッションを開いた。紛争に苦しむ互いの立場を少しでも理解し、日本について学ぶためであった。事前にこうして双方の高校生たちが交流し、多少とも心を開き始めたことは、素晴らしいことだった。

c. エルサレム直前準備 (38ページ参照)

7月中旬私、井上(実行委員長)は最終準備のため、エルサレムを訪問した。目的は、1)「先方のスタッフとプログラムについての打ち合わせ」2)「高校生と両親に、プロジェクトの主旨、プログラム内容、参加条件、責任の所在などを明確に説明の上、本人の最終的な参加意志確認と保護者の承諾を得ること」、3)「日本入国ビザが必要なパレスチナ人のためにビザ申請手続を行うこと」などであった。

いろいろな困難はあったが、プロジェクトの円滑かつ確実な実施のためにどうしても必要なプロセスであったと考える。

(3) 資金調達 (26ページ参照)

このようなプロジェクト実施に当たり、ネックの一つは資金調達である。

前回各方面から実に大きなご支援をいただいた経験から、当初私たちはそれほど心配していなかった。いろいろな団体への助成金の申請、一般の方々への支援要請(パンフレットとポスター作成、配布)など、前回と同じように募金活動を開始した。ところが、一般募金の状況が思わしくなく、大変心配した時期があった。何度も予算の見直しをし、何とか支出を必要最小限にし、スリムにすることを心がけた。

幸いなことに助成金交付の決定通知がいくつか届き、一安心した。またプロジェクト実施直前になって、一般の方々からの支援金が増え、さらにいくつかの団体から寛大な支援金をいただいた。おかげで収支のバランスがとれ、滞りなくプロジェクトを遂行することができた。

しかし次回から、どのようにもう少しスムーズに資金を調達するかが課題の一つである。

2. イスラエル・パレスチナ・日本の高校生との旅を振り返って

(1) 「新しい種蒔き」

日常生活の中でイスラエルとパレスチナの若者たちが、出会って対話することは、ごくわずかな例外を除いて、ほとんど不可能に近い。まして互いに友人となることなど考えられない。長年紛争に苦しんでいる両親や学校の先生など大人たちの言うことを鵜呑みにし、また情報操作をいとわないメディア報道に影響されて、彼らは相手を敵対するものとししか見ることができない。直接に触れ合って話せないことが、なおさら相手に対する不信感や不安や、恐怖の感情を増幅させる。今回のメンバーのほとんどが、このプロジェクトで初めて「敵」と出会った。

そんな彼らが第三国、日本に来て、自由な平和な雰囲気の中で、何の危険も感じることなく、同年代の日本人高校生とともに2週間の共同生活をしたのだ。何もかも初めての環境の中で、当初は多少の緊張もあっただろう。しかしすぐに彼らは互いに打ち解けて、ごく普通のティーンエイジャーらしく、明るく伸び伸びと振る舞い、いたずらをしたり、お茶目ぶりを発揮して周囲を笑わせたりしていた。屈託のないイスラエルとパレスチナの子どもたち、そこへ緊張で固くなっていた日本人高校生が勇気を出して加わり、おぼつかないながらも一生懸命英語を使って、楽しい交流が始まった。

那須高原の雄大な大自然、そして宿泊施設となった「聖ヨゼフ山の家」のシスター方の温かい献身的な奉仕も、さらに移手段を確保してくださった、さいたま教区の司祭方の応援も、高校生一人ひとりをリラックスさせ、心を大きく開かせるのに役立った。

そして茶臼岳登山、知的障害者施設マ・メゾン光星の入所者の方々との素晴らしい交流のひと時などをとおして、一つの輪が生まれ、友情が芽生えていった。

そして彼らは、自己を見つめ、相手を知るためのゲームやディスカッションを重ねた。それを通して、先入観を取り去り、ありのままに受け入れ、聴き合うことがどれほど大切かを学んでいった。



成田空港へ出迎え:少し緊張気味の高校生とスタッフ。ウェルカムボードには、アラビア語とヘブライ語で「ようこそ!」と書いてある。

これこそ、平和と和解のために「敵」同士が対話をする時の必要不可欠な姿勢である。

そして少しずつ、イスラエル・パレスチナ紛争の原因や実態、自分たちの苦しみなどについての言及が始まっていった。互いに初めて聴く話であった。それぞれの心に大きな衝撃が走ったこともあっただろう。時には相手の話を素直に受け入れられず、反論に次ぐ反論が飛び出す場面もあった。しかし、そのような困難やわだかまりを乗り越える心のつながりはすでにできていた。

長崎滞在は、高校生にとって強烈なものであった。彼らが長引く紛争の中で日常的に味わっている苦しみや悲しみ、怒りや不安とはある意味で全く異なった戦争の悲惨な現実がそこにあった。彼らは原爆落下中心地で献花・黙祷し、「原爆犠牲者慰霊平和祈念式典」に参加した。原爆資料館ではあまりにも厳しい現実の生々しい写真や資料の前にじっと立ちつくしていた。さらに語り部・廣瀬方人氏の被爆体験談や、被爆3世である2人の日本人参加メンバーの話などに心を激しく揺り動かされた。

こんな衝撃的な体験を通して、イスラエル・パレスチナ・日本の若者たちは、自分たちの取るべき道は、戦争や紛争、対立や憎悪の道ではなく、平和と和解の道であるという確信を持ち、「平和

のために働く者」となる決意ができたと思う。それは後述する「語らいの夕べ」で、彼ら自身が作成し、発表した『平和宣言』(2ページ参照)に如実に現れている。

なお、長崎市のご好意により、「原爆犠牲者慰霊平和祈念式典」において、イスラエル人高校生2人とパレスチナ人高校生2人が並んで献花することができた。この平和のための式典において紛争地の若者がともに花を捧げ、平和を誓う姿は、大きなインパクトがあった。

長崎ではこの他にも、伊王島エクスカージョン、2泊のホームステイなど楽しく充実したプログラムが組まれていた。長崎チームの尽力と、CANの高校生たちの献身的な働きのおかげである。このプロジェクトに関わってくださった長崎の人々の温かいホスピタリティが彼らの心にしみたことだろう。

長崎日程の最後に、〈平和への渇き〉をテーマに「語らいの夕べ」が催された。第1部はイブラヒム神父の講演、第2部は高校生たちの平和メッセージ発信であった。(55ページ参照)

最後の東京滞在は、振り返りと総括の時。JICA 東京センターで充実した、しかし波瀾に富んだ2日間を過ごすことができた。

まずは、長崎から羽田に到着してからすぐに、待ちに待った自由行動。それぞれ日本人高校生やスタッフに連れられて、ディズニーランド組、浅草や江戸博物館見学組、はとバスでの東京見物組など、思いっきり楽しい時間が持てた。

最後のセッションでは、次の5点がテーマとなった。それは、1)「もう一度友情の絆を確かめ合うこと」、2)「それぞれがこのプロジェクトで得た実りを振り返るこ



イスラエル・パレスチナ・日本の高校生たちのアイスブレイキングゲーム。(那須・聖ヨゼフ山の家)

と)、3)「イスラエルとパレスチナが共存・共生していくためには、今後どのような道を歩むべきかを話し合うこと」、4)「自分たちがこれからどんな姿勢で平和活動に取り組むのかを具体的に見極めること」、5)「最後の『語らいの夕べ』で日本の支援者に発信する平和メッセージを準備すること」であった。

最初の4点については建設的な話し合いが進み、非常にうまくいったと思っていた。ところが思いがけず、最後に最大の試練が待っていたのである。

プロジェクトの実りとしての最後の「平和のメッセージ」を発信するに当たり、「語らいの夕べ」に出席してくださる方々に、冒頭にその背景となるイスラエル・パレスチナ紛争についてお話しすべきではないかという提案がスタッフ側から出された。するとイスラエルの高校生がそれに過剰に反応した。この2週間でせっかく仲良くなったのに、今こでもう一度問題を蒸し返したくないから自分たちが話すのは嫌だし、それにまたイブラヒム神父が話すのでは、中立性が保てるかどうか疑問だというのである。それに対して今度はパレスチナの高校生が激しく反論した。イブラヒム神父に対する侮辱はゆるさないと。

一時は騒然となって、せっかくこの12日間で築き上げてきたものが一瞬のうちに崩壊したかと心

配した。友情や対話によって、心の傷が少しはふさがったように見えていたが、実はそれは表面的なものだった。生まれた時から心に刻み込まれてきた不安感や抑圧感、憤りや憎しみは、たった12日間楽しい時をともに過ごし、対話をしただけでぬぐい去れるものではないことを思い知らされたひとこまであった。

幸いなことに、混乱はイブラヒム神父やスタッフの介入によってすぐにおさまり、子どもたちは冷静さを取り戻し、騒ぎを起したことに對し素直に謝罪した。

この出来事は、すべてのスタッフと高校生たちにとって貴重な体験であった。彼らは紛争の現実には引き戻され、自分自身の弱さと向き合わざるを得なかった。「平和への道」は決して甘いものではなく、多くの苦しみと、そしてゆるしと和解の道であることを身をもって体験したのである。

「語らいの夕べ」での高校生それぞれの平和メッセージ(55ページ参照)および共同の『平和宣言』(2ページ参照)は、この辛い体験があったからこそ、彼ら自身にとってより真摯なものとなり、今後みんな協力して働こうという決意が一層堅固なものになったと思う。

(2) 日本人高校生参加の意味

非常に大きな意味があった日本人高校生の参加について、ここで一言触れておきたい。

まずイスラエル・パレスチナの高校生にとっては、厳しい対話の際にも日本人の中立的存在は、とても大きな助けとなった。

また日本人高校生にとっても、この2週間は学校では得られない貴重な平和教育の体験であった。普段彼らは平和とは何か、戦争とは何かなどと考えるチャンスがあまりない。まして今現実には紛争のただ中に巻き込



「マ・メゾン光星」の入所者と楽し交流するアントニーとレナート。

まれていて日々苦しみを体験している同世代の若者と出会う機会など皆無とっていい。イスラエル・パレスチナの高校生の自由と平和と安全を求める心の叫びを聴いた時、彼らは大きな衝撃を受け、涙を流した。「友」の痛みや苦しみを分かち合い、共感できるようになったのである。そして自分たちがどれほど恵まれた環境にいるかを、強く自覚したであろう。

と同時に、紛争地からやってきた彼らが全く屈託のない普通のティーンエイジャーであることを発見した。そして異なる民族、異なる文化、異なるメンタリティーを超えて互いに良き友人になれることを体験して、感動したに違いない。そして彼らは言う。もはや「友の平和の問題」に無関心ではいられないと。

ことばの障害も小さいものではなかった。日本人高校生にとって英語の生活は大きな負担だったと思う。しかし、最初はなかなか会話についてい

けなかった彼らも、勇気を持ってよく頑張った。とつとつとした英語をみんな忍耐強く聴きあった。どうしても難しい時はファシリテーターや通訳の助けがあった。

(3)「若木の成長」前回メンバー参加の意味

2005年のプロジェクトに参加した高校生のうち、日本からは石黒朝香、滝川理紗、横山雄一が、パレスチナからはヤクブ・ガザウィがリーダーとなった。イスラエルからは前回メンバーのほとんどが兵役についているため、タリ・バレルがリーダーとして初参加した。

とくに日本人大学生は、準備段階から、実行委員会の一員として、またプロジェクト実施段階では、同行スタッフおよび高校生たちを助けるリーダーとしての働きは目覚ましかった。いつも若者らしい初々しい感性と発想でイニシアティブを取り、他のスタッフとともに生活面で高校生たちの世話をし、



長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典参列後、平和祈念像の前で。

あるいは対話を導いていってくれた。そして高校生たちの対話にも活発に参加してくれた。

ただ彼らとしては、プロジェクト実施の過程で自分たちがスタッフなのか、リーダーなのか、あるいは参加メンバーなのか、役割がはっきりせず戸惑うこともあっただろう。さらに事前の打ち合わせがほとんど不可能であった、イスラエル・パレスチナ人リーダーとの連携が難しかったかもしれない。これは今後考慮すべき課題の一つである。

しかしいずれにしても、彼らの「平和」のために働こうという意欲と熱意には頭が下がった。2年前に蒔いた種が力強く芽を出し、大きく育ってくれた証拠であり、スタッフ一同大変心強く思っている。

(4) ファシリテーターの活躍

今回の新しい試みの一つは、「ファシリテーター」を設けたことである。日本側としては、実行委員の中から2人、英語が堪能な濱田壮久神父（彼は2005年にもリーダーとして関わった）と松本みどりがファシリテーターとして選ばれた。またイスラエルとパレスチナ側からは今回引率者として来日したアントニー・ハバシュとヤニーヴ・シェンハヴがその役割を担ってくれた。いずれも若者たちの対話と交流を導いていくために非常に豊かな発想と経験を持っている青年である。4人のそれぞれの特長と持ち味を生かした連携は、対話と交流プログラムの遂行に大いに役立ち、彼らの熱意とエネルギーは、高校生たちの心を大きく開かせた。

とくに教育プログラムのエキスパートであるヤニーヴのおかげで、ゲーム感覚の手法を大いに取り入れ、高校生たちの自己認識、相手の受け入れ、理解を容易にした。これには、とくに他のアクティビティとのバランスに関して賛否両論ある。しかしこの手法のおかげで、最初は個の集まりだったものを徐々にグループとしてまとめ、さらに心のつながりのある「コミュニティ」を形成することがより容易にできたと思う。



平和祈念式典で、揃って献花したイスラエル・パレスチナの高校生。
(左から：ジハド、アレクサンドラ、ナディーヌ、アヴィシャグ)

問題点はある。それは、互いに遠隔の地にいるために、意思の疎通が十分にできていなかったことである。それを埋め合わせるために、プログラムの進行に合わせて、その都度スタッフミーティングの時間を取り、振り返りと打ち合わせを行った。しかし時間的制約もあって、思うようにできなかった場合もある。これも今後改善すべき課題の一つであろう。

(5) 平和のメッセージの発信

「語らいの夕べ」と「平和宣言」(55ページ参照)日本の一般の方々や支援者の方々に、本プロジェクトの実りとしての「平和のメッセージ」を発信するために、長崎と東京で〈平和への渴き〉をテーマに「語らいの夕べ」を催した。第1部はイブラヒム神父の講演「それでも平和への道を歩む」、第2部はイ・パ・日の高校生による「平和メッセージ」である。そして最後に高校生たちはみんなで自主的に書いた「平和宣言」を読み上げた。

来場者の数が期待したほど伸びなかったことが悔やまれ、お知らせの方法など今後の大きな改善点の一つである。

しかし来場者からは、「真摯な若者たちの姿に非常に大きな感銘を受けた」「これからもっと平和

の問題に関心を持ちたい」「戦争や紛争に苦しむ子どもたちにもっと目を向けていきたい」などの声をいただいた。実際若者たちが懸命に平和への道を模索する姿は、日本の人々にとって大きな証になると思う。

3. 今後の展望と結論

今回のプロジェクトは、2005年に無我夢中で耕し、種を蒔いた土壌の上に立って、「新しい平和の種蒔き」と「若木のさらなる育成」というプロジェクト本来の目的を果たし、大きな成果をもって終了した。

現在エルサレムでは、イブラヒム神父と「Children Without Borders」(本プロジェクトの共催者)のもとに、今夏来日したイスラエル・パレスチナの高校生たちが、さらに「平和の学び」を続けようと、毎月定期的集まることに決め、実行している。9月の集まりでは、イブラヒム神父が、「Children Without Borders」内での「平和の学校」(Peace School)創設を宣言したということである。彼らが日本で学んだことをバネとし、糧として、自分たちの国で手を取り合って具体的な行動を起こし、継続してくれること、これこそ本プロジェクトの目指すところである。

日本人高校生たちも平和のメッセンジャーとなる

べく頑張っている。ある者は学校の文化祭で自分の体験を発表し、あるいは学園報に記事を書き、自分が出場するスピーチコンテストのテーマとして取り上げたりしている。そしてリーダーとして参加した大学生たちも、今も学業の合間にNPO法人の活動に参加し、スタッフを支えてくれている。

このように若者たちは各地で、それぞれの心に芽生えた平和のために働く決意のもとに活発な動きを見せている。

また2008年3月には、前回と同様日本人高校生のイスラエル・パレスチナ訪問を予定している。彼らにとってイスラエル・パレスチナを訪れて、すでに「平和」のために始動している高校生と再会の喜びをともにし、現地の人々と触れ合い、紛争の実情を知ることは、大きな意味がある。さらに高校生たちが国境、人種を超えて「平和への道」を見いだそうと努力する姿を、実際に紛争地の人々に見てもらふことは強烈なメッセージとなろう。日本人高校生がささやかながらも「平和の架け橋」になれる大きなチャンスだと思う。

もちろんこのような活動は、大海の一滴に過ぎない。しかし紛争地のこの若者たちのように具体的に行動を起こし、自分たちの間で、自分たちの周りに実際に「平和をつくる」こと、それこそまことの平和への第一歩、大きくは中東和平へとつながる確実な道だと私たちは確信している。

まずは、今年のプロジェクトは、前回より、豊かな実を結んだと言える。もちろん反省点、改善点は多々あり、今後は検証と工夫を重ねなければならない。こうして蒔かれた種が今後芽を出し、花を咲かせ、豊かな実りをつけるよう、実行委員とスタッフ一同、さらに力を尽くしていきたい。

そして何より、このプロジェクトの実施を可能にくださったすべての方々に、心からの感謝を申し上げて、ご報告を終える。



帰国後早速ミーティングを始めたイスラエル・パレスチナ高校生とその両親たち。(エルサレム・カトリック教会にて)

長崎実行委員会の総括

長崎実行委員長 中村 満 神父



1. 事前準備について

A. 反省点

- ・長崎日程に関する準備はほとんど調べたつもりであったが、予定の下見などが天候に左右され未実施のものもあった。
- ・高校生主体で準備に取り組んだので、曜日、時間の制約があり、準備不足のところもあった。
- ・前回からするともう少し準備の時間を取るべきだった。

B. 評価

- ・前回同様、純心、活水の高校を通して協力希望者を募ったので、意欲のある生徒たちが集まり、よく協力してくれた。
- ・前回の資料等があったので、準備しやすかったが慢心したところもあったようだ。
- ・長崎市と関連する諸行事については、前回の報告書などがあり、市側も対応しやすかったように見受けられた。
- ・事務局としては、前回同様、入口仁志氏の協力が大きかった。

2. 実施にあたって

A. 反省点

- ・夏日の暑さは予想していたが、もう少し配慮が必要だった。特に式典について。
- ・語り部との質疑応答の時間が不足したこと。
- ・「語らいの夕べ」の動員が、あまりにも少なかったこと。

B. 評価

- ・前回よりも長崎の高校生たちが関わる日程を組んでいたが、よく協力してくれた。
- ・長崎市の対応が好意的で、市関連の日程がスムーズに行えた。
- ・資料館の見学、語り部による話は、原爆の現実と

その問いかけを伝えられたと思われるが、もう少し消化する時間が必要かもしれない。

- ・ホームステイを快く引き受け協力してくれた。
- ・関わってくださった人々にイスラエル・パレスチナのことを少しでも伝えられた。

3. プロジェクトを終えて

① 関係者への感謝

イスラエル・パレスチナの高校生が、今回も長崎を訪れてくれたことに感謝したい。素晴らしい協力者だった純心・活水高校の生徒たちにとっては、忘れがたい体験となったに違いない。また、両国について考える機会を得たことは関わった者たちに大きな影響を与えたと思う。両校の関係者に深く感謝したい。また、種々の機会に協力してくださった善意の方々にも深く感謝したい。

② プロジェクトの実り

協力してくれた生徒たちは、事前の学習をはじめ、実際の出会いと交流を持つことができ、貴重な体験を積んだと思われる。中でもホームステイを受け入れてくれたので、ある程度の交流ができたのではないかと考えている。

後日、前回のメンバー2名と今回の高校生との会合を開けたことも貴重だったと思っている。平和をつくる子どもを育てるプロジェクトの目的に近づいた。

③ 関係先への感謝

長崎市庁、原爆資料館、ホテルなど、関係先のプロジェクトへの関心が高く、協力的に対応していただいた。紛争当事国への関心、理解を深めるうえで、良い機会となったと思われる。関係先の各位に感謝。

4 プロジェクトの準備

プロジェクト実行委員会の立ち上げ

2005年の「イスラエル・パレスチナ・日本——平和をつくる子ども交流プロジェクト」に参加した高校生たちが、その後、大きく成長して当法人の活動に積極的に参加している。この実りをより確かなものにし、さらに新しく平和の担い手となる若者を育

てるために、実行委員会を発足させ、2007年8月の実施に向けて、準備を始めた。

今回のプロジェクトは、那須高原、長崎、東京と場所を変えながら3段階で進むこととなり、実行委員会は東京と長崎にそれぞれ置かれた。

'07平和をつくる子ども交流プロジェクト実行委員会の編成

2006年7月26日(水)に、実行委員会を立ち上げるための会議を実施した。編成は下記の通りである。

実行委員長：井上 弘子

実行委員：鈴木 信一 猪俣 一省 濱田 壮久 山崎 榮太郎 山崎 久美子
大屋 和江 小西 一枝 後藤 秀次 磯部 雅子
松本 みどり 葉山 文子 岩田 可愛 中山 宏 中山 夕里亜
新 直己 大屋 菁示 (広報) 小西 羊一 (会計)

リーダー：石黒 朝香 滝川 理紗 横山 雄一

開催期間：2006年8月20日(日)～2007年12月2日(日) (全20回)

長崎実行委員会

実行委員長：中村 満

事務局：入口 仁志 辻 喜美子 中村 満

高校生スタッフ：中村 茉莉菜 川原 史織 江藤 礼 今村 江里加
矢竹 絵里 佐藤 真朋 小野 亜耶 北里 綾香

長崎での準備経過

1. プロジェクト参加高校生と協力高校生の人選……12月

- ① 純心女子高等学校、活水高等学校に参加高校生（各1名）の推薦を依頼する。
- ② 同時に、長崎日程のスタッフとして協力してくれる高校生の推薦も依頼する。

2. 実行委員会の準備……1月

両校からの推薦を受けて、純心から5名、活水から3名（プロジェクト参加高校生を含む）の高校生をメンバーとし、若干の大人の協力者を加えて、実行委員会を構成するように準備に入った。

3. 実行委員会

① 第1回……3月10日（土）

- 1) メンバーの顔合わせ 高校生、入口、中村神父
- 2) 日程の原案、ホームステイ、両国についての事前勉強などを話し合う。

② 第2回……3月23日（金）

日程についての要望、ホームステイ先の打診などを検討。

③ 第3回……4月7日（土）

日程案の検討、ホームステイ先の選定、主な担当の割り振りなどを協議。

④ 第4回……4月21日（土）

事前研修の報告、担当分野の進捗状況・ホームステイ先の確定状況の報告など。

⑤ 第5回……5月19日（土）

長崎日程の詳細についての検討、準備の進捗状況の報告、ホームステイ先、伊王島の下見についての話し合いなど。

⑥ 第6回……7月20日（金）

最終日程案の確認、ホームステイ家族への説明と依頼、下見の報告など。

⑦ 第7回……7月28日（土）

最終準備の確認と担当作業の進捗状況の報告。

（公式の会議としては7回までで、8月に入ると各自の作業状況に応じ、任意でセンターに集まり、連日準備し、実施日に備えた）

担当 中村 満

募金活動と助成・協賛・後援のお願い

一般募金活動

2007年1月と5月に、パンフレット(4万部)とポスターを全国配布。対象は、NPO法人「聖地の子どもを支える会」の支援者約1500名、全国カトリック教会約800カ所、その他。

協賛の申請

独立行政法人 国際協力機構 (JICA 地球ひろば)

助成の申請

独立行政法人 日本万国博覧会記念機構

独立行政法人 国際交流基金

カリタスジャパン

後援のお願い

駐日イスラエル大使館

駐日パレスチナ常駐総代表部

サンパウロ

カトリック長崎大司教区

カトリック東京大司教区

カトリックさいたま司教区

カトリック新聞社

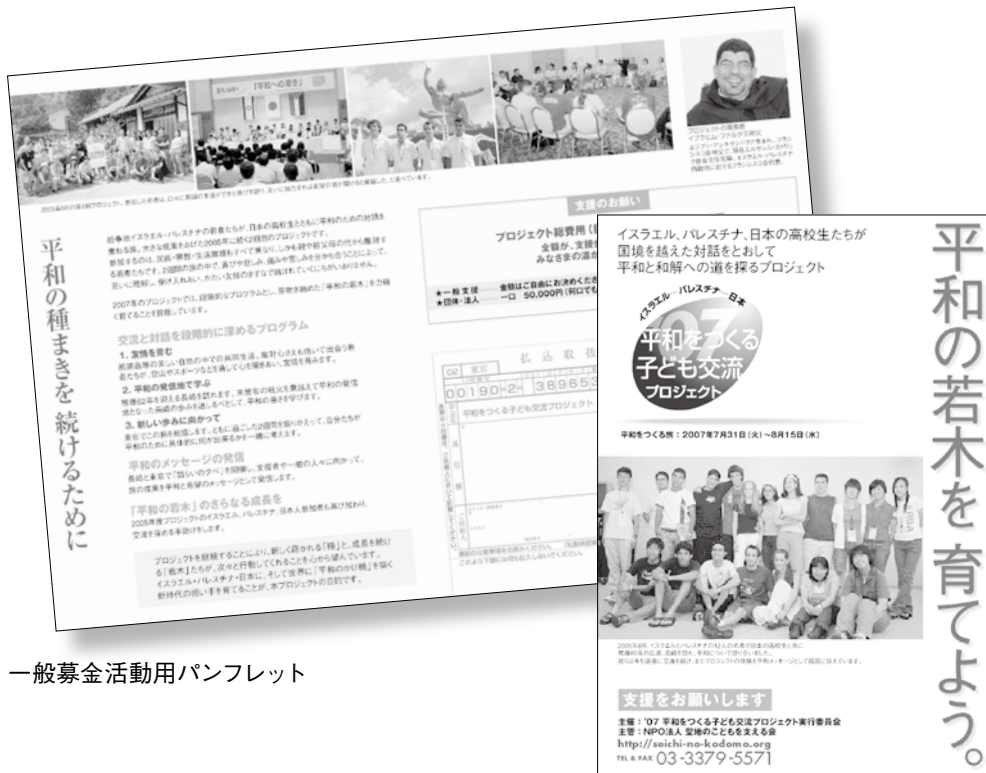
女子パウロ会あけぼの編集部

ドン・ボスコ社

純心女子高等学校

活水高等学校

真生会館



一般募金活動用パンフレット

チャリティコンサート

資金調達のために「講演とゴスペルコンサート」とイスラエル大使館における「チャリティコンサートとディナーの夕べ」の二つを実行委員会として行った。この他に実行委員のメンバーでありピアノ

ストでもある岩田可愛が友人のヴァイオリニストとともにジョイントコンサートを開催し、その収益をすべてプロジェクトのために寄付した。



コンサートで歌う瀬田の丘ゴスペルファミリー。
(六本木フランシスカン・チャペルセンターにて)

講演とゴスペルコンサート

日時：2007年3月24日(土) 2時～5時30分

会場：六本木フランシスカン・チャペルセンター

講演：「パレスチナの現状と若者への希望」

ワリド・アリ・シーム氏(駐日パレスチナ常駐総代表部 代表・大使)

コンサート：『瀬田の丘ゴスペルファミリー』

広報活動：チラシ 2,000枚作成

カトリック新聞告知板掲載

「オリーブの木」22号('07/2月発行)とHPに掲載。

六本木周辺の中東料理のレストランなどにチラシを配布。

チャペルセンターでも日曜にチラシ配布とチケットの販売。(2回)

チケット：前売り400枚作成し(2,000円/1枚) 実行委員が分担して販売。

プログラム：理事長挨拶と会の紹介 パレスチナ大使講演「パレスチナの現状」

ゴスペルコンサート ティータイム(中東のスナックとアラビックコーヒーをサービス)

コンサートを終えて

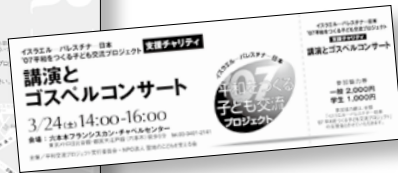
チケット販売数は284枚、当日来場者数は約170名であった。当初チケット販売ではなく、支援金方式を考えていたが、収益を確実にするためにチケットを販売したのは良かった。また瀬田の丘ゴスペルファミリーの菅波昭子氏が、ご好意により多くのチケットを引き受けて販売してくださったのが大きな助けとなった。当日の参加者も予想より多く、前半、パレスチナ大使は「パレスチナの

現状」の講演で、パレスチナの置かれている基本的な立場を分かりやすく説明された。

休憩をはさんだ後半のゴスペルファミリーの演奏は、リズム感のある演奏で雰囲気を盛り上げ、会場は一体となって聞き入った。コンサート後のティータイムにも多くの方が参加してくださり、よい交流の場となった。中東のスナックとコーヒーは、2月イスラエル・パレスチナ高校生選出のため現地を訪問した際に現地で購入した。また他にも中東の菓子の寄付をいただいた。



パレスチナ問題について講演するワリード・アリ・シヤム大使（駐日常駐パレスチナ総代表）。（六本木フランシスカン・チャペルセンターにて）



広報チラシとチケット

チャリティコンサートとディナーの夕べ

この催しは、2005年と同様、イスラエル大使ご夫妻のご好意によって行われた。

日時：2007年6月12日(火) 6時～8時45分

会場：イスラエル大使館

募集人数：80名(プロジェクトスタッフも含めて)

広報活動：参加人数が限られているので、大きくは宣伝しなかった。

「オリーブの木」23号('07/5月発行)に掲載。「道の会」*で募集。

*道の会…NPO法人「聖地のこどもを支える会」の発端となった、聖地勉強会・巡礼企画の会。
メンバーの中に多数の支援者がいる。

東京近郊の支援者約250名にはがきで案内。知り合いに電話で案内。

参加費：10,000円

プログラム：

- ① 上原令子氏(ゴスペルソングシンガー)の歌とトーク。
- ② ディナーの夕べ。



心に響く歌を歌うゴスペルシンガー上原令子さん。
(イスラエル大使公邸ホールにて)



エリ・コーヘン前駐日イスラエル大使ご夫妻。聖地のこどもを支える会からの感謝の品をご覧になる。

コンサートとディナーの夕べを終えて

チケット販売数は80枚、当日来場者数は約78名であった。今回は2度目ということもあり、緊張の中にも和やかな雰囲気の中で会は進行した。上原令子さんの人柄がにじみ出る温かい歌と語りは、華やかさの中にしみじみと人の心を打つものがあり、かなしみ、よろこび、嘆きのこころを昇華した平和への想いを深く感じさせるものであった。

第2部の大使ご夫妻ご好意の美味しく楽しいディナーの夕べは、大使公邸のホールと中庭を開け放って行われた。椅子とお皿をもって自由に座り、イスラエルワインとおいしい中東料理を参加者全員が堪能した。大使ご夫妻はこの8月で任期が終わりイスラエルへ帰られたが、最後までいろいろとお世話になった。エリ・コーヘン大使ご夫妻にあらためて深く感謝申し上げる。

担当 小西 一枝

バイオリンとピアノのデュオコンサート

5月19日(土)、早稲田奉仕園スコットホールにて、バイオリン(深堀純子)とピアノ(岩田可愛)のチャリティコンサートを行った。プログラムはモーツァルトの「ピアノとバイオリンのためのソナタ」や、ベートーヴェンの「ロマンス」、ショパンの「子犬のワルツ」、メシアンの「主題と変奏」などで、最後

に会場の皆さんと一緒に「ビリーブ」を歌った。コンサートの開催決定が急だったため、動員が少なかったのが残念だったが、皆さん楽しんでいただけたようでよかった。コンサートの収益金は全額寄付した。

担当 岩田 可愛



バイオリンとピアノのデュオコンサートで演奏する深堀純子さん(左)と岩田可愛さん(右)。(早稲田奉仕園にて)

参加高校生の選出

日本の高校生

日本人参加高校生として、2006年8月の実行委員会で、各地から4名を選出することを決定した。さらに前回の参加者数名に、リーダーとして高校生をまとめていく役割を担ってもらい、こうして新しい種蒔きとともに若木の成長を図ろうとした。選出方法として一般公募も考えたが、募集人数が少ないこと、その方法が難しいとの意見があり、数人の学校長や実行委員の推薦により人選を行うこととなった。

募集条件として、

1. 平和の問題に関心を持っていること
2. 相互交流のために必要な一定の英語力があること
3. プロジェクトのスケジュールに参加可能であり、参加や費用負担に関して保護者の承諾が得られること

を挙げ、募集を行った。

まず、長崎実行委員の中村神父を通して、純心女子高等学校と活水高等学校からそれぞれ1名ずつ女子の候補が挙げられた。次に男子2名についてはいくつかの学校に募集要項を送って応募をお願いしたところ、広島学院高等学校と栄光学園高等学校から1名ずつ推薦があり、2007年1月28日の第6回実行委員会にて次の4名を参加高校生として決定した。

川原 史織 (活水高等学校 2年)

中村 菜梨菜 (純心女子高等学校 3年)

竹山 修平 (広島学院高等学校 2年)

安井 一馬 (栄光学園高等学校 2年)

イスラエルとパレスチナの高年生

イスラエルにおける責任者イブラヒム神父に参加高校生の候補者を選んでもらい、2007年2月、実行委員長と実行委員3名が現地に赴いた。エルサレムでミーティングを行うとともに、面接や家庭訪問をし、最終的にイスラエルから5名の高校生と1名のリーダー、パレスチナからも5名の高校生と1名のリーダーを決定した。(38ページ参照)

イスラエル

Alexandra Boskovich

(アレクサンドラ・ボスコヴィッチ)

Avishag Yosephyan (アヴィシャグ・ヨセフィアン)

Gal Rosenbluth (ガル・ローゼンブルート)

Noam Shani (ノアム・シャニ)

Peleg Bar-On (ペレグ・バルオン)

Tali Barel (タリ・バレル) 《リーダー》

パレスチナ

Jehad Farraj (ジハド・ファラージュ)

Nadine Handal (ナディーヌ・ハンダル)

Nardine Jildeh (ナルディーヌ・ジルデ)

Renato Bandak (レナート・バンダック)

Yousef Rantisi (ユーセフ・ランティシ)

Ya'coub Ghazzawi (ヤクープ・ガザウイ)

《リーダー》

担当 中山 夕里亜

参加高校生の事前教育

日本の高校生の事前研修

目的

- ・イスラエル・パレスチナ問題について理解を深める。
- ・平和についての理解を深める。
- ・プロジェクトに参加する仲間との絆を深める。

概要

日時: 2007年3月28日(水) ~ 31日(土)

場所: JICA東京国際センター研修施設
(東京、幡ヶ谷)

参加者: 日本人高校生4名 他 リーダー、講師、
実行委員会スタッフ、支援者など 約30名

高校生事前研修スケジュール (2007年3月28日~31日)

時間	3月28日(水)	3月29日(木)	3月30日(金)	3月31日(土)
8:00		朝食	朝食	朝食 共同作業
9:00		プロジェクト概要説明 (井上)	話し合い 「私にとっての平和」	
10:00		前回プロジェクトの紹介・ 体験談など	「イスラエル紹介」 (イスラエル大使館広報官)	ビデオ鑑賞 「遺族たちの対話」
11:00		ビデオ鑑賞 「アウシュビッツ収容所」		ディスカッション 「ビデオを観て」
12:00		昼食	昼食	昼食
13:00		イスラエル・パレスチナの 歴史と現状について (井上)	英語でディスカッション (Sr. ノリ)	結団式「8月へ向けて ~私たちの決意」
14:00	スタッフ集合・準備	休憩・おやつ	休憩・おやつ	
15:00	高校生集合	「パレスチナ問題」解説 (パレスチナ総代表部)	レクリエーション	解散
16:00	自己紹介 オリエンテーション		肥塚神父講演会 「私にとってのヒロシマ」	
17:00	DVD鑑賞 「エルサレムの歴史」	分かち合い 「今日の話聞いて」 (濱田神父他)		
18:00		夕食	夕食	
19:00	夕食	ビデオ鑑賞 「イスラムの新しい風」	共同作業	
20:00	鈴木神父 講話	一日の振り返り	スタッフ打ち合わせ	
21:00	スタッフ打ち合わせ	スタッフ打ち合わせ		

研修の経緯

3月28日(水)

高校生、リーダーやスタッフが初めて顔をそろえ、自己紹介をした。特に高校生4名は緊張しているようにも見えた。その後エルサレムについてのDVDを観て、聖地の様子や、今聖地で起きていることを知った。夕食後は鈴木神父の講話があり、そのなかで、「出会う人、一人ひとりを受け止めるために、相手の言うことをよく聴くのだが、ただ言葉を聴くだけでなく、その人が生きている文化を聴くことが大事」ということが印象的だった。「この事前研修で自分が何を学び、夏のプロジェクトまでに何を準備しなければならないのか」ということや、「なぜこのプロジェクトはあるのか」ということを問われ、これについて意見交換をした。

3月29日(木)

最初に井上実行委員長より、このプロジェクトの概要説明があった。前回のプロジェクトが「新しい平和の種蒔き」とすると、今回のプロジェクト

は加えて「若木の成長」という目的もある。また昨日の話とも重なるが、「痛み、苦しみを共感しながら聴く」ことの大切さが語られた。続いて前回プロジェクトの参加者が紹介され、プロジェクトの様子や、その後自分がどう変わったのか、など体験談が話された。「事前の勉強不足(英語や世界史など)を痛感したので、ぜひ納得のいく勉強をして準備してほしい」というアドバイスや、「イ・パについて知ることも大事だが、身の回りの平和についても考えておいてほしい」など、参考になる貴重な体験を聞いた。

その後、アウシュビッツ収容所のビデオを観た。内容は重く、衝撃的だった。

昼食後、イスラエル・パレスチナの歴史と現状についての話があった。長く、そして複雑な歴史を短時間で理解するのは至難の業だが、みな必死で理解しようと頑張っていた。休憩をはさんでパレスチナ総代表部一等書記官ヒシャム・ナサール氏と、イヤッド・アルヒンディ氏を迎え、パレスチナの歴史や、今抱えている問題などを当事者から伺うことができた。ヒシャム・ナサール氏はガザ



事前研修を終えて：日本の高校生とスタッフ。(東京JICAにて)

地区出身で、自身も大変な思いをして日本とパレスチナを行き来しておられる。わたしたちの想像を超えた不自由な生活、現実には起こっている問題を生々しく語られた。日本人の高校生には、「イスラエル・パレスチナの子どもたちと、復讐の文化の話でなく、平和の文化の話をしてください。平和のために貢献してほしい」とメッセージを残された。引き続き分かち合いでは、今までの研修内容を意味付けたり関連付けたりしながら、自分たちなりに整理する作業をした。

夕食の後、「イスラムの新しい風」というDVDを観た。ビルインという地域で起こった住民抗議行動を克明に記録したものだが、暴力に対する非暴力の抗議を、イスラエル側からとらえていることが特長である。午後も話を重ねながら、皆食い入るように観ていた。一日の振り返りでそれぞれの思いを分かち合った。

3月30日(金)

「平和の祈り」を皆で歌って一日をスタートさせた。その後「わたしにとっての平和」について高校生4人が話し合い、それぞれが発表した。「わたし

にとっての平和は、イコール幸せ」、「相手を憎むことから解放されることが自由」、「日本は平和ボケしているが、それでも完全な平和はない」、「食物、命に危険がなく、心配なく生きられることが平和」、「自分の幸せだけを考えるのではなく、みんなの幸せを考え、相手を思いやること、みんなが幸せになって初めて平和になる」などさまざまに語られた。

その後、イスラエル大使館広報官補佐の樋口義彦氏を迎え、イスラエルの歴史や文化について話を伺った。特に分離の壁のことは、昨日のパレスチナ側からの話と落差があるように思えたが、両方の立場から話を聞くことにより、それぞれの立場から物事をとらえることの大事さを学べた。イスラエルの若者は自分をユダヤ人とは答えず、イスラエル人と答え、土地に対する神話などにこだわらず、現実的に物事を考える世代であるらしい。樋口氏から「イスラエル・パレスチナ、とカテゴリーに分けやすいけれど、それを除いて個人と付き合うこと、個と個の対話を大切にしてほしい」というメッセージをいただいた。

昼食後、シスター・ノリを迎え、英語でディスカッションする時間が設けられた。自己紹介やシスターに質問することから始めたが、なかなか言いたいことを英語で表現することは難しく、みんな悪戦苦闘していたようだ。でもこの企画のおかげで、夏までの課題がはっきりと分かったと思う。休憩の後、体育館でリーダー、一部のスタッフとともに卓球やバレーボールを楽しんだ。思い切り動いて、リフレッシュできたようだ。

レクリエーションの後、今度は広島から肥塚神父を迎え、講演会「わたしにとってのヒロシマ」を伺った。神父自身は被爆者ではないが、広島で出会った広島的人間……絶望的な状況でも日々を着実に生きる人々……から勇気を得たそうだ。「広島というレンズ



事前研修での共同作業。「ようやく前が見えてきた」(東京JICAにて)

を通して自分を、世界を見直すこと」、「決して絶望せず、過度の希望も持たず、日々の仕事を続ける」など、広島を通して、人間とはいったい何かを深く考える神父のお話を興味深く聴くことができた。

夕食後、高校生たちは今までの事前研修を踏まえて、そして夏のプロジェクトをどのように迎えたらいいかを考えながら、自分たちの思いをかたちにする共同作業に入った。深夜まで話し合いは続いていたようだった。

3月31日(土)

朝食後、高校生たちは前夜の共同作業の追い込みに入っていた。

DVD「遺族たちの対話」で家族を殺されたイスラエル・パレスチナの人たちが、憎しみや悲しみを対話によって乗り越えていく姿を見た。パレスチナ側、イスラエル側どちらでもない、イスラエル・パレスチナをつなぐ第三の側として奔走する人々を

見ながら、この人たちの活動の目的と、わたしたちのプロジェクトの目的を重ねて考えることができたのではないかと思う。

結団式では、高校生たちが共同作業で作った作品を発表し、一同感動で胸がいっぱいになった。リーダー、スタッフもそれぞれこの研修を振り返り、みんなで分かち合った。

さらに、夏のプロジェクトに向けて英語力を高めるための課題が提示された。この事前研修だけにとどまらず、自分からイスラエル・パレスチナについてさらに学びを深め、自分の意見もはっきり言えるように努力したい、と力強く宣言して、事前研修は終了となった。

感想

3泊4日の短い期間だったが、夏までにどうしても知っておいてほしい内容を盛り込んだ、充実した事前研修だったと思う。高校生たちは、初め



高校生の共同作品「プロジェクトの主旨をイメージ化して」

のうちは必死で食いついているようにも見えたが、次第に仲間やリーダー、スタッフとも打ち解けられた。特に前回の参加者で、今回リーダーとして参加している石黒朝香、滝川理紗、横山雄一がいたことは、高校生にとって非常に心強かったはずだ。さまざまな人たちと関わりながら、みんなこの数日で大きく成長したと思う。最後の共同作品にはこの事前研修での彼らの成長が見事に表現されてお

り、本当にこの研修ができてよかったと、心から思えた。

夏に向けての課題も山積みだが、高校生の決意とやる気に大いに期待したい。スタッフも高校生たちと連絡を密にとることが必要だと思った。

担当 岩田 河愛

日本の高校生への宿題

参加高校生にさらに英語力を養ってもらうために、計6回にわたり宿題を出すこととなった。イスラエル・パレスチナ紛争や人権問題などに関する英文記事や本を読んで、感想や意見を英語で表現し、回答してもらった。それに対して若いリーダーたちがコメントやアドバイスをしてくれたが、この試みは非常に効果的であった。宿題の内容は以下の通りである。

第1回：「広島平和宣言——平和への誓い」

第2回：「僕たちの砦」(エリザベス・レアード著)

第3回：「Guide to The West Bank」

第4回：「Education under Occupation」

第5回：「Without Borders」(イスラエル・パレスチナの国境問題)

第6回：「世界人権宣言(抜粋)」

高校生への宿題を行って

石黒 朝香

事前研修会の後、彼らの英語力向上と現地に関する情報を与えることを目的に、2週間に1度のペースで宿題を課すことになった。内容は、インターネットから引用した英文の記事やコラムを読み、英語で100ワード程度の感想文を書かせる、というものであった。リーダーは提出されたものを読み、コメントをそれぞれにつけることを行った。途中から、感想を書かせるだけでは物足りない、少なくとも高校生たちにとっては書きにくいものもあったので、自分はどう考えるかということも書かせることにした。

最初の頃は、高校生たちもどのように書けばいいのか分からなかった様子で、文章に一貫性が見

られなかったり、戸惑っている様子を感じられた。わたしは特に、自分の意見とそのように考える理由を明確にして書いてもらうことに重点を置いてコメントをつけるようにした。自分がどういう立場であるのか、それを裏付けるものを明確にしなければならぬといことを、わたし自身が向こうの人と接するようになってから、実感していた。これは英語で文章を書く際の重要なことでもあった。次第に高校生たちもコツをつかんできたようで、回を重ねるごとに成長が見られた。最後には、大学生顔負けの文章を書いてくれる人もいた。

反省点としては、何分にも事前研修会で急遽決まったことであったから、明確な計画性もなく目標も持たずに4カ月間進んできてしまったということが挙げられる。

当初は、「英語能力の向上につなげる」「ついで

に、現地の情報も与える」といった流れであった。英語に関しては、リーダーたちがまだまだ勉強中ではあったが、持ちうるだけの知識とコツを伝えることで、最後にはとても読み応えのある文章を書く高校生もいた。

反省点としてリーダー内でもどういふことを基準にコメントをつけるか、というコンセンサスが取れていなかったことが挙げられる。しかし、リーダーもそれぞれチェックする視点が異なっていたので、1つのことばかりコメントするという結果にはならずに済んだと思う。

あとは全体的にもう少し流れのある内容にするべきだったのかもしれない。最初は分かりやすい「分離の壁」についての説明、最後には1つの見解を示している記事を取り上げて考えさせてみたが、例えば、現地の実状を伝えるという情報にとどめ、苦しんでいる人々の直の声を取り上げる、政治的なものを扱う、など最終的に高校生に何を学んでほしいのかもっと絞ることができれば、もっと実りある宿題になったかもしれない。

ともかく、高校生にとっては触れたこともないような情報を英語で読み、感想を書くということを4カ月も続け、学校の勉強との両立でとても苦労したと思うが、やってみて良かったと自負している。一部宿題をやり残した人もいるが、目を通すだけでも何かを得てくれているだろう、と期待している。

高校生への宿題について

横山 雄一

高校生に英文、あるいは日本語の文章を読み、それに対する自分の意見を英語で書いてもらうという宿題を出すというのは、前回のプロジェクトにはない新たな試みであった。そのため暗中模索といった趣であったが、宿題を作る側としてはうまくいったのではないかという実感がある。

第1に、宿題が聖地の状況を理解する、あるいは

は考えるささやかな助けになったのではないかとと思われる。宿題に取り組んでいく中でいろいろな発見があり、それを楽しんでくれた高校生もいたようだが、彼らに問題の多面性を認識してもらえたのではないだろうか。

第2点として、宿題があるということで、高校生にプロジェクトに向けて何らかの準備をする必要があるということを実感してもらえたようである。高校生は忙しい生活の合間を縫って、宿題に懸命に取り組んでくれた。これによって、高校生自身がプロジェクトに真摯に向き合う姿勢になっていったようだ。

そして第3に、英語で自分の意見を書いてもらうことで、自分の言いたいことをより英語で表現しやすくなったと考えられる。確かにたかだか6回の宿題で英語がうまくなるはずはないかもしれないが、普段英語で自分の意見を書くことはなかなかないことであるから、言いたいことを英語で表現する訓練の場に多少はなったのではないか。

また、宿題はスタッフ（特に提出された宿題に対しコメントをする大学生リーダー）と高校生の間のある種のコミュニケーションの媒体として機能した。高校生に近い立場にあるリーダーはその立場ゆえに特に高校生とさまざまな形でコミュニケーションをとり、彼らの気持ちを理解することが求められるが、4日間程度の事前研修で互いを理解し合うのは非常に難しい。プロジェクトの前に連絡を取り合うことが必要なのは明白であるが、通常は日常的な会話に近い内容をやり取りするメールだけでは、深い考え方を知るのは困難である。そのような状況の中、宿題が媒体となることで、リーダーが高校生の考え方を理解することが非常に容易となった。

このような利点が考えられるが、当然、宿題の欠点も指摘できる。宿題は忙しい生活を送る高校生たちにある程度の負担を強いることになる。夜が更けるまで宿題に取り組んだという高校生もいた。また、宿題は洗練されたものであるとは限ら

ず、不出来なものになってしまうこともある。さらに、不出来な宿題ではあっても、それを作ることと高校生から提出された文章にコメントをすることにはそれなりの労力と時間を費やす必要があった。つまり、スタッフ側にもある程度の負担をする覚悟が必要となる。

以上、利点、欠点について書いたが、個人的

には、宿題を出すという試みは継続されるべきだと考える。特に、高校生の考え方を知ることができるという点から今回のプロジェクトでのリーダーのような役割を果たす方が宿題の作成、コメント作りなどに関わることが好ましい。今回のこの試みが今後活かされていくことを願う。

イスラエル・パレスチナの高校生の事前研修

選出された高校生たちは、「Children Without Borders」のアントニー・ハバシュ、ヤニーヴ・シェンハヴを中心に、数回にわたって集まり、両国間

の紛争や日本に落とされた原爆などについて学びと話し合いを重ねて、本番に向けての準備をした。

イスラエル・パレスチナ来日メンバーの渡航準備

2007年7月9日(月)～18日(水)

初めに

井上弘子は、'07 平和をつくる子ども交流プロジェクトに参加するイスラエル・パレスチナの高校生の来日最終準備のために、エルサレムに7月10日夕刻から17日朝まで滞在した。目的は、イスラエル・パレスチナの高校生および保護者たちとの来日前最終ミーティング、共催者 Children Without Borders (イブラヒム神父およびスタッフ)との最終打ち合わせ、パレスチナ人たちの日本入国ビザ申請、家庭訪問などである。最も心配だったのは、パレスチナ人たちの日本入国ビザの取得が間に合うかどうかということであった。わずか丸6日間の滞在には何とも盛りだくさんのプログラムであったが、簡単に振り返ってみたい。

高校生と保護者たちとの

最終ミーティング

7月13日昼過ぎに、エルサレム・ラテン教会(エ

ルサレム唯一のカトリック小教区、主任司祭はイブラヒム神父)に三々五々高校生たちが保護者とともに集まってきた。もうすでに数回事前研修で出会っていたからか、また間近に迫った日本への旅にわくわくしているのか、非常ににぎやかにおしゃべりをしている。同伴してきた親たちも和やかに談笑している。しかしよく見るとまだイスラエル人はイスラエル人と、パレスチナ人はパレスチナ人と主に話している。まだこの段階では当たり前のことだが。

嬉しいことに、イスラエル人リーダーとなるタリ・バレル、ベツレヘムのデヘイシャ難民キャンプから、このグループで唯一のイスラム教徒、ジハード・ファラージュも来ていた。16歳のジハードがキャンプから出てエルサレムに来ることができたのは7年ぶりという。一生懸命片言の日本語で話そうとしている彼はとても人懐こい。他の高校生たちには、3月に高校生選出のためにエルサレム訪問の

際ミーティングや家庭訪問などで出会っているが、この2人には今回初めて会う。

ミーティングはイブラヒム神父と井上の挨拶で始まった。続いて井上が、日本での日程とプログラム（主旨はもう3月に説明済み）と旅行条件（海外旅行傷害保険、責任の所在、持ち物のことなど）を説明し、その後親や高校生からのいろいろな質問に答える時間を設けた。高校生というまだ未成年を受け入れるには、すべてを説明して安心してもらった上で、保護者および本人の承諾を得ることが必要であった。

最後に名物のシュワルマ（ピタパンにそぎ切りにした牛肉と野菜や香辛料をはさんだ一種のサンドイッチ）がふるまわれ、空腹だった彼らは大いに喜んだ。その後教会の屋上に出てすばらしい景色（オリーブ山と金のドーム）を背景に集合写真を撮って、ミーティングを終了。

共催者 CHILDREN WITHOUT BORDERS との最終打ち合わせ

今回のプロジェクトは、イブラヒム神父を責任者とする Children Without Borders との共催である。したがってわたしのエルサレム訪問のもう一つの目的は、イブラヒム神父およびスタッフとの打ち合わせであった。

団長となるイブラヒム神父は、グループ本体より1週間遅れて来日する。イタリアで同時期に行われるもう一つの平和プロジェクトの責任者としてイタリアに行かなければならないからだ。

パレスチナとイスラエルの引率者スタッフとして選ばれたのは、アントニー・ハバシュ（イブラヒム神父の秘書）とヤニーヴ・シェンハヴ（教育プログラムのエキスパート）。いずれも平和活動に深く関



イスラエル・パレスチナからのプロジェクト参加者とその家族（エルサレム・カトリック教会屋上にて）

わっている頼もしい29歳の青年である。

彼らとは、数回にわたって日本でのプログラム日程とその内容および彼らのファシリテーターとしての役割などについて話し合った。

パレスチナ人たちの日本入国ビザ取得

日本入国に際しビザが必要なのはパレスチナ人だけだ。イスラエル国籍を持つものはその必要がない。したがって今回は、アントニーを含め、高校生など7人のためにビザを申請することになった。ビザ申請のためには、テルアビブの日本大使館領事部へそれぞれの身分証明書、写真とともに、一人ひとりのための招待状、招聘理由書、身元保証書、ビザ申請書、保護者承諾書（未成年者のため）、在校証明書などを提出しなければならなかった。その他、当法人の団体概要説明書、プロジェクト主旨書、宿泊先リストなども必要であった。パレスチナ人の身分証明書にはいろいろ種類があって、ジハードやアントニーのようにベツレヘムに住んでいる者はパレスチナ自治政府発行のパレスチナパスポートを持っている。東エルサレム在住者はヨルダン国籍、海外に行くにはイスラエル政

府発行のトラベル・ドキュメント（パスポートではなく、エルサレム住民であることを証明するもの）が必要だ。

当法人が作成するものに関してはどんなに数が多くても問題なかったが、申請者自身が提出しなければならないもの（身分証明書、写真、在校証明書その他）がなかなか揃わず、わたしの短い滞在期間に申請できるかどうか、大変心配した。テルアビブの日本大使館によく行くことができたのは、わたしの帰国日の午前中であった。しかも、わたしの危惧が的中して、1人のトラベル・ドキュメントに3つの不備が見つかってしまい、その段階での申請受理は不可となった。日本へ帰国後、何度も電話で連絡を各方面と取り、いろいろな人の協力もあってやっとテルアビブ出発の前日にビザを取得できたが、やれやれである。

家庭訪問（デヘイシャ難民キャンプ）

帰国前日に、アントニーにベツレヘムのデヘイシャ難民キャンプへ連れて行ってもらった。新しく来日グループに加わることになったジハド・ファラージュの家庭訪問のためである。彼は、グループの中でただ一人のイスラム教徒、祖父の代からこの難民キャンプに暮らしている。この難民キャンプも50数年の間何度イスラエル軍の侵攻に苦しんだ

ことだろう。ろくにインフラ整備もされていない狭い地域にびっしりと建てられた粗末なコンクリートの建物に、今も1万1千人が、肩を寄せ合い、最低限の生活を強いられている。

ジハドの家は大家族で、両親は仕事の関係で不在だったが、おじさんやおばさん、いとこやほとこたちが両手を広げて大歓迎してくれた。貧しく不自由な生活を強いられている彼らだが、アラブ人特有の温かい寛大なもてなしに心が和んだ。きっと自分たちの一人が日本まで行くチャンスができたことを心から喜んでいるのだろう。

終わりに

わたしは今回のエルサレム滞在中のおおかたの目的を果たして、7月17日の夕方の便に乗り帰国した。日本に帰ったら準備最終段階の追い込みに入る。本番まであと2週間、子どもたちが元気で成田に到着してくれることを願う。英語という言語の壁、メンタリティーの違いなど困難が予想される。しかし、一人ひとりの善意と平和を願う心をもって互いに協力しあうことができれば、きっと実り豊かなプロジェクトになると確信している。

担当 井上 弘子



ジハド・ファラージュと家族（ベツレヘム・デヘイシャ難民キャンプにて）

5 プロジェクトの経過

1日目 7月31日 (火)

成田における事前準備

いよいよプロジェクトがスタートする、という期待と不安な面持ちで、高校生、リーダーたち、スタッフが成田空港近くのホテルに集合した。高校生とは3月の事前研修以来の再会だったが、みんなひと回り大きくなっていったような気がして、たくましさを感じた。チェックインのあと、オリエンテーションがあり、この事前準備期間でやらなくてはいけないことを確認し、役割分担などがされた。高校生たちは、明日の出迎えのためのウェルカム・ボード作りに、大学生のリーダーは高校生のサポートをしながら那須で行われる原爆についての話の準備に取り掛かった。他のスタッフは、必要な備品等の買い出しに行くなど、それぞれが忙しかった。

夕食は成田空港内のレストランでとる。少し空港内を散歩し、滞在先のホテルに戻ってからは、那須で行われる各国毎のプレゼンテーションに向けた、日本のプレゼンテーションの準備もした。

明日はいよいよイスラエル・パレスチナの参加者を迎えることとなる。期待を胸に第1日目終了した。

2日目 8月1日 (水)

成田から那須高原へ

高校生たちは、前日仕上げられなかったウェル

カム・ボードを午前中、完成させ、翌日夜に開催されるウェルカムディナーの出し物を準備する。歌を歌うことにする。キーボードとギターの伴奏で歌えるよう、練習した。

昼食後、高校生たちは日本のプレゼンテーションの準備の続きを行った。しかし作業はなかなか進まず、英語でどのようにすれば伝わるのかを考えながら話を準備し、構成を練った。その間、スタッフたちは3日目までのプログラムの確認を行った。

午後4時から結団式を行い、成田空港に移動して、イスラエル・パレスチナの参加者を待つ。その間日本人高校生は緊張して次第に無口になっていった。午後7時頃、イスラエル・パレスチナの参加者が出てきて対面を果たすが、練習した歓迎の挨拶のことばも小さい声になってしまった。しかしバスに乗った後は積極的に話しかけている姿が見られた。イスラエル・パレスチナの高校生たちも



イスラエル・パレスチナの高校生、期待に胸を膨らませて成田空港に到着。



イスラエル(左)とパレスチナ(右)のグループ紹介。(那須:山の家にて)



長旅を終え、疲れている様子であった。

午後11時半頃、那須プログラムの滞在先である「聖ヨゼフ山の家」に到着した。その後、簡単な連絡の後、就寝した。

3日目 8月2日(木)

那須高原

午後 自己紹介とアイスブレイキングゲーム

夕食 ウェルカムディナー

前日までの移動の疲れを考慮して、遅めの朝食で一日が始まる。食事の片づけ及び次の食事の準備も、那須滞在中は自分たちの手で行った。朝食は9時30分に開始。座席をくじ引きとした結果、対話を大いに促進した。食事の前後に「いただきます」と「ごちそうさま」を唱和する。皿洗いは時間がかかったが、みんな積極的に参加した。

オリエンテーション

「聖ヨゼフ山の家」の使用上の注意や、生活上の約束事の確認などを行った。

自己紹介とアイスブレイキングゲーム

鈴木神父と井上実行委員長が、本プロジェクトが目指すところについて話した。その後、円状に椅子を配し、イスラエル・パレスチナ・日本の参加者たちが混ざって座り、自己紹介を行った。アイスブレイキングゲームは、イスラエルからのファシリテーターであるヤニーヴにより行われた。まずボールを使ったゲームを1種類、椅子を使ったゲームを2種類。さらに、3人ずつのグループに分かれ、1人が本当にあった話、2人が作り話をして、他の参加者が誰の話が本当かを判断する”Who tells a truth?”(誰が真実を語っているか?)というゲームをした。高校生だけでなくスタッフも参加し、賑やかなゲームとなった。

ウェルカムディナー

夕方には、那須での会場を快く提供してくださったベタニア修道女会のシスター方や、マ・メゾン光星からお見えになった方々を迎えてのウェルカムディナーが開催された。井上委員長、ヤニーヴ、アントニーの挨拶のあと、乾杯した。みんなでシスター方の心づくしの豪華な料理に舌鼓を打つうちに、会話も弾んだ。食事が一段落してから出し物の時間となった。松本みどり、岩田可愛い2人による日本の歌、日本の高校生による合唱、パレスチナの高校生による国の紹介、イスラエルの高校生によるフォークダンス「マイム・マイム」の披

露が続いた。ウェルカムディナーの後は、スタッフはミーティング、高校生たちは翌日の3カ国による各国紹介のプレゼンテーション準備を夜遅くまでかかって行った。

4日目 8月3日(金)

那須高原

午前 各国紹介のプレゼンテーション

午後 JUSCO探検 出会いを深める集い

夜 原爆の紹介

朝食は8時だが、今日の各国紹介の準備が昨夜遅くまで行われたらしく、集まりがよくない。集まったところで朝食を開始する。時間割の変更が行われ、「各国紹介」は9時15分からとするが、実際に始まったのは9時35分だった。

各国紹介

「日本の紹介」は気候、四季、食事、万人坑、731部隊等、多くの項目をとりあげ、効果的に行われる。「パレスチナの紹介」では、歴史、難民キャンプ、ジハード家の難民としての体験、分離の壁などが紹介された。ホワイトボードを分離の壁に見たて、壁をはさんでのレナート(パレスチナ人)



「分離の壁」を紹介するパレスチナのレナートとイスラエルのノアム。

とノアム(イスラエル人)の対話が興味深かった。「イスラエルの紹介」では、初めにアビシャグたち4名の参加者の生活が、続いてイスラエルの歴史が紹介され、12時30分に終わる。

JUSCO探検

午後は少し息抜き。その後日本の日常生活を知るために、猪俣神父運転のマイクロバスで白河のJUSCOに行く。アイスクリームやお菓子を買う者が目立つ。作務衣を買う日本通もいる。

出会いを深める集い

4時30分からゲームを始める。輪になって座り、ランダムに1、2、3、と10まで数える。数える者がバッティングすると1から始める。とうとう10まで数えられなかった。続いてパントマイム、伝言ゲーム、アイデンティティーゲームをする。このなかで、自分の核を構成しているものが、宗教か、国籍か、歴史(家族史・個人史)か、人間であることかを確認し、みんな異なるものを核としていることを認識する。ゲームを通して自分の傾向を理解するとともに、自分とは異なる価値観を持っている多くの人がいることに気づき、みんなが共通して大切にしているものを出発点として絆を作る必要があることを学ぶ。



ボールゲームを楽しむ高校生たち。こうして一つの心になっていく。(いずれも那須:山の家にて)

原爆の紹介

夕食後、午後8時より「原爆についてのレクチャー」が被爆地出身の大学生リーダーによって行われた。担当は横山(広島)、滝川(長崎) 両名。みんな、真剣に聞き、横山君のお父様からお借りした被爆当時の様子を描いた絵を真剣に見つめていた。

5日目 8月4日(土)

那須高原

終日 茶臼岳登山・乙女の滝観光 夕食後 ディスカッション

茶臼岳登山・乙女の滝観光

猪俣一省神父運転のバスに乗り込み、8時15分に茶臼岳登山へ向けて出発する。登山口から全員で登り始めるが、途中休憩の際に、ゆっくり登りたい「鈍行」グループと「特急」グループとに分かれて、山頂での再会を約束して2グループで登る。山頂で全員が揃ったところで、お弁当をいただく。

全員下山後、バスに乗り、一路、乙女の滝を目指す。イスラエル・パレスチナからの参加者は、滝を見たことのある人が少ないらしく、元気よく滝



茶臼岳登山(山頂にて)

つほの周辺ではしゃいでいた。

「聖ヨゼフ山の家」帰着後は、全員が気持ち良い疲労感を感じつつ、シャワーを浴びたり、ゆっくり休んだり、それぞれが思い思いに過ごした。

ディスカッション

夕食後に、イスラエルからのアントニーが一対一で指定された項目についてディスカッションをするというセッションを行った。初めに、時計の絵を描き、それぞれの時刻に誰と話す約束をしたかを互いに書く。そして、時計の数字に沿って、それぞれの時間で1人ずつと待ち合わせをする。ファシリテーターが指定した時刻に待ち合わせをした人と、提示されたトピックについて話し合う。それぞれが11人とディスカッションを行った。

トピックは、個人的な質問から、次第に紛争に関するものや平和に向かって進んでいくことを話し合うような内容へと進んだ。トピックの順番と内容は下記の通りである。

<トピック>

- ① 7時：プロジェクトについて、今までのところどう感じているか
- ② 11時：一番寂しく感じているものは
- ③ 10時：今までの人生で一番よい思い出
- ④ 6時：起きてしまったら一番怖いこと
- ⑤ 4時：イスラエルとパレスチナに対する望み



ジハードと日本人高校生とスタッフ(乙女の滝にて)

- ⑥ 8時：プロジェクトに対する期待
- ⑦ 9時：イスラエルの国旗を見て感じる事
- ⑧ 4時：パレスチナの国旗を見て感じる事
- ⑨ 1時：この段階で自分の心の中にある事
- ⑩ 2時：ここまでの段階でプロジェクトから学んだ事
- ⑪ 3時：まだ学んでいない事、今後学びたい事

6日目 8月5日(日)

那須高原

午前 セッション

午後 「マ・メゾン光星」訪問 セッション続き

夕食 立食パーティー

セッション、セッション続き

本日も、イスラエルからのヤニーヴがセッションをリードする。

初めに、アイスブレイキングゲームとして、全員で円形になって長い紐を持ち、みんなで目をつぶって、互いにアドバイスをしながら輪を四角形にするというゲームをした。

それから、那須でのこれまでの体験を基にしつつ、「良いチームワークとは」についての下記の4つの質問について、3つのグループに分かれてディスカッションを行った。

1. What are the characters of the team in the assignment you just did? (ここでいう assignment とは、紐を用いて行ったアイスブレイキングゲームのこと。)
2. Can you think of other models of teams? (Do you work in any teams that work in this way or in totally different way?)
3. Have you ever been a part of team that wasn't working well? Why did it happen?
4. Try to phrase together the characteristics of good teamwork.

それぞれのグループが活発に議論を行い、互いに発表し、チームとは何かについての理解を深め合った。

次に、イスラエル・パレスチナ間で実際に生じている紛争の中での二律背反する状況をもとにして、その際に自分ならばどのような決断を選択するかについて、小グループに分かれて話し合った。ディレンマの命題は以下の3項目の中から各グループが選択した。

1. 封鎖されている道路で、パレスチナの救急車が今にも出産しそうな妊婦を乗せて待たされている。

検問所にはイスラエル軍の兵士がいる。数日前には他の検問所で同様の状況下で救急車を通したところ、イスラエルの病院で自爆攻撃が起き、多数の人が死傷していた。そのとき、あなたなら救急車を通すか、通さないか。

2. イスラエル軍の情報機関が、あるテロリスト



真剣に話す。上から：雄一とレナート、ジハドと理紗、ノアムと一馬、茉梨菜とガル。

の情報を入手した。F-16 戦闘機がテロリストの潜入場所を上空から爆破しようとするが、テロリストと一緒にいる罪のない2人の子どもを巻き添えにすることになる。そのとき、あなたなら空爆を許可するか、しないか。

3. イスラエル政府がすべてのパレスチナ難民に対して帰還の許可を与えるかどうかについて。彼らが全員帰還したら、人口比でユダヤ系の人々よりも非ユダヤ系の人々が多くなり、イスラエル建国の理念であるユダヤ人国家という概念が崩れることになる。あなたなら許可を与えるかどうか。

「マ・メゾン光星」訪問

午後1時15分頃、猪俣神父運転のマイクロバスに乗り込み、社会福祉法人慈生会運営の知的障害者更正施設「マ・メゾン光星」を訪問し、利用者の方々との交流を行う。初めに、3カ国それぞれの自己紹介を行った後、利用者の皆さんによる和太鼓の演奏と「よさこい踊り」を鑑賞した。その後、高校生たちも一緒によさこいを踊ったり、和太鼓の演奏を体験した。続いて、3カ国それぞれの高校生たちが歌、伝統的な結婚式の祝いの踊りなどを披露した。その後、施設内を案内していただき、見学をして「聖ヨゼフ山の家」への帰路についた。



笑顔がこぼれる。「マ・メゾン光星」入所者とタリ。

立食パーティー

夕食は、雨天でなければ、野外でバーベキューを行い、花火をみんなで楽しむことを予定していたが、あいにくの激しい雷雨により、室内での立食パーティーへと急遽予定を変更した。みんなで歓談しながら食事をした。なお、食事の最後には、献身的にお世話をしてくださった「聖ヨゼフ山の家」のシスター方に、感謝の辞を述べるとともに、各国から感謝の品を贈呈した。



お世話になった那須「聖ヨゼフ山の家」のシスターたち。

7日目 8月6日(月)

那須高原から長崎へ

午前 那須高原から空路長崎へ

午後 長崎市長表敬訪問 原爆落下中心地での献花

夕方 長崎実行委員会高校生(CAN)による長崎紹介及び歓迎会

那須高原から空路長崎へ

大型バスで羽田空港へ向けて午前6時30分に出発予定であったが、部屋の清掃や荷物の整理が終わっていない人がいたこともあり、7時に出発する。途中、都心の渋滞もあり、羽田空港到着まで心配の種は尽きなかった。なお車中では、広島での平和記念式典の様子をテレビで視聴し、8時



長崎CANの高校生たちの心温まる出迎え（長崎空港にて）

15分には平和の鐘の音に合わせて平和を祈願しつつ黙祷を捧げた。

11時35分発のJL1845便にて長崎へ向かい、午後1時30分に到着し、長崎実行委員会高校生（CAN）の歓迎を受けた。その後、長崎市庁舎へマイクロバスで移動した。

長崎市長表敬訪問

田上富久市長は広島平和記念式典に参列するため留守ということなので、当初、副市長への表敬訪問を行う予定であった。しかし、急遽広島から戻ってくださった田上市長にお会いできることとなった。井上実行委員長、イスラエル・パレスチナ・日本各国代表の高校生3人の挨拶の後、田上市長からご挨拶をいただいた。



田上富久長崎市長表敬訪問。（長崎市役所にて）

原爆落下中心地での献花

午後4時30分頃、長崎の原爆落下中心地公園にて献花と黙祷をした。原爆落下中心地に実際に立ったこの時から、長崎での「平和の学び」が始まった。

長崎実行委員会高校生（CAN）による長崎紹介及び歓迎会

浴衣姿のCANの6人の高校生により、長崎紹介が行われた。プレゼンテーションは、しっかりと準備されており、長崎を理解する大きな助けとなった。歓迎会では、各国の高校生たちが和やかな雰囲気の中に食事を楽しんだ。ホテルに戻ってから、スタッフはミーティングを行い、高校生のうち希望者は散歩に出かけた。

8日目 8月7日（火）

長崎

午前 原爆資料館見学 語り部の被爆体験を聴く
被爆遺構で祈る

午後 分かち合い ホームステイ家族との出会い

原爆資料館見学 語り部の被爆体験を聴く

被爆遺構で折る

午前中、CANのメンバーをリーダーとする小グループに分かれて「原爆資料館」を見学する。みんな、それぞれの展示をじっくりと見つめ、説明文を真剣に読んでいた。

続いて、原爆資料館のセミナーームで原爆の語り部・廣瀬方人氏の「被爆体験」を英語で聞く。講演後の質疑応答では、高校生たちが活発に質問した。

その後、原爆資料館を出て、平和公園の「被爆遺構」を巡り、カトリック長崎大司教区司教座聖堂である浦上教会を訪ね、「被爆マリア像」の小聖堂で平和を願ってみんなで黙祷をささげ、爆風で吹き飛んだ浦上教会の鐘楼を見学した。なお、昼食は小グループでの自由行動とし、それぞれが長崎の食事を楽しむ。

分かち合い

昼食後、2時から濱田神父司会のもと、分かち合いをする。初めに「原爆」についての分かち合いを行う。以下、各人の発言の要旨を載せる。

- ★語り部の廣瀬さんの、前に進むようとしている姿勢に感銘を受けた。(ヤクープ/パレスチナ)
- ★原爆を使わないだけでなく、戦争を避けるべきだ。(レナート/パレスチナ)
- ★ホロコーストに似ている。すべてのドイツ人に対



長崎原爆落下中心地で、イスラエル・パレスチナ・日本の高校生が揃って献花。

してではないが、わたしには彼らに対して抵抗感がある。日本の人々は、原爆の後アメリカに対してどのように振る舞ったのか。

(ノアム/イスラエル)

- ★原爆の結果が今も続いていることがショックだ。(アレックス/イスラエル)
- ★世界における核保有の現実を知って悲しくなった。(ナルディーヌ/パレスチナ)
- ★わたしたちの原爆理解はアメリカ側のものだと気付いた。写真がむごい。(ガル/イスラエル) 何とも言えない思いをさせる資料館だった。(ジハド/パレスチナ)
- ★とても興味深かった。もっと知りたい。(ペレグ/イスラエル)

★国が戦争をして、苦しむのは人々だ。(アビジャグ/イスラエル)

★僕は被爆3世。僕にとって原爆はまだ続いている。この苦しみと不安を僕は乗り越えていきたい。(雄一)

★被爆3世の人の思いを直接聞いたのは初めてだ。逃げない雄一を尊敬する。(アレックス/イスラエル)

★直視する勇氣に感嘆する。素敵だと思う。(タリ/イスラエル)



「語り部」廣瀬方人氏の被爆体験談を聴く。(長崎原爆資料館にて)

わたしの家族の痛み・苦しみ

休憩をはさみ、「わたしの家族の痛み・苦しみ」について分かち合う。

★ 今でも家族から「食べられる時、思いっきり食べなさい」と言われて悲しくなる。強制収容所の体験が今もわたしたちを離れない。

(ガル/イスラエル)

★ わたしの祖母はガンで、今年の過越祭に参加できなかった。祖父はとてもショックで祈りを司式することができなかった。帰ってももう祖母には会えないかもしれない。

(ノアム/イスラエル)

★ 父は西岸からエルサレムに僕を迎えに来ていた。突然イスラエルの兵士がやってきて父も僕も拘束された。兵士は父の頭を机にたたきつけた。僕はとても憤りを感じた。そして無力感と差別を感じた。必要な許可証はすべて持っていたのに。それ以来、僕は兵士を見るとこの時の反感がよみがえってくる。

(レナート/パレスチナ)

★ イスラエルの地に住むようになって祖父で12代目だ。叔父は雑貨屋を営んでいて、パレスチナ人の客も友達もたくさんいた。安息日に彼らと食事を一緒にしたりもしていたのに、その彼が殺された。イスラエルの兵士がある無実のパレスチナ人を殺した日の翌朝、叔父はナイフで首をかき切られて殺されてしまった。

(ヤニーヴ/イスラエル)

原爆という、人間の尊厳が踏みにじられる悲惨な出来事につて思いを馳せることを契機として、誰にでも、自分史や家族史の中に何らかの痛みがあることが分かり、みんなが互いに思いやりの気持ちを持ち、優しさに包まれた。

ホームステイ家族との出会い

午後5時過ぎ、ホームステイ先のご家族の方々が高校生たちを迎えに来られる。どのご家庭にどの高校生がお世話になるかの発表の後、全員で

記念撮影をし、ホームステイ先へと向かう。ホストファミリーの皆様の温かさが感じられる。

9日目 8月8日(水)

長崎

終日 伊王島へのエクスカージョン
原爆犠牲者慰霊平和祈念式典
参加についての話
海水浴 温泉 サイクリング

原爆犠牲者慰霊平和祈念式典参加についての話 海水浴 温泉 サイクリング

ホストファミリーとともに大波止ターミナルに集合した後、みんなでフェリーに乗り込んで伊王島へ向かう。フェリーに乗る前に楽しさのあまりチケットを海にほうり投げるといふ失態をやらした高校生もいたが、なんとか無事に伊王島に到着。バスにて海水浴場へ向かった。まず海の家の一室をお借りし、リーダーたちが企画したゲームをして体と心をほぐした。

その後、明日参加する長崎原爆犠牲者慰霊平和式典について、アントニーがファシリテーターを代表して「わたしたちがこの式典になぜ参加するのか、そしてどのような気持ちで参加すべきなのか」について以下のように語った。



ジハドと一馬。ホストファミリーとともに。



太陽を浴びて、伊王島へ。(フェリー船上で)

イスラエル・パレスチナの高校生にとっては炎天下、言葉も分からない長時間の式典参加は厳しいかもしれないが、この長崎で「忘れないこと、語り続けていくこと」の象徴である式典を体感し、敬意を持って参加すること、そのことに意義を見いだしてほしいと。

高校生たちは説明を真剣に聞き、各人が式典参加の意義をよく考え、理解しようと努めていた。

いよいよ、待ちに待った海水浴の時間となる。転げるように海に飛び込んでいった者あり、砂浜で遊んでいる者あり、昼寝組あり、と思いつきに過ごした。

全員そろっての昼食のあと、CANの提案で、大きく2つのコース(島一周サイクリング・温泉)に分かれて島を楽しんだ。サイクリング組は猛暑の中、心地よい海からの風を受け、島の人々に挨拶しながらサイクリングを満喫した。海の眺めは最高で、サイクリングしながらどこまでも続く大海原に吸い込まれていくような、最高の心地よさを味わえた。温泉に入ったのはイスラエルの高校生が多かったが、初めはとても恥ずかしがっていたのに、結局みんな大興奮し、大はしゃぎし、大満足したようであった。まさに「郷に入っては郷に従

え」である。みんなが島を満喫し、本当にリフレッシュできた一日であった。

伊王島に別れを告げ、フェリーで大波止ターミナルに戻ると、高校生・リーダーたちはそれぞれのホームステイ先に“帰って”いった。

夕刻、イブラヒム神父が長崎に到着した。

10日目 8月9日(木)

長崎

午前 原爆犠牲者慰霊平和祈念式典参列

午後 「続 わたしの家族の痛み・苦しみ」

全体ミーティングとグループセッション

夜 自由時間(エクスカーション:稲佐山)

原爆犠牲者慰霊平和祈念式典参列

8時30分にホームステイ先からホテルに集合し、式典会場となる平和記念公園へ移動する。9時15分頃公園に到着すると、会場の最前列に席が用意されており、みんな驚いた。なお、今年度は事前に式典のパフレットをいただくことができたので、前回とは異なり、英語のテキストに目を通



高見長崎大司教、イブラヒム神父を中心に、全員集合（長崎・ウェルシティにて）

しながら、式典の最中に何が行われているかが分かったようで、みんな真剣に式典に参列していた。

式典は10時40分に始まり、イスラエル人2人（アレクサンドラとアヴィシャグ）、パレスチナ人2人（ナディーヌとジハド）が揃って献花を行う。11時2分に全員で黙祷を捧げ、11時40分に式典が終了した。その後、移動し、小グループで自由に昼食をとる。

「続 わたしの家族の痛み・苦しみ」

グループセッション

午後3時から7日に行った「わたしの家族の痛み・苦しみ」のセッションの続きを行う。

その後、午後4時40分頃から4、5人程度の小グループに分かれ、今後の平和についての展望や、平和を築いていくために自分たちはどのように貢献できるかについて話し合った。

エクスカージョン

夕食後、希望者を募って、長崎の夜景を満喫できる稲佐山展望台に出かける組と、平和記念公園で捧げられる、長崎大司教区主催の平和祈願ミサに参列する組とに分かれてエクスカージョンに出かける。

11日目 8月10日（金）

長崎

午前 「語らいの夕べ」の準備

午後 イブラヒム神父講演 「語らいの夕べ」

夕方 フェアウェルパーティー

「語らいの夕べ」の準備

9時に全員が集合し、「語らいの夕べ」のスケジュールと役割分担を確認する。その後、イスラエル、パレスチナ、日本の国別に分かれて、プロジェクトの実り、平和への思い、今後に向けた思いを分かち合った。その上で3カ国が集合して、それぞれが準備した発表の内容をお互いに発表しあった。

イブラヒム神父講演 「語らいの夕べ」

（55ページ参照）

午後3時、定刻に開始。実行委員長・井上弘子の挨拶に始まり、イブラヒム神父の「それでも平和への道を歩む」をテーマに講演が続く。質疑応答の後、休憩をとる。

〈平和への渇き〉と題するプレゼンテーションが

始まる。「語らいの夕べ」では、高校生たちの発言に続き、たくさんの質疑応答がある。最後に平和を願うキャンドルを配って終わる。

「語らいの夕べ」とは、プロジェクトの主旨・概要・実りを伝える報告会形式の集いである。普段イスラエル・パレスチナの紛争や諸問題に関わることが少ない方々に、今、まさに何が起きているかについて知っていただき、そしてプロジェクトの実りを通じて平和について考えていただくことを目指すものである。なお平日であったためか、ご来場になったのは70名程であった。

12日目 8月11日(土)

長崎から東京へ

午前 長崎から羽田空港へ

午後 自由時間(東京観光など)

長崎から羽田空港へ

8時30分にロビーに集合する。見送りに来てくださったホームステイ先の方々との別れを惜しみながら長崎空港へマイクロバスで移動する。長崎実行委員会のメンバーが長崎空港まで見送ってくれ、涙を流しながら互いに別れを惜しむ。

自由時間(東京観光など)

羽田空港に到着後、3コースに分かれて東京観光に出発する。ディズニーランドへ行く者あり、江戸東京博物館を中心に浅草等を巡る者あり、「はとバス」ツアーで東京観光する者あり、各人が東京での時間を満喫した。

午後8時30分に東京での滞在先であるJICAに集合し、明日の予定を確認してから就寝する。



心のつながりを確認するための「紐ゲーム」(東京JICAにて)

13日目 8月12日(日)

東京

午前 プロジェクトの振り返り

午後 東京観光、セッション

プロジェクトの振り返り

9時に「プロジェクトの振り返り」が始まる。いろいろな課題に取り組む中で、イスラエルとパレスチナの現状を各人がどのように理解しているかが明らかとなっていく。続いて、パレスチナとイスラエルの関係において、どのような状態が理想だと考えるかを一人ひとりが表現していくが、各人各様であった。しかし、その多様性の中にも、みんなの思いに共通するものが見えてくる。イスラエルとパレスチナが、それぞれが足りないと感じているもの、求めているものが何であるかが、全員に共有されていく。イスラエルとパレスチナが共生していくためには、相互の理解や信頼が欠かせないということである。

東京観光

昼食後は、午後4時まで自由行動とし、グループに分かれて新宿に出かける。ビックカメラで電気製品を手に取り、購入する者あり、東京都庁舎の展望室から東京を眺める者あり、明治神宮外苑

を散策して日本の文化に触れる者あり、と各人各様であった。

セッション

午後4時にセッションを開始する。初めに紐を用いて「絆確認ゲーム」を行い、いつの間にか、みんなの中に信頼の絆が生まれていること、その絆が喜びとなっていることを見える形で確認する。この後、プロジェクトに参加して得たものを振り返り、将来どのような活動、あるいは生き方をしようと決心しているかについてレポートを書く。床に座って書く者あり、椅子の上で書く者あり、ひざの上で書く者あり、机を使って書く者あり、とさまざまであったが、みんな真剣に書いていた。

レポートが回収された後、「リーダーシップと自分」という視点から、自分の平和活動に関わる姿勢を振り返る。自分が参加する平和活動における自分の姿勢を客観的に振り返り、発表しあう。みんな、この作業をとおして自分のこれまでの姿勢を自覚し、今後どのような自分でありたいかを強く感じ取っていく。

続いて、アントニーが平和活動に取り組む際に必要な姿勢として“LEAD”を提唱し、説明をした。なお“LEAD”とは Learn, Energetic, Aim, Determine のことである。

14日目 8月13日(月)

東京

午前 「語らいの夕べ」の準備

午後 イブラヒム神父講演 「語らいの夕べ」

夕方 お別れ夕食会

「語らいの夕べ」準備

9時に全員が集合し、「語らいの夕べ」のスケジュールと役割分担を確認する。続いて、みんなで歌う平和の歌を練習し、その後、あらかじめ投

げかけられていた質問について、イスラエル、パレスチナ、日本の国別に分かれて、それぞれの回答を準備する作業に入る。

昼食後、会場となるイグナチオ教会のヨセフホールに向けて出発。先発隊が早めに会場入りし、会場準備はほぼ終了している。まもなく、たくさんの方々がご来場くださる。

イブラヒム神父講演「語らいの夕べ」

午後3時、定刻に開始。実行委員長・井上弘子の挨拶に始まり、イブラヒム神父の「それでも平和への道を歩む」と題する講演が続く。イブラヒム神父は、「互いを非難し、罵りあう言葉を聞きなれている者にとって、相手を評価する言葉を聞くことは素晴らしい」と語り始める。同神父は、プロジェクト中の人間関係を踏まえて、神父の周りに座っている若者たちにとって、今まさに必要としている気付きと励ましを盛り込んだ講演をした。その後、休憩をとる。

〈平和への渇き〉と題するプレゼンテーションが始まる。「語らいの夕べ」では、高校生たちの発言に続き、たくさん質疑応答がある。最後に、全員で平和を願う歌を、ヘブライ語、アラビア語、日本語で歌い、平和を願うキャンドルを配って、午後5時30分に閉会する。その後、会場を片付け、JICAに戻る。



「語らいの夕べ」で挨拶するジハード。(東京・イグナチオ教会ヨセフホールにて)

お別れ夕食会

お別れ夕食会を行う。「語らいの夕べ」に参加した若者たちも数名が急遽参加し、解放感にあふれた時間を過ごす。イスラエル、パレスチナ、日本のそれぞれの高校生たちは、晴れやかな表情で互いに交流を深め、真の友情を深めることができたようであった。

15日目 8月14日(火)

東京から成田空港へ

午前 成田空港での別れ

長かったようで短いプロジェクトの最終日を迎え

た。東京 JICA から成田空港まで大型バスで移動し、10時にチェックイン。その際、荷物の重量オーバーなどがあり、多少の混乱があった。空港で参加者たちに残された時間はあまりなく、すぐに別れの時間がきてしまった。みんな別れを惜しみながら再会を約束し、固く抱き合っていた。「本当の仲間になったのだ」という意識を、お互い強く持つことができたようである。イスラエル、パレスチナからの参加者を見送った後、日本人で解散式を簡単に行った。高校生たちは本当にたくましく成長し、サポートしたリーダーやスタッフが彼らを非常に誇らしく思う気持ちは、みんな一緒だった。わたしたちも再会を約束し、たくさんの思い出や荷物とともに帰路に着いた。



お別れ夕食会で。プロジェクトの実りを感謝し、ジュースとコーラで「乾杯！」(東京JICAにて)

6 平和メッセージの発信

「語らいの夕べ——平和への渇き」

2週間にわたったこのプロジェクトの集大成として、平和のメッセージを多くの人々へむけて発信するために、長崎・東京で「語らいの夕べ」を開催

した。イブラヒム・ファルタス神父の講演と高校生の〈平和への渇き〉の発表で構成されるもので、以下はその概略の報告である。



みんな真剣な表情。質問に答える修平。(長崎・ウェルシティにて)

1 長崎「語らいの夕べ」

長崎における「語らいの夕べ」は、2007年8月10日午後3時から、ウェルシティー長崎を会場として開催された。鈴木信一神父司会のもと、本プロジェクト実行委員長 井上弘子、パレスチナ代表

としてアントニー・ハバシュ、イスラエル代表としてヤニーヴ・シェンハヴが挨拶した。その後カトリック長崎大司教区教区長 高見三重大司教から、温かい歓迎の挨拶をいただいた。

第1部

イブラヒム・ファルタス神父による講演

「語らいの夕べ」の第1部ではイブラヒム・ファルタス神父の講演が行われた。同神父は、ベツレヘムの聖誕教会包囲事件の39日間に及ぶ体験から話し始めた。そして、このプロジェクトのアイデアがなぜ広島で生まれたかを説明し、「イスラエル・パレスチナの子どもたちを広島に連れてきて原爆の現実を見せることによって、戦争とは何かを分かってもらいたかったからだ」と語った。次に、現在聖地で取り組んでいる“Children without Borders”の活動に触れ、「若者はわたしたちの未来であり希望であり力です。より良い未来を手に入れたいのなら、わたしたち自身に平和教育が必要だし、若者に平和教育を施さなければなりません。平和は独りでやってくるものではありません。平和を作り上げるには一つのしっかりした思想が必要であり、行動が必要です」と語った。最後に、セリンという作家の以下のことばを引用して、「戦争とは互いに知り合っていない人々の間で殺しあうことです。戦争は自分たちの利益しか考えない少数の人々の決定によって引き起こされて、罪のない互いに知り合っていない、殺す必要のない人々の間で殺しあうことです」と結んだ。

第2部 「平和への渇き」

質疑応答をはさんで、鈴木信一神父司会のもと、「平和への渇き」と題する高校生による発表が行われた。この発表では、司会者から7つの質問が高校生たちに投げかけられ、3カ国の高校生たちが、それぞれ質問に1人ずつ答えた。

第1の質問

このプロジェクトはどんな実りをもたらしたか。プロジェクトで何を学んだか。

ノアム・シャニ (イスラエル)

心を開いて聴くことの大切さ、そして、日本の歴史と歩みからゆるすことの意味を学んだ。

レナート・バンダック (パレスチナ)

来る前は複雑な感情、恐怖や怒りを覚えたが、日本に来て、友情を深め、また長崎の状況を学ぶことで、イスラエル・パレスチナ双方で日本のことを話せたことが印象に残った。

安井一馬 (日本)

和解については互いに歩み寄ることが大切なこと、グループの協調は、大きなグループになると困難だが、小さなグループでの協調を大切にしていけることが大きな協調を生むこと、互いの心を理解しようとするのが大切だということを学んだ。

第2の質問

暴力で紛争を解決することができるか。

川原史織 (日本)

暴力では解決できず、互いの悪いところを次世代に教えることも解決につながらないので、相手を尊重し、互いに認め合うことが大切だ。

ユーセフ・ランティシ (パレスチナ)

暴力では解決できず、罪のない人が犠牲になることなく、平和に生きるための道を模索することが重要で、このプロジェクトで心理的な障壁を取り除くことができたので、今度は物理的な障壁(註、分離の壁のこと)を取り除きたい。

アヴィシヤグ・ヨセフィアン (イスラエル)

攻撃は紛争の解決をもたらさず、過去の歴史の中で受け継がれてきたので、過去だけを見て報復しあうのではなく、未来を見つめて対話によって紛争を解決したい。

第3の質問

ゆるしについてどう考えるか。

ジハド (パレスチナ)

ゆるすことは難しいが、ゆるしこそが平和への唯一の道である。より良い未来を築くためにはゆるすことが大切で、ゆるすことと痛みを忘れることは違うが、痛みがあってもゆるしを通して平和な未来を築けるのだ。

ガル・ローゼンブルート (イスラエル)

ゆるしとは忍耐、誠実、信頼、理解、傾聴のことであり、ゆるしは心の深みに下りて怒りを断ち切ることで、互いに歩み寄ることが可能となり、紛争を解決する道となるのではないか。

中村茉莉菜 (日本)

ゆるしとは相手を尊重し、ありのままに受け入れることであり、より良い何かを求めるためには平和、友情、希望が大切であるが、イスラエル・パレスチナの高校生の現状を見て、ゆるすことの難しさも痛感した。

第4の質問

平和の働き手として、あなたには何ができるか。国で、家族の中で、友だちの間で。

ペレグ・バルオン (イスラエル)

自らを含めた参加者がみんな、平和のつくり手、担い手であることに気付き、共通の未来のために、世界の平和のために多くの人に働きかけるリーダーシップをとりたい。そして「平和」というビジョンを多くの人に伝え、多くの人々の共通認識にしていくために支援の輪を広げていきたい。

ナディーヌ・ハンダル (パレスチナ)

これからも平和の担い手として働いていきたいが、友だちにも「わたしも平和のネットワークに参加したい」と思ってもらえるようにするためにも、日本について、日本で学んだ平和について語り続けていきたい。

竹山修平 (日本)

平和の働き手となり得る人とは、人の仲介に入ることができる人だと考える。仲介者は、紛争当事者間の双方の言い分を聞きつつ、中立的、客

観的な意見にまとめるフィルターの役割をはたす。このプロジェクトに参加したことが「仲介者になる」という姿勢を作るきっかけになったので、平和の働き手になることができると思う。

第5の質問

あなたの平和のメッセージは何か。平和に対する思いを語ってほしい。

安井一馬 (日本)

平和の大切さを認識することができ、また、普段あまり平和を意識していないことに気付けたし、8月9日の長崎原爆犠牲者慰霊祈念式典に参加したことは印象深く、このような分かち合いが日本の一部で行われているだけでは不十分であり、平和を発信することの大切さを学んだ。

ナルディーヌ・ジルデ (パレスチナ)

平和とは大きな意味のある言葉で、単なる言葉ではなくライフスタイルなので、一人ひとりの心の中から始めることで、初めて他の人に伝わっていく。だから平和は簡単ではないが、必ず達成できるものだ。多くの人の協力が必要であるから、平和のメッセージを伝えていくという狭き門を選択する。

アレクサンドラ・ボスコヴィッチ (イスラエル)

平和とは差別なく安全を脅かされることなく共存することである。戦いをやめ問題を解決するためには、ゆるし合い、歩み寄らなければならないが、歴史を忘れてはならず、より良い未来のために歴史を活用していかなければならない。それは、未来の子どもたちが傷つけ合うことなく、恐れることなく互いの家を訪問し、毎日人が亡くなっていくニュースを聞かないですむ世界を実現するためである。

第6の質問

あなたはこのプロジェクトをどう思うか。どんな感想を持つか。

中村茉莉菜 (日本)

普段は意識することのない平和の大切さや必要性について学び、世界の問題へ関心を寄せられるようになったので、これからの生き方の中で、いろいろなことを見つめていきたい。

ナディーヌ・ハンダル (パレスチナ)

長崎ではショックを受け、どうしてこれほどひどいことをされてもゆるせるのか、どうやってこのような惨禍から立ち上がって繁栄を築けるのかを考えさせられたが、すべては可能なのだと考えた。

ノアム・シャニ (イスラエル)

中立の立場がどのようなものであるかを学び、互いを尊重する中で、互いの立場や意見を開かれた気持ちで受け止めることの大切さを学んだので、これからも隣人に手を差し伸べる活動を続けていきたい。

第7の質問

友情を育むためにどんなことができると思うか。

なお、この質問については、3カ国の高校生たちのまとめ役をした大学生リーダーたちが答えた。

石黒朝香 (日本)

楽しいこともあったが、悲しみや痛みを共有し合う場面もあり、新しい関係、友情を育むことができた。友情の美しい点は、本当に深い感情を分かち合うことである。強い怒りの気持ちでさえも、ぶつけ合ったりすることなくそれを理解しながら語り、互いに耳を傾け合うことを学んだ。紛争や問題点を解決するために聴き、その考えを理解しようと努力し、問題点を明らかにし、歩み寄ることによって解決策を探ることを学んだ。

ヤクーブ・ガザウィ (パレスチナ)

プロセスの重要性、ミッションを理解しているつもりであり、帰国しても友情を培い使命を達成していくために、ミーティングを継続し、平和のグループとして使命を推進する。日本でも話し合いが継続されるので、互いの進捗状況を分かち合いなが

ら、日本の皆さんとも協力しながら平和のチームをたくさん作って活動を進めたい。

タリ・バレル (イスラエル)

祖国に帰ってからも一人ひとりの学んだこと、結論に達したことを人々に伝えていきたい。これからも多くの方々の支えを必要としており、「Children without Borders」「聖地のこどもを支える会」などからの援助を是非お願いしたい。個人的に電話やメールなどで一人ひとりとは連絡を取り続けていきたい。

7つの質問に対する答えが語られた後、川原史織によって、3カ国の高校生たちが署名をした「平和宣言」が高らかに読み上げられた。

その後、質疑応答をはさんで、3カ国それぞれの高校生が平和への思いを表した。日本の高校生は、長崎市主催の平和記念式典で11時2分に歌われる「千羽鶴」を歌い、イスラエルの高校生は1995年にイスラエルのラビン首相が暗殺直前の平和集会で、多くの人々とともに歌った「平和の歌」を披露し、パレスチナの高校生は、希望のともし火として、ろうそくを会場の方々に配った。

最後に、アッシジの聖フランシスコの「平和の祈り」の歌が全員で歌われ、「語らいの夕べ」は終了した。

2 東京「語らいの夕べ」

2007年8月13日午後3時から、東京における「語らいの夕べ」を、カトリック麹町教会（通称イグナチオ教会）ヨゼフホールを会場として、開催した。鈴木信一神父司会のもと、本プロジェクト実行委員長 井上弘子、パレスチナ代表としてアントニー・ハバシュ、イスラエル代表としてヤニーヴ・シェンハヴが挨拶した。

第1部

イブラヒム・ファルタス神父による講演

第1部ではイブラヒム・ファルタス神父の講演が行われた。冒頭、同神父は、自身がフランシスコ会の修道士であることを語り、聖フランシスコが1217年に十字軍と争っていたエジプト王のもとに平和を願うために赴いたエピソードを語った。聖フランシスコは敵対する2つの勢力の間で平和をつくるために努力した、初めての仲介者であったからである。この聖人を模範としているフランシスコ会は昔も今も、いつでも平和の仲介者となることを目指しており、だから自分もフランシスコ会員として平和の仲介者となるべく働いていると。そして平和の仲介者としての立場から、このプロジェクトの重要性は、互いの苦しみとその原因に気付くことであることを指摘した。

このプロジェクトを通して、子どもたちがともに過ごす体験の中で、イスラエルとパレスチナが同じような文化、同じ土地を共有し、自分たちが話すアラビア語とヘブライ語がよく似ていることに気付けたのだから、この若者たちが平和への一歩を進んでくれると信じている、と語った。そして、この子どもたちがわたしたちの未来であり、わたしたちの力であり、この若者たちが未来を変えてくれると確信している、と期待を込めて述べた。最後に、イスラエルとパレスチナの人々が本当の平和の中で生きることができるよう、この仕事を仲介者として

ずっと続けていきたい、と決意を述べた。

第2部 〈平和への渇き〉

質疑応答をはさんで、鈴木信一神父司会のもと、「語らいの夕べ」第2部として「平和への渇き」と題する高校生による発表が行われた。この発表では、「このプロジェクトを通して学んだこと」について、イスラエル、パレスチナ、日本の高校生たちが、それぞれ2人ずつ答えた。

ナルディーヌ・ジルデ（パレスチナ）

今回のプロジェクトでは長い距離を旅してきたが、物理的なことだけではなく、心の中が本当に大きく変わった。それぞれ、住む場所や文化などの背景は違っても、とてもシンプルなことを共有している。将来がより良く平和であるようにという希望である。国境や壁のない未来、兄弟姉妹として共に平和の中で交わる未来がくるよう祈っている。

13日間いろいろなこともあったが、ともに過ごしてより強い絆を築いてきた。どんなときにも、どんな違いがあっても相手を尊重し、ありのままを受け入れるということを学べた。また、相手側の痛みを知ることで、辛いのはわたしたちだけではないことに気付き、1つの角度から全体像を見ようとするのではなく、いろいろな角度から物事を見られるようになった。そして互いの間にゆるしが生まれ、より良い未来をともに願い合うことができるようになった。

ガル・ローゼンブルート（イスラエル）

日本に来て初めてパレスチナ人と会い、紛争の中でどのように暮らし、また、敵と思ってきた人々の気持ちを知ることができた。日本に来るまではパレスチナ人に対して防衛的だったが、このプロジェクトを通して友人になり、互いに話を聞きあい、

理解し合い、心が一つになった。日本に来てたくさんのことを学んだが、一番重要なのは、たとえ惨事があっても、互いゆるし合い、平和に向かって歩み出すことである。また一人の人間として相手を思いやり、受け入れるということがどういうことであるかを体験することができたし、忍耐をもって相手の言葉に耳を傾けるという体験もした。また自由に感情を表現してもよいのだということも学んだ。互いになっこり微笑みあえたことも大きな喜びだった。

竹山 修平 (日本)

那須高原では、表面的には話すことができて、すぐに国ごとに固まっていた。議論も、卓球のように反論に次ぐ反論で占められていた。長崎では、原爆犠牲者慰霊祈念式典参列や原爆資料館見学などで、日本の体験した痛みをきっかけとして、自分の経験した苦しみ・痛みを互いに言い合ったり聴き合ったりする機会があり、徐々に相手のことを聴く姿勢、相手に自分から分かりやすく話す姿勢が見えてきた。東京では、最初の、相手を認めないという状態からは大きく変わり、互いに受け止め合っているように感じた。この14日間を通して相手の言うことを聴き、相手の痛みを感じることで、これからは平和を目指すための1つのチームとして、平和のための仲介者として歩み続けていきたいと思った。

ノアム・シャニ (イスラエル)

イスラエルでも平和プログラムに参加し、皆が平和を求めているのは分かっていたが、どうしたら平和を達成できるのかは分からなかった。このプロジェクトを通して、パレスチナの人たちも平和を求めていることが分かったし、ディスカッションの中で喧嘩もたくさんしたが、みんなが似たようなことを考えていると分かり、それを結びつけて橋を架けられるようになってきた。このプロジェクトでは、話し合いの仕方も学んだ。互いの言い分

に耳を傾け合うこと、人が話しているとき割り込まないこと、立ち止まって考えるということである。またゆるしがどういう意味を持つのかについても、自分たちの歴史を通して、また日本の歴史を通して学ぶことができた。日本という素晴らしい国を離れるのは寂しいが、しかし、帰れるのも嬉しい。イスラエル、パレスチナでは争いが未だに続いており、考え方を変えなければならない人がまだたくさんいるからである。

レナート・バンダック (パレスチナ)

このプロジェクトを通して新しい友情を育み、責任感も身につけることができた。情報を分析する仕方も学んだ。他の人のものの見方や意見を理解するだけではなく、理解するために何が必要かを分析する方法も学べた。このプロジェクトを通して、合理的で冷静なやり方で問題を解決する方法を学べた。このプログラムでは、いつでも自由に自分の言いたいことを言っていていいと感じることができたので、自分の感情を自由に表現することができ、嬉しく感じた。故郷では経験したことがまったくなく、日本で初めて味わった感情があったが、わたしはそれを「自由」と認識した。

川原 史織 (日本)

このプロジェクトに参加するまでイスラエル・パレスチナ問題には興味がなかった。8月1日に出会い、旅の途中でイスラエルの女子高生と話をしている時、話の途中で兵役の話になった。わたしは自分の身近な人が兵役に就くという話を聞いたことがなかったので驚き、環境の違いを感じた。那須高原では政治的な話題のディスカッションもあり、ついていくことが困難な時もあった。長崎では、イスラエル・パレスチナの人が原爆のことを真剣に学ぶ姿を見て、1つの出来事を2つの側面から見ることの重要性を学び、被爆国日本という視点だけでなく、加害国としての立場も考えることの重要性に気付いた。東京では、ディスカッショ

ンの中で、未来に向けて何ができるかという観点で話をしたので、みんながまとまり、良い雰囲気だった。ディスカッションの中では、積極的に自分の意見を述べることの重要性を感じるとともに、他の人の意見を聴くことの重要性も学んだ。これからも、多くの人に平和を発信していきたいと思った。

6名の高校生によって自らの想いが語られた後、質疑応答をはさんで、今回のプロジェクトに参加した高校生、大学生リーダー全員が署名をした「平和宣言」が、3カ国から代表者各1名の高校生たちによって、高らかに読み上げられた。

その後、平和への思いを込めて、ヘブライ語、アラビア語、日本語の歌詞で、同一の「平和の歌」を繰り返し斉唱した。なお、日本語の歌詞は、「わ

たしたちの上に、みんなの上に、平和よ、来てください」である。この間、会場に3カ国の高校生によって希望のともし火としてろうそくが配られ、平和への思いを互いに持つことの大切さが呼びかけられた。

最後に、全員でアッシジの聖フランシスコの「平和の祈り」の歌を歌い、「語らいの夕べ」は終了した。

担当 鈴木 信一 岩田 可愛
石黒 朝香 横山 雄一
文責 濱田 壮久

「語らいの夕べ」記録全文をご希望の方は、NPO法人 聖地のこどもを支える会までお問い合わせください。



質問に答えるユーセフ（長崎・ウェルシティにて）

7 広報活動とメディア関連

メディアへの資料送付

報道用資料の内容

1. 報道関係の皆様へ（井上弘子委員長）
2. 「平和をつくる子ども交流プロジェクト」主旨書
3. 井上弘子実行委員長兼事務局長のプロフィール
4. イブラヒム・ファルタス神父のプロフィール
5. 来日予定の子どもたちと日本の参加高校生たちの資料
6. 8月の日程表

資料の発送先

東京地区13社

（新聞社5社 テレビ局・放送局6社 通信社2社）

長崎県周辺10社

（新聞社4社 テレビ局・放送局4社 通信社2社）

宇都宮市周辺12社

（新聞社6社 テレビ局・放送局4社 通信社2社）

カトリック新聞社、キリスト新聞社、

「家庭の友」編集部、「カトリック生活」編集部、

「あけぼの」編集部

メディアの反応

カトリック3誌のご協力

前回同様、「家庭の友」「カトリック生活」「あけぼの」の各編集部は最も早くご協力くださり、2007年1月22日に井上実行委員長と3誌合同の打合せ会をした。そして3誌とも4月号に表紙4か記事の1ページを割り、カラーでプロジェクトの紹介をしてくださった。

新聞報道（105ページ参照）

5月23日：朝日新聞夕刊（西部本社：約40行）

前回と同じ川村剛志記者がプロジェクトについてお問い合わせくださり、今回も丁寧な紹介記事を掲載してくださった。「事後報道」ではなく、郵便振替番号まで入れた支援要請の「予告報道」である意義は大きかった。

8月4日：毎日新聞朝刊

（栃木県版：約60行・写真付き）イスラエル・パレスチナ・日本の若者たちの那須高原での交流の様子を報じてくれた。

8月7日：長崎新聞朝刊

（長崎近郊版：約60行・カラー写真付き）前日の長崎市長表敬訪問の様子が掲載された。

8月26日：カトリック新聞

（約110行・カラー写真付き・第1面）

9月8日：キリスト新聞（約100行・写真付き）

上記2紙とも8月13日東京での「語らいの夕べ」を含む活動について詳しく報道してくれた。

「家庭の友」の大特集

〈理解されることよりも理解することを〉

(109 ページ参照)

編集長山内堅治神父が全行程を同行取材してくださり、16 ページにわたる生き生きとした記事を多数の写真とともに掲載していただきました。当プロジェクトの貴重な記録にもなったことを感謝する。

総括

今回メディア 40 社へアプローチしたものの、前回のような大きな扱いはなかった。前回の 2005 年は広島・長崎の被爆 60 年目に当たったことや、日本のメディア報道を見る限り、現在は紛争が沈静化しつつあるかのように、一般には映ることなどが原因と思われる。しかし掲載紙誌は多くなかったとはいえ、内容は前回より濃いものだったと思う。今後広報にはさらなる知恵、人手、時間が何より必要であると痛感した。

担当 大屋 善示



「家庭の友」2007年10月号

8 収支決算

プロジェクト会計報告 (2006年10月～2007年11月)

収入の部

(単位 円)

科目	摘要	金額	金額
支援金等	支援金	7,203,502	9,252,302
	参加費(収入、高校生)	544,000	
	イベント費(収入、チャリティーコンサート等)	1,504,800	
助成金	カリタスジャパン	2,440,000	3,940,000
	国際交流基金	1,000,000	
	日本万国博覧会記念機構	500,000	
合計			13,192,302

支出の部

(単位 円)

科目	摘要	金額	金額
渡航費	テルアビブ～成田(15名)	2,201,612	2,201,612
宿泊費	成田(日本人高校生・スタッフ 7/31前泊)	131,607	5,382,691
	那須高原	876,000	
	長崎(ホームステイ含む)	1,177,710	
	東京	412,492	
	計	2,597,809	
国内移動費	航空券(東京～長崎往復)	1,529,720	1,887,520
	バス(那須、首都圏、長崎/小型トラック含む)	357,800	
	計	1,887,520	
その他滞在費	その他交通費、飲食費、諸雑費	897,362	
滞在費計		5,382,691	5,382,691
会場費	「語らいの夕べ」(長崎)	215,214	215,214
事前準備費	3月28日～31日、JICA東京	224,180	224,180
現地準備費	2/26～3/6(4名)、7/9～18(1名) イスラエル行	1,335,361	1,335,361
保険料		169,360	169,360
広報費	パンフレット(製作・発送)	759,446	1,680,587
	報告書(製作・発送)	740,000	
	その他	181,141	
事務運営費	交通費	547,720	1,070,557
	通信費	154,026	
	会議費	111,724	
	その他	257,087	
イベント費	チャリティーコンサート等 2件	408,133	408,133
雑費		227,695	227,695
交流研修準備金		276,912	276,912
合計			13,192,302

収支決算 総収入合計-総支出合計=0

担当 小西 羊一

9 プロジェクトに参加した喜び——参加者の声

参加高校生

川原 史織

日本 長崎市在住

わたしはこのプロジェクトに参加して心から良かったと思います。

7月31日に東京に行く飛行機の中で、メンバー、リーダー、スタッフの方々に会えるのは、とても嬉しかったのですが、イスラエル・パレスチナの高校生と英語で話せるのか、ディスカッションについていけるのが心配で心配でたまりませんでした。那須高原に向かうバスの中では思ったよりも彼らと話すことができました。もちろんわたしの英語力に問題はありましたが、嫌な顔一つせずに会話の途中で何度も分かりやすく言い直してくれました。1日目よりも2日目が、2日目よりも3日目が…というようにだんだん多くの高校生と話せるようになっていきました。また、那須高原では日本人のメンバーとも事前研修以来たくさん話すことができ、より仲良くなれたと思います。ウェルカムパーティーや「マ・メゾン光星」で日本人メンバー・リーダーと歌ったことは、わたしにとって本当に忘れられない思い出となりました。長崎ではホームステイやホテルの部屋割りのおかげで彼らとますます仲良くなれて良かったと思います。また、ディスカッションでは自分自身に対する新たな気付きや自分がすべきことが分かるというようなことが多々ありました。特に原爆のことを身近に感じていなかったという

発見にはわたし自身がとても驚きました。でもこれからの課題がはっきりして良かったと思います。東京ではフリータイムが多かったので彼らといろいろな話をしました。これは全日程を通して感じていたのですが、ディスカッションではなくただ普通に話しているときも環境の違いや考えの違いに驚くことも多くありました。イスラエルで花火をしたら警察がすぐにやって来るといふことや、兵役に喜んで行くということを聞いたときにはかなりのショックを受けました。わたしには相手が言っていることが理解できないと思うことが何度もあり苦しい時もありました。それでも相手の話を聞いて自分の意見を言うということの繰り返しで、互いが分かり合えるという喜びも経験しました。

わたしはこのプロジェクトに参加して大きく3つのことを学びました。まず1つ目に、言葉が通じなくても友だちになれるということ。互いに一生懸命英語を聞いたり、また何度も言い直したりしました。互いの母国語で話すときよりきっと2倍も3倍も時間がかかったと思いますが、それでもわ



たしは彼らと本当に良い友だちになることができました。2つ目に、自分の意見があるときには積極的に発言するという。ディスカッションでは英語が共通語なのでわたしは結構かまえてしまい、自分の意見があっても英語の心配をして発言しなかったことが多くありました。しかし途中からこれではずっとディスカッションについていけないと思い、英語が分からない時はスタッフの方々に助けをいただいたり、また身振り手振りのジェスチャーでなんとかみんなに伝えることに少しずつ挑戦することができました。3つ目に改めて相手の意見を聞くこと、そして相手サイドからみることの大切さを認識しました。ディスカッションで互いの国の話になった時に言い合いのようになることが多く、それを見ているわたしはなんで相手の意見をもっとよく聞いたり、相手の立場を考えないのか?という疑問が何度も浮かびました。しかし自分の生活

を考えてみると、兄弟や友だちと喧嘩した時にはわたしも全然それができていませんでした。「平和をつくるのはまず身近なところから」と考えているわたしにとって、自分もできていなかったということに驚き、そしてわたし自身の課題がはっきりして良かったと思いました。

旅の終わりに多くのスタッフの方々から「これからがここからスタートだよ」と言われました。プロジェクトが終わった今から、わたしはわたしにできることをし続けていきます。まずは学校の文化祭でのプロジェクトの報告がその第一歩になると思います。そういう身近なところから、自分自身で平和をつくるように頑張ります。このような貴重なプロジェクトに参加できて本当に良かったです。スタッフ、リーダー、メンバー、そしてこのプロジェクトに関わったすべての皆様に本当に感謝します。ありがとうございました。



竹山 修平

日本 広島市在住

このプロジェクトの2週間というのは、本当にあっという間でしたが、僕がこれまで過ごしてきた時間の中で最も充実した2週間であったと、今改めて感じています。

成田空港で出会い、2週間をともに過ごしたイスラエル・パレスチナの高校生は、やはり僕らと同じように普通の高校生です。今回初めて、命の危険と常に隣り合わせに生活する人と接することになりました。実際に会って話をするまで、もう少し大人で、落ち着いていて、固い高校生たちを想像していたので、会って気が楽になったのを覚えています。

でもだからこそ、そんな彼らがディスカッションの中で語る普段の生活の苦勞、障害、自分の家族の辛い歴史が、ショックでした。聞いていて、テレビや新聞で見るよりもずっと辛く感じました。日本に住んでいたのでは絶対に起こりえないことをイスラエル・パレスチナの高校生は日常的に体験しています。あまりにその背景にあるものが違うので、理解しにくい問題も多々あり、その点についてはかなり苦勞しました。

また、食事や移動の時など普通に接している両国の高校生が、時に激しい言い合いになったり、僕と個人的に話してみるとやはり相手の国の高校生は好きになれないというようなことを言っていました。その両国の高校生の間にある溝は、初めか

なり深いものがありました。ただ、それでもイスラエル人とパレスチナ人が直接顔を合わせて話すこと自体が大きな一歩なんだということを強く感じました。というのは、プロジェクトが進み、ともに生活する中で、互いの言っていることをまずは聞くという姿勢が目に見えて表れてきたからです。自分の痛みをさらけだし、相手の痛みを聞くことで、自分の主張ばかりしていた段階を乗り越え、本当の友人となることができた、そう感じました。

日本で、特に長崎で、原爆のことを日本側の視点から見たとすることも本当の友人となれた要因のひとつだったのだと思います。彼らは、自分の国の学校では、単に原爆が広島と長崎に投下されたという事実しか教えられていないそうです。今回長崎に行き、資料館を見学したことで、ある事柄を違う切り口で見ることを知ったと思います。そして語り部の方のお話を聞いたことで、まさに原爆の被害者がどうやって加害者であるアメリカという存在を受け入れたのかを知ることができたのではないのでしょうか。僕は広島で育って、平和教育というものをずっと受けてきましたが、彼らと一緒に今回初めて長崎を訪れ、原爆について改めて考えることができて、僕自身にとっても今の日本の平和を見つめなおすことになりました。横山先輩が被爆3世であるがゆえの苦しみを語ってくださったことも、自分の周りにいる被爆3世である友人にそんな痛みがあるとは考えたこともなかったので、大きなショックを受けました。

僕がこのプロジェクトを通して得たもの、それは、「『平和』って何だろう？」ということを実際に自分自身に問う機会を得られたことです。はっきり言って、イスラエル・パレスチナの紛争は、普段の僕たちの生活には関係ありません。しかし、どうすればその2国の問題を解決していけるのかを考えることは、「平和」を考えることにつながります。そして「平和」を考えるという行為は、「平和」を忘れつつある今の日本人に一番必要なことであり、それがこのプロジェクトに日本人が参加する意義

の一つだったのではないのでしょうか。まだ「平和」が何であるのか、その答えは分かりません。けれど、実際に会い、対話することが、平和に向けての第一歩であることを頭ではなく心で感じることができました。

友人もたくさん得ることができました。あまり社会的でない僕にもみんなが積極的に声をかけてくれて、緊張がほぐれました。特にペレグとはいつの間にか仲良くなって、気がついたらこのプロジェクトで一番の親友になっていました。最後のディスカッションの際に僕に感謝の言葉を伝えてくれましたが、その後会ったときに「さっきの感謝は心からの言葉だから」と言ってくれて、2人で抱き合ったのが一番の思い出です。このプロジェクトでできた絆は、メールでやり取りしたりすることで、とにかく切らさないように、将来的には事前研修で描いた虹のようになれば、と考えています。

最後になりましたが、このプロジェクトに関わったスタッフの方全員に感謝したいと思います。日本人高校生4人の中で、一番準備不足であったのは間違いなく僕です。事前研修では寝るし、課題も提出しないし、事前研修からプロジェクト本番までの間の勉強も本を1冊読む程度で、この素晴らしいプロジェクトに対して失礼なぐらい怠けていました。ほんとうに申し訳ありませんでした。そしてプロジェクト本番、そんな僕を温かく迎え入れてくださってありがとうございました。おかげさまで、本当に素晴らしい2週間を過ごすことができました。このプロジェクトで得たものをいつも心に留めてこれから進んでいきます。



食事の前には「いただきます」を—— 那須初日・食堂にて。



中村 茉莉菜

日本 長崎市在住

イスラエル・パレスチナの高校生と過ごす2週間は、驚き、発見、戸惑い、喜び、感動が詰まった、わたしにとって激動の、そして忘れられない夏になりました。

彼らの姿から得た、わたしにとって最大の学び、それは、彼らの平和を願い求めるその心の深さ、純粹さにありました。今でも忘れられない場面があります。東京でディズニーランドに向かうバスの中で、ヤクブ、ユーセフ、わたしの3人は一緒に会話を楽しんでいました。どんな経緯で、わたしが彼らにそう尋ねたかは確かではありませんが、ともかく、わたしは彼らに「日本が好き？」と聞きました。彼らが「もちろん！」と言うので、わたしは何のためらいもなく「なぜ？」と尋ねたのです。「だって平和じゃないか」……予想外の答えに、わたしはどう反応して良いのか分からず、「そうだね」と言うことしかできませんでした。それまで、ふざけて冗談を言い合っていた彼らは、笑顔こそ崩しませんでしたが、彼らが一瞬見せた、遠くを見つめるような、少し悲しそうな目

をわたしは忘れません。何気ない会話の中にも彼らの苦しみがかいま見えました。わたしはこの時、自分に対して悔しい気持ちになりました。今、目の前でこんなに苦しんでいる人がいるのに、自分はどうすることもできなかったからです。しかしここでわたしは、「わたしたちの手で平和をつくろう」などという励ましの言葉をかけるつもりもありませんでした。それは、現に苦しんでいる彼らの痛みを半分も理解できていないわたしが、彼らに励ましの言葉をかけるのは無責任で、彼らに失礼ではないかと思ったからです。また、それまでもプロジェクトの中で、口で言うのはたやすく行動に移すのはどれほど困難なものであるか、痛感したからです。改めて、日本にいるわたしと彼らの状況の違いを再認識しました。彼らは簡潔にわたしの質問に答えてくれましたが、その短い言葉の中にどれほどたくさんの思いを抱いていたのだろう…そう感じました。

このプロジェクトの参加者はみんな、純粹に、そして深く平和を求めています。それは、ディスカッションでの彼らの真剣な態度に表れていました。口で、目で、体全体で、平和を語る彼らの姿はわたしの目に焼き付いて離れません。その平和

への純粋な気持ちこそが、彼らを固い絆で結びつけたのだと思います。

わたしは、信じています。わたしたちのこの小さな友情の輪が広がり、大きくなって、2カ国を平和へと導くことを。彼らの純粋な気持ちは人々の心を動かすことができます。わたしも、もはや無関心ではられません。彼らと出会い、友人同士になった今、彼らが抱えている問題と一緒に取り組んでいきたいと思っています。しかしわたしには、プロジェクトの中での自分自身について、大きな反省点があります。2週間の中で、何度も消極的になり、飛び込んでいけなかったことがありました。それは、ディスカッションの中、食事中、共同作業で顕著に表れていたと思います。そのため、自分の力を100%使い果たせたという実感がありません。彼らから得たのは抱えきれないほど大きなものであったのに、自分は彼らに何を与えること

安井 一馬

日本 横浜市在住

わたしはこのプロジェクトに参加するまで、平和運動どころかパレスチナ問題に関心を持つことさえありませんでした。わたしはパレスチナ問題への単なる興味から参加しようと思いました。そして、この14日間を通じて、わたしはその決意が正しかったということを確認できました。

3月の事前研修と本番までの準備を通してイスラエル・パレスチナについて学習してきましたが、成田空港で彼らを迎えるときのわたしはなんとなく不安でした。理由の一つは、わたしが事前学習で焦点を当てていたのがこれから出会うイスラエル・パレスチナの高校生ではなく、イスラエル・パレスチナの歴史や現状に過ぎなかったからかもしれません。わたしのしていたことは遠くからイスラエル・パレスチナを眺めていただけで、そこに暮らす高

ができたのだろうか……。スタッフの方々やリーダーの先輩たちの足手まといになっただけなのは……。そう思うと、悔やんでも悔やみきれません。ですからわたしはその分まで、これからの生活で頑張らなければならないと感じています。これから、学校、またそれ以外で、自分の体験した素晴らしい出会いの体験を、一人でも多くの人に伝えていきます。プロジェクトで学んだすべてのことを無駄にしないよう、彼らとの出会いから得た自分なりの平和のメッセージを、この長崎から発信していきます。そして、平和の若木として成長し続けていきたいです。

最後に、スタッフの方々やリーダーの先輩たちをはじめ、善意あるすべて人の支えに感謝します。本当にたくさんの人に支えられて過ごした、かけがえのない時間をわたしは忘れません。本当にありがとうございました。

校生のことを知ることでなかったのです。しかし、わたしだけでなくイスラエル・パレスチナの高校生の間でもそこに暮らす人を知らないという点では同じことだったと思います。互いの先入観は、個人的体験による直接的なものと、マスメディアや身近な人の考えによる間接的なものがあったようです。那須高原の滞在では3カ国によるプレゼンテーションや一对一の個人的な対話によって、その先入観を脱ぎさって互いの考え方を聞くことができました。わたしが直接話したり一緒に笑ったりして彼らと知り合ったように、彼らも間接的な情報からではなく、ただ直接



の対話から互いを知り合うことができるのだと思いました。

しかし、互いの見解を聞き合うというのは相互理解への通過点に過ぎません。互いの見解に関する議論の応酬を今でも鮮明に覚えています。誰かが体験や事件、またそれに関する意見、悲しみや怒りといった感情を話すとしめます。すると、すかさず反論が出て、またそれにも反論がなされるといった状況でした。つまり、いかに相手の間違いを分からせて、いかに自分の正しさを分からせようかという議論になっていたように感じました。そのような議論が続いていたときはもどかしい思いでした。そこで、日本人という第三者としてわたしが感じたことを伝えられたのは、わずかながらこのプロジェクトへの貢献となったかと思えます。相手に変わることを求めるのではなく自分から変わっていくべきなのではないかと感じました。つまり、相手に意見を変えることを求める姿勢を止めて、相手の意見を冷静に受け止め理解しようとする姿勢をもつべきだと思ったのです。

相手の話を受け止めようとする姿勢、すなわち聞く姿勢は「痛みを聞く」ということを通じて高校生の中に浸透しました。それは主に長崎での出来事で、わたしたちがあえて長崎に行った意味が実感できました。わたしたちは原爆資料館で過去の長崎の痛みを聞きました。語り部の方からは被爆者の痛みを聞きました。また、過去を振り返って、平和を追い求め続けることを誓う、8月9日の長崎原爆犠牲者慰霊平和式典でも感じるものがありました。これらの、ただ「痛みを聞く」という経験はわたしたちを大きく変えました。この聞く姿勢は互いの理解へとつながりました。もちろんいくら相手を聞いても完全な理解というのは不可能で、当事者にしか分からないことは山ほどあるでしょう。しかし、同じ時間を共有してきた身近な人の話となると、その理解はより深いものになるはずです。こうしてわたしたちは次の一步を踏み出す準備ができました。

今やわたしたちは互いを理解しあえるチームとなったのです。しかし、このままでは小さなグループの小さな理解に過ぎません。わたしたちは何ができるのでしょうか。数々のディスカッションの中でも、東京での数回のものがわたしにとって一番楽しいものでした。過去に縛られることなく未来を見据えながらイスラエル・パレスチナの理想の関係を考えるというプログラムです。出会ったときは相手の見方を聞くことすらできなかったわたしたちが、2週間でイスラエル人とパレスチナ人にとっての妥協案を見いだしたのです。しかし、プロジェクトはここで終わりではありません。この小さな協調の和を広げられるのは、わたしたちだけなのです。

最後に、このプロジェクト全体を通して最も強く感じた「平和の大切さ」について書きたいと思えます。もちろん平和は大切ですが、今までのわたしは平生から平和の大切さを感じるということはありませんでした。わたしは原爆犠牲者慰霊平和式典の中継を意識して見たことすらありませんでした。今回参加した日本人高校生の中でも、自分の平和に対する意識の薄さを感じるばかりでした。たとえば新聞でイスラエル・パレスチナ間に自爆攻撃があったと知っても、以前のわたしにとってそれは遠くの世界のことに過ぎず、それが「平和の大切さ」に結びつきませんでした。しかし今ではイスラエル・パレスチナ問題は、2週間を一緒に過ごした友人が正に直面している問題なのです。社会情勢に目を向けて社会の変化を身近に感じとって、常に平和を求め続けることがいかに重要であるか分かりました。

わたしはこのプロジェクトを通して大きく変わることができました。これからのわたしの人生には常に「平和」というキーワードがついて回ることでしょう。このプロジェクトを支えてくださったすべての方に心から御礼申し上げます。



アヴィシャグ・ヨセフィアン Avishag Yosephyan

イスラエル テルアビブ在住

日本で過ごした2週間、イスラエル人、パレスチナ人、もちろん日本人も一緒にいて、いろいろな興味つきない体験をしました。たくさん学び、知識も増え、違う文化をもつ若者や大人とも友人になりました。また他の人たちの思いに耳を傾け、わたし自身についても聞いてもらって、自分の意見もはっきりしてきました。

交流の旅の前、つまりこのプロジェクトに入る前に、パレスチナ関連の、イスラエルでのとても難しい状況に気づいてはいました。いろいろ話は聞いていましたが、わたしの理解できる範囲はとても限られていました。実際のところ、今考えれば、現実の問題への関心や状況把握が不十分だったと思っています。

日本での2週間で、お喋りや話し合いを通して、もっと問題への理解、知識を深めていきました。2つの民族の歴史、その関係、現状についてさらに知ることができました。パレスチナ人一人ひとりの話を聞いて、わたしたちの共通のテーマについての考え方、未来への希望、将来のわたし自身のあり方を築くための見通しをもちました。

一緒にいて、言い合いになったり、意見のくい違いがあって、討論が緊張したり感情が高ぶったりすることもありました。しかし互いに尊敬し合う心があったので、気持ち良く素直に話せました。みんなが心からわたしの話を聞き、わたしの感じ方、考え方を受け止めてくれたからです。

一番大事なことは、わたし自身の関心が深まり、もっと知りたくなったことです。紛争への見方が変わったと感じています。いっそう理解を深めたいと望

んでいます。両親や周りの人たちにもいろいろ聞いて、この問題への関心がいっそう強まりました。もう、遠くから眺めたり考えたりすることではなく、わたしの中のより深いところにある問題となりました。

イスラエル・パレスチナの紛争に加え、日本についても——第2次世界大戦中の広島・長崎の原爆についても学びました。何度か、このことで話し合い、原爆3世の2人の若者と考えや感じていることを分かち合いました。歴史上の事実やその展開だけでなく、個人レベルでの見方に触れることができて幸いでした。これら新しい友人の話にはとても心を動かされました。

平和交流の旅では、多くのことを学びましたが、“学ぶ体験”だけでなく、新しい友だちをつくることもできました。驚いたことに、わたしたちは、もう何カ月も何年も一緒にいたかのように、すぐに親しくなり、打ち解けることができました。会ってまだ数日しかたっていなかったのに！ 自由時間には、セッションの話し合いがまだ心に残っていてその続きを話すこともありましたが、普通のティーン同士のお喋りをしたり、楽しみ遠足や日本の高校生たちと街を歩いたりしました。わくわくしてとても楽しかったです。

結論として、これはわたしにとって本当に意義深い体験でした。きっといつまでもわたしの人生に影響し続けることでしょう。

旅の仲間の一人ひとりを心に深くとどめ、懐かしく思っています。みんな、素晴らしい人たちです。残された仕事はただ一つ、プロジェクトをここで、わたしの今いる所で続けること。互いに連絡をとりあっている限りそれは可能です。もうそうしていますし、間違いなく互いの交流は続くことでしょう。

それでは、心からお礼を申し上げます。

いただいた尊い機会に感謝しています。



アレクサンドラ・ボスコヴィッチ Alexandra Boskovich

イスラエル テルアビブ在住

日本への旅は“平和交流使節”を超えるものでした。本当に、わたしと異なる政治的立場をもつ友人を得ました。だからといって、わたしの考え方が変えられたわけではないし、違いがあることで友好

関係が妨げられることもなかったのです。

生き方、服装、言葉は違っていても、わたしたちの心臓は同じように鼓動しています。

旅の一員として選ばれ、日本のような素晴らしい国に行くチャンスを得、最高の人生経験をいただいたことを名誉に思っています。

このプロジェクトのためにわたしたちが日本に行ったことには主な理由が2つあります。

1. 紛争について話し合い、相手方の意見を受け止めてみること。
2. どのようにゆるし、それを進めていくか、日本に学ぶこと。

歴史の本でよく知られているように、日本は第2次世界大戦で米国と激しく争いました。米軍は広島・長崎の2都市に原爆を落とし、何千人もの罪なき人々が殺され、続く62年間、もっと多くの人々が放射能のために亡くなりました。終わりのない悲劇です。

けれども、素晴らしい仕方で、日本は米国をゆるすことができ、命の道へと進みました。そこを学びに行ったのです…どうやってゆるすか。

日本の人たちは示してくれました。他方の意見に耳を傾けること。たとえ、自分たちとは異なる見方であっても、それを尊重すること。心の中で何を感じているかをもっと良く理解するために、わたしたちは相手方の立場に立とうと努めました。

セッションの多くは難しく、テーマについて話す

のも厳しいことでした。個人的な話を分かち合い、心を開いて本音を出すことを恐れないようにしました。何でも発言できるよい機会でしたから。聞くのは辛く傷つくことでもあったのですが。

わたしたちの間に結ばれた絆はとても強くなりました。単なるグループから友だち同士へ、友だちから目標をもつチームへと成長しました。

互いに信じあい、尊重し、大切にしようチームです。

互いを考えあう上で政治問題は妨げになりませんでした。話し合いが済めば、いつもわたしたちは一緒に外へ出、続きを話し、微笑み合い、笑い合いました。創りあげられた温かいつなかりに、現実の問題が水をさすことはありません。

わたしにとって、帰路は辛いものでした。ベングリオン空港に着いて、初めて「ああ、もう終わったのだ」と実感しました。旅は終わった。泣けてきました。

わたしは忘れてしまうことを恐れていました。この信じがたい旅。わたしの人生観を全く変えてしまった旅を。

わたしたちイスラエルグループは、エルサレムのパレスチナ人を訪ねました。とても楽しかったです。

旅の一人ひとりすべての仲間を大切に思っています。わたしの心の宝物です。いつまでもともにいます。

この、平和と友情の素晴らしい旅を決して忘れません。

ガル・ローゼンブルート Gal Rosenbluth

イスラエル テルアビブ在住

わたしたちが日本から帰って来た時、日本への旅が終わってしまう、このプロジェクトが終わってしまうと思い、とても悲しくなりました。しかしその後、エルサレムとテルアビブで何度か他のイスラエル人・パレスチナ人の参加者たちと会うことができ、このプロジェクトはたった今始まったばかりなのだ分かりました。このことが分かった時、わたしはとても嬉しくなって、ここにみんなが一緒にいるということを誇りに思いました。

プロジェクトの中で何が一番良かったのか、簡単に選ぶことはできません。すべてがそれぞれの意味で特別だったからです。しかし一つ言えることは、もしこれが日本という平和な国ではなかったら、わたしたちを温かく迎え入れてくれた皆さんがいなかったら、わたしたちが経験したような旅にはならなかったでしょう。

わたしの中でたくさんの変化がありました。イスラエルにおける紛争の見方が少し変わり、今はわ

たし自身が紛争を解決する真の方法を探しているように思います。日本について、彼らの原爆の経験や文化についてもたくさん学びました。この旅はわたしをさまざまな点で力強く動かしてくれました。

そのお陰で今、日本語の勉強を始めています。近いうちにアラビア語も始めたいと思っています。

わたしはパレスチナ人についてたくさんのことを学びましたが、正直に言えば、同時に自分自身についてもまた多くを学びました。今まで知らなかった自分を発見しましたし、人は時に妥協する必要があり、同時に相手をゆるす力も持っているということが明白だと知りました。

今後もこのプロジェクトのメンバーとして参加し、プロジェクトが終わってからも会ったように、新しくできた友だちと会い続けていきたいと思っています。



ノアム・シャニ Noam Shani

イスラエル テルアビブ在住

パレスチナと日本の友だちのことを、わたしはどんなに懐かしく思っているか、まず言いたいです。日本で3者の出会いが始まった時、何か特別なことが生まれ出るに違いないと直感しました。

話し合ううちに、いろいろな仕方で手を伸べ合い、それぞれの生き方に触れて、はっきりと様子が見つかるようになるにつれて、互いに認め合えるようになりました。この体験を忘れぬよう、良き実りとなるよう、個々人がいかに努力しているかが伝

わってきます。

プロジェクトを創った人たちが掲げた夢を、受け継ぐことがわたしたちの責任です。きっと何らかの方法でお返しできると信じています。





ペレグ バル・オン Peleg Bar-On

イスラエル テルアビブ在住

僕は、このプロジェクトに参加できて本当によかったと思っています。何か素晴らしいことをやった時にだけ得られる達成感があります。

イスラエル人とパレスチナ人は敵同士だと言われがちですが、この日本で、また日本の友だちのお陰で、確かに僕たちはみんな一緒に生活し、食べ、学びあい、互いに話し合いました。

この経験で、パレスチナの友だちに対してもっと寛容になること、もっと理解すること、そして受け入れることを僕は学びました。人の発言をもっと熱心に注意して聴くことを学びました。また日本とパレスチナ双方の文化に感銘を受けました。

僕は、このプロジェクトを自分だけのものとせず僕たちの社会（共同体）のものとするために、活動を続け、次の世代へつなげてゆきたいと思っています。



ジハド・ファラージュ Jihad Farraj

パレスチナ ベツレヘム在住

1. 何を学んだか？

たくさん学びました。言葉、時間厳守、協力、新しい友人をつくること。

2. 特別な体験は？

マ・メゾン光星へ行ったこと。ハンディをもつ人たちと一緒に踊ったこと。踊りは素敵でした。この人たちと交流できたこと。

3. これからどのように続けたいか？

僕たちは“パレスチナ人とイスラエル人”で、力をあわせて平和を探求できます。



全体ミーティング「私の家族の痛み・苦しみ」（長崎・ウェルシティにて）

ナディーヌ・ハンダル Nadine Handal

パレスチナ ベイトハニナ在住

プロジェクトに参加してから、わたしは何かから解放されたような気持ちになり、自信を持ったように感じています。今は、友だちをはじめとするわたしの周りの人々に、メッセージを伝えることができます。また自身を誇りにも思っています。なぜなら、このプロジェクトを通して達成感を味わっているからです。わたしたちがみな友だちになれたことも嬉しく思います。

日本の人々がみなイスラエル・パレスチナ間の紛争を知っているわけではないにも関わらず、皆さんの前で「語らいの夕べ」を開けたのは、わたしにとって素晴らしいことでした。

わたしは分別をもって話し、また考える方法を学びました。ものごとをより深く見つめるようにな

り、以前より自信も持てるようになりました。さらに、自分とは違う意見をどのように聞くかということも学びました。そして、宗教や国籍の違いがあっても、ともに活動し、より良い将来を築くために、互いの違いに目を向けるのではなく、互いに共通し共有するものを見るべきだ、という結論に達しました。

来年も、このプロジェクトがさらに続いていくことを期待しています。そして、わたし自身もイスラエル人と日本人とともにミーティングを続けていきたいと思っています。



ナルディーヌ・ジルデ Nardine Jildeh

パレスチナ 東エルサレム在住

「平和をつくる子ども交流プロジェクト」に参加して、わたしは今どのように感じているのだろうか。この質問が頭に浮かぶ時、このプロジェクトがわたしの人生に与えたインパクトの大きさに圧倒されるような気持ちになります。わたしはさまざまな面において変わりました。とりわけ、たくさんの友だちを得たことに興奮しており、彼らはわたしにとって兄弟姉妹のように身近な存在です。このような素晴らしい友情関係をみんなが達成できたことを、誇りに思っています。このプロジェクトは規模こそ小さいですが、高校生であるわたしたちに莫大な影響力を持ち、わたしたちの住む社会に短期的に、そして明らかに長期的にも影響を与えました。

日本に別れを告げてからすでに約 50 日が経過

していますが、思い出はいまだにすべて残っています。わたしたちが敵としてではなく同じ人間として、そしてともに働き平和的解決をつかまなければならない平等なパートナーとして関わりあった、この素晴らしいプロジェクトの一員であったことを嬉しく思います。

帰国後、イブラヒム神父のオフィスでのミーティングでプロジェクト時の動画を見ました。喜びと幸せに満たされ、日本滞在中の感動が一層深まりました。

今、わたしが以前よりも感じていることがあります。それは、ひねくれた話のように聞こえると思



いますが、日本で過ごした中で最も良かった時間は、那須高原滞在中にみんなでお皿洗いをした時です。この時間は互いにいろいろなことについて、なごんだ雰囲気の中で話をする良い機会でした。わたしたちは互いの文化を理解し、それを尊重することもできました。簡単に言えば、互いに手を伸ばし、愛し合うよう努めたということです。

わたし個人が得たことは、もっと成熟すること、自分に自信を持つことです。そしてそれ以上に、

どのように相手に対してありのままに耳を傾け、理解し、ゆるし、尊重し、受け入れるか、ということも学びました。

わたしは確信しています。わたしたちがこれからもミーティングを行い続け、わたしたちが口にし始めたことを今後も話し合い続けます。そして、ともに働き、わたしたちが踏み固めた平和の橋の上で会い続けていきます。

レナート・バンダック Renato Bandak

パレスチナ エルサレム在住

こうして僕の友だちみんなにまた会えるのは素晴らしいことです。今、僕は今までの中で最高の感激を味わっています。日本での素晴らしい2週間の後、こうして参加者みんなに会い、僕たちの間にある最も大切な友情を感じて幸せと嬉しさでいっぱいです。

このプロジェクトは、イスラエル、パレスチナすべての参加者にとって本当に貴重な体験でした。この体験は僕たちにたくさんのことを教えてくれましたし、僕たちの人格形成や理解力を深める助けになったと思います。もちろん僕たちは互いの違いに対して、より心を開けるようになりました。3カ国それぞれの現実と時の流れの中で何をなすべきだったかを見、聞き、それらをどのように積極的に受け入れていけばよいかを学びました。

とても楽しかったし愉快的こともたくさんあったプロジェクトでしたが、僕の人格の中には大きな変化が起こりました。また、これからの人生に役

に立つ多くの術を身につけることができました。今僕は微妙な問題を話すことができるようになったと思うし、前よりうまく話し合いができるようになったと思います。より誠実であること

は僕が学んだことの1つです。生活の中でとるあらゆる行動に僕たちは責任があり、他の人びとの生活にその行動が与える影響にも責任があることを痛感しました。

この協力が専門的なレベルで、また教育的、社会的なレベルで続いていくよう望んでいます。私たちは平和を築くために、より幸せになるために何か始めなければならないと思います。もし平和を築くなら、過去とどう向き合い、これからどうすべきなのか、日本人は良いお手本だと思います。



ユーセフ・ランティシ Yousef Rantisi

パレスチナ ラマラ在住

「平和」のうちに生きるという素晴らしい感覚を味わっています。イスラエルの友だちがいるということは、おおかたの政治家が到達し得なかった平和のレベルに達したような感じです。夢は本当に実現したのです。

日本にいた間に、僕たちは強い絆をつくり、また平和という言葉を理解することができました。日本は、人びとが戦争のために苦しみ、その後復興を遂げ平和に暮らしている例として最適な場所です。日本で、僕はイスラエル人に対して僕の考えや振る舞い方を変えなければいけないと知りました。

このプロジェクトから僕はたくさんのことを学びました。特に、平和とは、平和の可能性をどこまで信じられるかということだと分かりました。僕たちは忘れることはできないが、ゆるすための素晴

らしいチャンスがあることも知っています。人生はその一瞬、一瞬を楽しむにはあまりに短いので、報復や仕返しを考える暇などないはずで、一部を見て、全体を評価するのは間違っていると思います。どこにも、善良な人も悪い人もいますので。

この経験を最も有効に役立てるには、このような集まりを（ミーティングを）続けていかなければいけないと思います。続けることで互いの友情が生まれ、また兄弟愛も生まれてくると思うからです。

僕たちの輪をより大きく広げることには僕たちは力を尽くさなければならない、と思っています。



ユーセフとナディーヌ。那須でのセッションで。

リーダー



石黒 朝香

日本 東京在住

「再び」プロジェクトに参加して

2005年のプロジェクトから6カ月後に上京したわたしは、1年間準備に携わらせていただきました。高校生として参加させていただいた時は、まさかこんなに活動が続けられるとは思ってもみませんでした。日程が決まり、行き先が決まり、チャリティコンサートを企画し、参加者が決まり、プログラムが決まり、当日を迎える—。2年前のプロジェクトと違ったのは、やはりこの準備期間だったと思います。何よりも本当に多くの方が、リーダーを含めても約20人の若者たちという小さなグループの対話のために、これほどにサポートしてくださっているということを知りました。参加者選定のために現地視察にも行かせていただきました。候補者の家庭を訪問して話を聞くことができたのは、プロジェクト本番で比較的スムーズに彼らと馴染むことができた点でとても有意義であったと思います。またただ選定のためだけではなく、新たに紛争について学ぶことも多く、わたしたちがプロジェクトを行う意味も改めて考えさせられました。

今回は、「参加者」と「リーダー」という役割の双方を担う形での参加となりました。

一番の反省点は、高校生・リーダー間の話が十分でなかったこと。リーダーは、特に日本人高校生のサポートが主な役割でしたが、意外にその他の仕事も多く(というのはい訳ですが)、たくさん刺激を受けて頑張っている彼らを放ったらかしにしていました。特に最初的那須高原滞在中は、

ディスカッションの後に振り返ったり、もっと話を聞いたりするべきだったのではないかと思います。ただ、高校生たちは周りの想像をはるかに超えた成長を見せてくれ、あまり心配はいらなかったのかもしれませんが。

次の反省点は、リーダー内でのコンセンサスについてです。イスラエル側リーダーのタリは当日まで会ったことがなく、プロジェクトに馴染めるか一番心配していた人物でした。しかし彼女の驚くほどのマイペースさと、ホームステイなど比較的ゆったり話す時間が取れたことに救われ、よい関係を築くことができました。パレスチナ側リーダーのヤターブは、マイナスの感情をなかなか口に出さない彼の性格と、高校生たちと同様に時間の余裕のなさがすれ違いを生み、最終日には口論までしてしまいました。それでも、一緒に2年前のプロジェクトに参加して、わたしのイスラエル・パレスチナ滞在中では一緒にいる時間が一番長い友だちです。互いに友であることには変わりなく、今後も平和活動が続けていく良いパートナーであってほしいと思っています。

最も反省したのは、日本人リーダーとの間でのコンセンサスでした。前述したように、わたしは他のリーダーである滝川さん、横山君よりも1年早く上京し、このプロジェクトに関わりました。彼らも今年の4月に東京に来てすぐに実行委員会に加わりました。分からないこともたくさんあったはずなのに、同じ立場のわたしがうまく協力して進めることができませんでした。そのせいで、2人には不満なこともたくさんあったと思います。

ディスカッションに関して、この前よりももっと踏み込んだ話し合いがしたい……。前回参加してか

らずっと考えてきたことです。今回の高校生たちは、すでに自国で平和活動に参加している人も多く、平和に対して一定の考え方を持っている人もいました。しかしプロジェクトが始まってみると、前回よりも一歩を踏み出す厳しさを痛感しました。ディスカッションで彼らの身近に起きた紛争に関する出来事を話してもらっても、彼らが抱えているものが、前回よりも深刻なものであるように感じられ、彼ら自身がそれ以上に踏み込むことを許してくれませんでした。特に、歴史や宗教、家族の話をされてしまえば、日本人は黙って聞いていることしかできないのです。わたしがどれだけ彼らを理解しようとしても、理解できないことです。

わたしにとって理解の難しさの象徴だったのは、1人のイスラエル人高校生でした。彼女の祖父母がホロコーストの生き残りで、ディスカッションなどでホロコーストの話が出る度に涙を流しました。もちろん彼女がホロコーストに遭ったわけではありませんが、そうした家族の歴史が彼女の一つのアイデンティティなのです。大切に思っている家族と彼女の歴史の中にわたしが入る余地なんてありません。わたしが慰めの言葉をかけたからといって、それが彼女に平和をもたらすわけではありません。そして、もちろん苦難を抱えているのは他のイスラエル人も同じであり、パレスチナ人であれ、さらには日本人であれ同じです。彼女自身、このように苦難を必死に乗り越えようと、前向きに生きようと頑張っています。

わたしが実際に彼らを動かすことはできません。2年間で得た教訓です。せめてこうして始まった友好関係が、継続した活動という実りにつながり、彼ら自身の「世界を変えたい」という思いがいつの日か現実に動きに変わってくれることを祈るばかり

りです。

驚くべきことは、イスラエル・パレスチナの高校生たちが、プロジェクトの後にみんなで会う機会をすでに何度も作っていることです。2年前には踏み出せなかった第1歩が、新たに始まったことにとっても感動し、普通では見ることのできない、彼らが自国で互いに抱き合っている姿を想像するだけで、それだけでもこのプロジェクトの意味があったのではないかと思っています。

2回目の参加であっても、2週間の間毎日が新しい刺激だらけで、今この文章を書いている間も何一つとして整理のついでにすることがありません。それでも前回の旅が2年間かかって整理がつきだしたのと同じように、今回もまた2年、いえそれ以上かけて自分のものにしていくのだろう、と思います。

前回のプロジェクトが終わってから、彼らと連絡を取り続け、幸運なことに現地に2度も行かせていただき、貴重な経験をしてきました。学ぶことがたくさんあり、一方でたくさんの疑問も悔しい思いもありました。全く違う文化と歴史を持ち、言葉も違い、理解しようとするのも大変です。しかし、こうした経験をさせていただいたことが今のわたしの財産になっています。

最後に、井上さん、イブラヒム神父、プロジェクトに参加した高校生、ファシリテーター、同行スタッフ、実行委員会の皆様、支援して下さった多くの皆様に心から感謝いたします。わたしがこうしてたくさんのことを学ばせていただいていることを、いつか返すことができたらと思います。特に、一緒に4月から関わってくれた滝川さん、横山君、本当にどうもありがとうございます。これからもどうぞよろしくお願いします。



横山 雄一

日本 東京在住

リーダーの役目についてのご報告

率直に言うと、仕事の分担がはっきりと決まっていなかったために、戸惑いを感じることがしばしばあった。高校生としてプログラムに従っていればよかった前回のプロジェクトとは違い、「リーダー」の位置の難しさを考えさせられた。旅が進むにつれ、高校生と話を（相談と称するにはあまりにもおこがましい）、グループ分け、パーティーの司会、その

他雑用、などの役割が固定されてきたが、今思うともっといろいろなことができたのではないかと思われる。

ディスカッションの時にもっと高校生を助けることができれば、というのが最大の反省である。那須高原では何か話をするときにちょっとした通訳のようなことをする機会があったが、英語力と背景知識の不足のせいで、自分が議論についていくことすらままならず、高校生の助けになるなど夢のまた夢であった。そういった点からも、前回と比べて英語の重要性を認識させられることが多い旅だった。



滝川 理紗

日本 東京在住

'07 プロジェクトに参加して

2年前に初めてイスラエル・パレスチナの友人ができて、それ以来自分自身イスラエル・パレスチナの人々の苦しみ、そして訴えというものを多少なりとも理解していると感じていました。今回プロジェクトに参加して、今までとは違った視点からイスラエル・パレスチナの問題を学べたのではないかと思います。

事実、今回は那須高原のみの参加となり、両国の高校生たちの変化を見ることができなかったのが本当に残念です。しかし、短期間ではあったにせよ、現地の彼らから学ぶことが大変多くありました。

今年の高校生は以前の参加者と比べ、事前にミーティングをしていたおかげでずいぶん双方が最初から打ち解けている様子でした。その分、互いを分かり合い、議論にならないのではないかと感じましたが、ディスカッションになるとイスラエル・パレスチナの高校生は互いに主張し、特にイスラエルの高校生がパレスチナの主張に反論を重ねていました。イスラエルの高校生は、分離の壁や難民などのパレスチナの現状を議論する中で初めて知って、驚いていたことも明確でした。

さらに、議論の中で両国の高校生は必ず自分たちの安全・自由という面を最も大事にしているのだと感じました。イスラエルで続く自爆攻撃、そしてパレスチナではイスラエル軍による破壊や、分離の壁の建設で、自由や安全が全くといっていいほど保障されていません。平和な環境に住んでいる

わたしたち日本人には理解しようとしても大変難しいことも多くあり、何度聴いても、両国それぞれの苦しみは、それが本当のことなのかと考えてしまうくらい、想像を絶しています。

メディアを通した情報がすべて正しいのだと、わたしたちはよく考えていると思います。またその問題がメディアや授業で取り上げられなければ、現状を知ることができません。

今回短い期間ではありましたが、互いの主張を行う前に、きちんとした互いの事実を伝えなけれ

ばならないということを強く感じました。事実を伝えるのはそれぞれの国の一人ひとりであり、第三者の手助けを要します。そのためにも、わたしたちはこのような企画を1度で終わらせるのではなく、これからも継続していくことが大切であると強く感じました。

那須高原のみの参加で、十分にリーダーとしての役割を果たすことができなかつたことが本当に残念ですが、再度このような素晴らしい経験をさせていただいたことを本当に感謝しています。

タリ・バレル Tali Barel

イスラエル ラマ・エファル在住

当初わたしは、このプロジェクトに対して何の期待もなく、プロジェクトの内容についてもそれほど理解を深めないまま日本へやってきました。

わたしにとって同年代のパレスチナ人と日本人に会うのは生まれて初めてでしたが、分かったことは、彼らはわたしとまるっきり同じだということでした。わたしと同じ考え、趣味、興味分野を持った学生でした。わたしたちは本当に良い友だちになることができました。

イスラエル人、パレスチナ人、日本人、スタッフの全員が驚くようなプロセスを重ね、一人ひとりが相手側のこと、さらには自身のことについて学びました。わたしたちは心から素直に、心の深い部分にある感情を共有することができたと感じています。

わたしは話を聴くということ、理解すること、自分または相手が何であるのか認めること、歩み寄ること、もっと敏感になることを学びました。

わたしにとって最も意味深かったことは、わたしたちはみな同じゴールを目指していた、そしていまも目指し続けているという事実です。わたしたちはみな平和を求め、解決策を求め、苦しみを食い止めたいと願っています。わたしたちはみな悲し

みや痛みは欲しくありませんし、こういうものにうんざりしています。

このプロジェクトは、わたし自身の、イスラエル人としてのパレスチナ人に対するポジションに気づかせてくれました。

さらに、わたしは今後も平和のための活動を続け、ここ聖地が抱える問題について勉強し、わたしたちが日本から始めたプロセスを発展させていきたいと思っています。

プロジェクトのお陰で、わたしは希望で満たされ、平和のために闘う力を得ることができました。そしてこれこそが正しい、唯一の方法であると信じています。





ヤクーブ・ガザウイ Ya'coub Ghazzawi

パレスチナ エルサレム在住

日本を去ってほぼ2カ月たちましたが、日本で始めた平和の歩みをイスラエル人・パレスチナ人とともに続けたいと今も思っています。このプロジェクトを引き継ぎ、少しでも目標を達せられるよう願っています。

旅のうち一番良かったことは、何といてもイスラエル・パレスチナと日本の若者たちと顔を突き合わせて、互いのこと、文化、感じ方、過去、夢や将来の希望について知りえたことです。

それぞれが家に帰り、そこで現実に戻った今となっては、日本での出来事は過去のことになりました。大体人は、ある瞬間、またはある期間に

感じたことは、すぐに忘れてしまうものですが、わたしたちの場合それはありえません。日本で何を感じ、何をしてきたか、まだ記憶は鮮やかで、日本で始めたことをずっと続けていこうと思うと、心躍ります。

このプロジェクトからたくさん学びました。特に聴くこと、歩み寄ること、理解することです。イスラエル人・パレスチナ人それぞれの考え方、感じ方、その過去、現実について、更に日本の文化や過去についても学びました。素晴らしい人たち、この上ない友人とも出会いました。

これからもともに集い、始まった平和への歩みを進めたいです。日本人も、遠く離れているけれど、この歩みの仲間になってもらいたいです。



ヤクーブとペレグ 那須でのセッションで。

ファシリテーター



ヤニーヴ・シェンハヴ(左)

Yaniv Shenhav

アントニー・ハバシユ(右)

Antony Habash

イスラエル・パレスチナ引率者

Children Without Borders「国境なき子どもたち」のスタッフ

パレスチナ、イスラエル、日本の学生の皆さんへ

2007年8月に日本で行われた「平和をつくる子ども交流プロジェクト」にとっても積極的に参加してくれてありがとう。この場を借りて、皆さんに心からの感謝を伝えます。

このプログラムを組織することは簡単ではなく、初めとても心配していました。しかし、パレスチナ、イスラエル、日本で組織した実行委員会は、まるで素晴らしいオーケストラのようにともに働きました。一人ひとりのメンバーが、自分のできる範囲で貢献し合いました。そしてこの経験はわたしたちにとって、個人としてもグループのメンバーとしても、とても実りの多いものとなりました。

わたしたちは誰もこんな経験があると思いません。ある人が部屋に入ってきます。するとすぐに、初めて会ったとは思えない不思議な深い絆を感じます。このように人生には説明できないことがたくさんあります。これは予期せずして訪れ、その時わたしたちはかけがえのない宝を発見したと思うのです。

そしてこの人は多くの場合、あなたの感受性を体現しているのです。まるで自分の心の中を見ているような気がします。

想像を超えるほどのレベルで、わたしたちの人生を豊かにしてくれる人、そしてわたしたちの人生

を根底から変えてくれるような人に出会うことは、容易ではありません。あなたの人生に立ち現れ、そして、いつまでも影響を与え続けてくれる人。

今回わたしたちが出会った時、まさにそのかけがえのない出会いが訪れたことが分かりました。初めは見知らぬ人でしたが、いつか親友になっていました。まだ出会ったばかりなのに、もうずっと知っているような気がしています。

これは、パレスチナとイスラエルが、ともに何かを成し遂げられるという生きた証拠になりました。そして日本の人々という、間に立ってくれる方たちのサポートを得て、イスラエルとパレスチナが友人になれるという、生きた証となったのです。

皆様に、神の恵みを祈ります。そして、また来年も会えることを祈ります。

今回のプログラムで、わたしたちは、一人ひとりの特徴をこんなふうに理解しました。これを、善意で受け止めていただければ幸いです。

レナート：火山

タリ：チャーミング

雄一：男の中の男

ナルディーヌ：スマート

アレクサンドラ：蝶々

茉梨菜：ソフト

ナディーヌ：アラブの美

アヴィシャグ：天使の目
一馬：思慮深い天才
ユーセフ：ミスター・コンピューター
ガル：感情豊か
修平：静か
ヤクープ：兄貴
理紗：かわいい

ノアム：感受性豊か
史織：笑顔
ペレグ：ビッグなハート
朝香：フレンドリー

そして最後に……
ジハド：パレスチナ製日本人



濱田 壮久

横浜教区 司祭

ファシリテーターとして 関わって

このプロジェクトに関わるようになったのは、2005年のときからです。前回は対話やディスカッション、互いの痛みを聞き合うセッションなどは、日本人スタッフの手で進められましたが、今回はプロジェクトの中では、イスラエルからヤニープ、パレスチナからはアントニー、日本からは松本みどりおよび私の、3カ国4名でファシリテーターグループを構成して相談の上で進めることができました。各自が今まで培ってきた体験の中で見いだしたいろいろな手法やセッションの進め方はバラエティーに富んだものでした。それらは若者たちの心の深いところにある想いを分かち合い、聴き合い、理解し合い、受け入れ合うための一助になったのではないかな、と思っています。

プロジェクトが進むうちに、3カ国という異なる文化的背景や異なる歴史を背負う一人ひとりの、それぞれの心の深いところにある想いがことばになっていきました。その言葉を聞くことで、本当にたくさんのことを私自身も教えてもらえたと感じています。「平和をつくる」と、言葉にして言うこと

は簡単ですが、実際に生きているわたしたち人間の現実は、とても複雑で、内心では整理整頓できていない混乱や恐れ、怒りが渦巻いているのも、また事実です。心の中にある相手との溝の深さを直視せざるを得ないとき、「平和」というのは、美しい理想であり、到達したい頂点ではありますが、遥か遠い道のりを一步一步進んでいかなければ到達することができないのだ、ということも思い知らされます。

この2週間のプロジェクトの中で、紛争の背景にあるそれぞれの相手に対する怒りや憎しみがすぐに氷解した、ということは決してありませんでしたが、しかし一方で、お互いに歩み寄り、受け入れ合おうとして努力し、旅の終わりには、本当に友だちとして別れを惜しみ、再会を祈っている姿を目の当たりにして、未来への希望を感じることができました。若者たちの素直で柔軟な心、そして、より良い未来を、平和に生きることのできる世界を作るために、どんな努力も惜しまないという固い決意に出会うとき、私も微力ながら、これからも「平和をつくる」ために努力していこう、という決意を新たにしました。

このプロジェクトを支えてくださった皆様に、心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

松本 みどり

実行委員

手記 エルサレム訪問記

イスラエル・パレスチナ高校生選出に当たって

2007年2月27日、わたしたち3人は、井上弘子さんの待つテルアビブに向けて成田空港を出発しました。今回の旅の目的は、夏の交流プログラムに招くイスラエル・パレスチナ双方の高校生の選定です。前回の日本人参加者、大学2年生になった石黒朝香さんと、今年晴れて大学生になった滝川理紗さん、それに前回は取材する立場であったわたし、この3人が大事な役割を仰せ付き、井上さんをサポートすべく現地に向かったのです。

さて、荷物をピックアップし、外へ出たわたしたちを迎えてくれたのは、井上さんの他に、2005年の来日メンバー、パレスチナ人のテディとヤクープ！

嵐のような抱擁とキス！ なんかもう息子みたいな気分に。こうして、わざわざ空港まで迎えに来てくれるなんて、本当にありがたく可愛いです。涙が出そうになりました。思いやり深く、よく気の付くテディ（ちょっと日本人みたいです）、ちょっと自分の人生に迷いを覚えながらも、わたしたちの活動を全身で受け止めようとしているヤクープ。2人とも1年の間に、また大分大人っぽくなっていました。

今回、わたしたちは夏の旅のリーダーとして、前回参加者の中から、イスラエル人1人とパレスチナ人1人を選ばなくてはなりません。久しぶりに空港で出会った2人のパレスチナ人の若者を見て、その作業の困難さを予感しましたが、それはまさに的中しました。

わたしたちは、4日半のエルサレム滞在中に、パレスチナ人のお宅4軒、イスラエル人のお宅9軒を訪ね、合計15人の高校生に会いました。更に3月3日（土）には、候補者全員に声をかけ、ミーティングを開催。プロジェクトの説明、自己紹介、そして3つの課題について討論してもらいました。

テディもヤクープも今回のわたしたちのスケジュールに合わせて、可能な限りの手伝いを申し出てくれ、ミーティングの際には、討論を引っ張るファシリテーターの役目も担ってくれました。テディは大学の授業が終わると駆けつけて合流、その場その場の交渉をしてくれるなど、頼もしい限りでした。そして、大学にまだ入っていないヤクープは、ほとんどの候補者家庭訪問に同行。その過程で、



来日候補者とのミーティング。（エルサレム・ノートルダムセンターにて）

わたしたちが驚いたのがヤクーブの成長ぶりだったのです。イスラエル人・パレスチナ人双方に対して、敢えてチャレンジな質問を冷静に候補者に投げかけてくれるヤクーブには本当にびっくりしました。パレスチナ人がイスラエル人の居住区に入るとのことだけでも、大きな勇気が必要（勿論、逆の場合も）なのですが、ある意味、自分たちを「支配している」イスラエル人に厳しい質問を淡々とぶつけるのです。このヤクーブの姿勢を見て、わたしたちは将来のリーダーとしての可能性を見だし、最後の最後に彼にパレスチナ人のOBリーダーとして来てもらうことを決断しました。旅行中に何かあった時の対応などは、もしかするとテディの方が交渉能力・まとめる能力では上なのかもしれません。しかし、わたしたちは、ヤクーブのチャレンジ精神にかけてみることにしたのです。

エルサレム滞在中にヤクーブは、日本に来て井上さんのもとでNPOの仕事を手伝いたいとわたしに相談してきました。日本に来たいのか、今のパレスチナから抜け出したいのか、あるいは本当にこの交流の仕事に携わりたいのか、それは彼にも恐らく分かっていないでしょう。しかし、少なくとも、彼の中でこの交流プロジェクトが育っており、何かしたいと思っていることは感じられ、非常に嬉しく感じました。

ただ、将来図がまだきちんと描けていないヤクーブが今、日本に来て得るものは少ないように思えたわたしは、心を鬼にし、「あなたの気持ちは嬉しい。でも、井上さんの手伝いはよいとしても、それは仕事にはならない。あくまでもボランティア。それにあなたに日本で何ができる？ 何か勉強したいことがあって日本に来たいのなら、こちらで大学を出てから奨学金を得て、日本の大学院に入った方がいいと思う。もし、まだ目的がハッキリしないのなら、いずれにしても、こちらでイブラヒム神父と一緒にイスラエル人とパレスチナ人のメディエーターになってほしい。そうしてもらえると、非常に心強いし助かる」とお願いしたのでした。

わたしが言ったことは、若い彼には厳しい言葉だと思います。パレスチナ人にとっては、八方塞がりの状態で、国を抜け出したいと思う気持ちを誰が非難できるでしょうか。日本は平和です。彼は、そんな国から来た私たちと出会い、そんな国を垣間見ているのです。物資に溢れ、戦闘のない世界。一度違う世界、違う生活を知れば、どうしても自分の置かれている状況と比べます。自由な世界に憧れて、そこに行けば、もっと違う未来が待っているかもしれないと考えて、誰が責めることができるでしょうか。確かに日本に来れば、何の制限もなく自由に歩きまわれ、拘束の心配もなく平和に安心して暮らせるでしょう。しかし、何の準備も目的もなければ、ただそれだけで終わってしまいます。決して万人に親切とは言えない日本で、家族と遠く離れ、毎日の生活に追われるだけでは、幸せでいられるでしょうか。ヤクーブがわたしの言葉をどう感じたかは分かりません。でも彼が、しっかりと受け止めてくれたのは確かです。「確かに今は、僕がこちらにいて、繋ぎ役になる方がいいのかもしれないね。日本で何ができるのかも分からないし」彼は、そう言って頷いてくれました。2005年に蒔いた種は確実に育っているようです。

もう片方の土地に蒔いた種も、イスラエル人の中で育っていました。2005年のプロジェクトに参加し、帰国してからイスラエル軍の兵役についてオメール。現在、軍の情報機関で働くオメールは、日本に来た時には、「イスラエル軍がパレスチナ人に銃を向けるのはいたしかたない。壁も必要悪だ。まずはパレスチナ人が自爆テロを止めなければ何も変わらない」と主張していました。去年の春にオメールのお母さんは、帰国してからオメールの考えが変わってきたと話していたのです。そして今回、新しい参加候補の高校生たちの集まりに、オメールは軍から休暇をもらって駆けつけてくれたのです。そして「生まれて初めてパレスチナ人の友人を持ったことは、非常に良かったと思う」と語ってくれました。

あまり時間がなく、本音の部分が聞けなかったのが残念でしたが、「パレスチナ」を「敵」として捉えている軍隊に属しながら、この集まりに顔を出してくれたオメールの心には、確実に何か根付いているのが感じられ、そこに改めて「希望」を見いだしたように感じました。ヤクープと組んでもらって、オメールにも討論の場でリーダー役を担ってもらいましたが、非常に公平な視点で論理的に議論をリードしており、斬り込み隊長のヤクープと良いペアとなっていました。オメールには、何とかイスラエル人OBリーダーとして夏のプロジェクトに参加してもらいたかったのですが（本人も来たいと言っていました）、残念ながら、その時期に2週間の休暇を取るのには難しく断念せざるを得ませんでした。5月末現在で、まだオメールの代わりは見つかっていませんが、良い人材が見つかることを期待しています。

さて、一方、2007年のプロジェクトに応募してきた新候補者たち。実は、イスラエル人もパレスチナ人もツワモノ揃いでした！ほとんどの人が過去にイタリアやアメリカのNGO主催の平和プロジェクトに参加したことのある人だったのです。それぞれ交流の大切さを十分に認識してはいるものの、プロジェクトが終わってしまうと、交流が途絶えてしまうことにフラストレーションを感じていました。わたしたちの面接の際の、「これは続けることが目的のプロジェクトです。私たち日本人は、あなた方を日本から遠隔操作することはできません。帰国後は、自主的に続けてくれることを望み、それを参加の条件にしたい」という望みに応えて、みんな、「今まで途絶えてしまっていたのが不満だった。続けてくれるプロジェクトに参加したい」と語ってくれ、本当に心強く感じました。

今年のプロジェクトは、もしかすると、もう種蒔きではなく、接木なの

かもしれません。去年、芽を出した小さな小さな苗木に、新しい力となる別の苗木を添えようとしているのかもしれません。私たちは、最初の種蒔き以上に注意深く、そして力強く、接木した若木が育つようにサポートしていかなければならないと思います。どんな葉っぱが芽吹き、どんなつぼみがつくのか、まだ誰にも分かりません。うまくいけば、一気に成長する可能性を持っていると思います。しかし枯れてしまうかもしれません。枯らすことだけはしたくない。イスラエル人やパレスチナ人の若者たちと同様、どんどんしっかりしてくる朝香さんや理紗さんの顔を見つめながら、再びテルアビブの空港に向かう車の中でわたしは考えていました。

こうしてわたしたちの実りある旅は終わりました。2005年から更に一歩前に進めるのではないかと感じています。これから夏までの間に、彼らにとって最高の実りあるプロジェクトにすべく、プログラム作りに入っています。わたしたちにとって今後の課題は、いかに持続できるプロジェクトにしていけるかです。わたしたちの力も問われると思います。蒔いた種からは既に芽が出ており、強い若木に育て上げるための接木の段階に入っています。十分な栄養と水をやり、力強く大地に根を生やして、大空に向かって伸びて行ってほしい。今はそんな思いで一杯です。



ユーセフ・ランティシとその家族（ラマラ・パレスチナ）

同行スタッフ



鈴木 信一

聖パウロ修道会 司祭

大きく前進した「'07 平和をつくる子ども交流プロジェクト」

前回のプロジェクトと比較すると、今回のプロジェクトは着実にレベルを上げたと思う。以下その成果と今後の課題を列挙する。

1 大きな成果① 豊かな交流の実り

わたしたちの交流プロジェクトが目指すものは、プロジェクト期間が終わってからの動きだ。この点に関して、今回のプロジェクトは前回以上の実りを結ぶ動きを見せているように思う。もちろんプロジェクトを終了して3カ月ほどしか経ておらず、まだその成果を正確に測ることはできないが、少なくとも前回のプロジェクト後の動きと比較してみると、今回のプロジェクト後のほうが、より活発な相互交流を生み出している。この実りを生み出した第一の原因は、プロジェクト後の動きをしっかりと念頭に置いて高校生の人選に当たったことだと思う。今後は、前回以上に「イスラエルとパレスチナ」、および「日本と彼ら」の交流の促進が期待される。日本の高校生がイスラエルに出向いて交流することについても、積極的に推進できる状況が整いつつあるように思う。

2 大きな成果② 運営面でのレベルアップ

運営面では、プロジェクトの準備段階から、実施にいたるまで、ほぼすべての点において前回よりも、より効率的、効果的な運営がなされたと感じている。活動プログラムの内容、食事、宿泊、

研修内容など、一段とレベルアップした観がある。この進歩が可能となったのは、まず第一に、前回の経験を生かして今回のプロジェクトが行われたことにある。今回の実行委員の多くは前回も実行委員であり、前回の貴重な経験が今回有効に生かされた。つぎに、新しいスタッフのエネルギッシュな協力が挙げられる。この新しいスタッフの熱意は、前回の経験を踏まえてレベルアップするために欠かせないエネルギーとなった。新しいスタッフとは、東京に構えられた実行委員会に加わるメンバーを指すだけでなく、那須高原や長崎の現地のスタッフたちであり、今回新設されたファシリテーターを指す。彼らの熱意とエネルギーなくして、今回のプロジェクトの成功はなかったと思う。

3 今後の課題

課題も残った。一つは集金予測の難しさだ。前回と比較して、今回は募金が出遅れ、ぎりぎりまで資金不足に陥る心配が付きまとった。また「スタッフ間の交流」も改善する必要がある。これは、プロジェクトの準備段階においてと、プロジェクトの実施中においての両方において言える。スタッフ間の意思の疎通、ファシリテーター間の意思の疎通が課題として残った。なおプロジェクトが終了した今は、「日本とイスラエルのスタッフ間の交流」が課題だ。言葉の壁も課題として残ったが、この壁も、やがては必ず乗り越えられる日が来ると思う。

4 まとめ 全体として大成功だった

課題は残ったが、全体としてみると大いに満足してよい成果が得られたと感じている。前回の貴重な経験と、新しいエネルギーがこの実りをもた

らしたにちがいない。

このプロジェクトを理解し、支えてくださった多くの方々に、喜びと感謝の思いを持って以上のこと

山内 堅治

聖パウロ修道会 司祭

取材日記

2年前もそうだったが、今回、イスラエル・パレスチナ・日本の高校生、そしてスタッフの方々と同行しながら、「家庭の友」10月号に掲載するため取材を行った。8月1日(水)から14日(火)までであったが、不運にも前日の7月31日(火)、ローマの総長から電話があり、次期管区長に任命された。管区長としての仕事は10月20日から始まるけれど、任命されたばかりだったので、正直言って今回の取材はとてもハードだった。

8月1日(水) イスラエルとパレスチナの高校生たちがフタッフに引率されて成田に到着。気温は31度でかなり暑かった。到着して互いに挨拶を交わしているが、今回も友だちになるのは早いなあと思ったのが最初の印象。そんな中、ローマからケータイに電話が入り、どちらの作業を優先すべきか戸惑うほどである。ともかく今は取材を優先。バスに乗り、一路那須高原へ。夜の11時10分に到着。

8月2日(木) 早起きして庭を散策した。イスラエルとパレスチナの高校生たちが談笑しているのがとても印象的。彼らの表情から平和が窺える。写真撮影にも快く応じてくれた。オリエンテーション、ゲームなどが続く。絵になる場面、表情を撮りたいが、それがけっこう難しい。

8月3日(金) 食事の席はくじ引きなのだが、イスラエルとパレスチナの高校生たちは早々にやってきて操作している様子。それはそれで暗黙の了解。

をご報告申し上げられるのは、たいへん有り難いことだと感じている。

取材に支障ないので…。写真撮影はまずいかなあ？

午後からはショッピングタイム。リフレッシュの時でもあったので、ほっとした雰囲気が写真にも現れている。電化製品、食料品、衣類など、

日本ならではの物が興味深いようだ。夕食後、理紗さんと雄一君が広島と長崎の原爆の怖さ、その結果などについて話す。説得力、迫力があり、みんな真剣な表情。

8月4日(土) 茶臼岳に登る。登山が好きなわたしにとってもリフレッシュのひとつだった。割となだらかな山なのでとても気持ちよく登れた。頂上のさわやかな風は心地よかった。帰りには乙女の滝へ。水しぶきにはしゃぐ姿は目に焼きついている。夜は国籍が違う人とのコミュニケーションゲーム。こうしたゲームにより、互いに親睦が深まっていくのを実感した。

8月5日(日) 鈴木神父さんの司式によるミサ。一日の始まりがミサでスタートすると落ち着いた気持ちになる。主の恵みに支えられたものを実感する。プログラムはゲーム主体になっているが、チームワークの学びを感じる。午後からはマ・メゾンの施設を訪問。踊りなどの出し物を通して親近感が湧いた。夕方、東京に戻らなければならず、新白河駅まで猪俣神父さんに送ってもらった。感謝。

8月6日(月)から8日(水)の午前中まで、モンテッソーリ全国大会での出店のため、駒沢女子短期



大学へ行く。8日の午後から羽田へ向けて出発。イブラヒム神父さんを成田から羽田へ案内してくれた小西さん、山崎さんご夫妻と合流。その後、イブラヒム神父さんと長崎に向けて出発。飛行機は木更津、房総、富士山を通過し、空気が澄んでいたこともあって、シャッターチャンスが数多くあった。取材のついでに…。長崎空港に無事到着し、井上さん、アントニーさんと入口さんが迎えに来てくれた。

8月9日(木) 朝からとても澄んだ青空。平和公園での原爆犠牲者慰霊祈念式典。事前に取材許可を取っていたので、前回同様、祈念像近くでの撮影が可能だった。ただ前回は(小泉)首相が到着してからも撮影は可能だったが、今回は(安部)首相到着の2、3分前には、取材陣は追い出された。厳しくなったなあ……。暑い中での取材なので、まさに体力勝負。取材している人を見ると、20代、30代が多い。50代はあまり見かけないなあ。そうか……。年を感じた。午後からは互いの分かち合い。いろいろな痛みを聞くことができ、直後、インタビューをした。いい記事にもなった。

8月10日(金) 気温は34度まで上昇。午前中、「語らいの夕べ」に向けての準備。なんとなく不安な雰囲気もあったが、本番ではうまくいった。ただ3時からの集いには集まりが悪い感じ。某神父

の「ひどかねー。主催者はなんぼしょっとか」というのがやたら耳に響き、「そこまで言わなくていいのに」と思った。確かに前回に比べ参加者は少ないが、内容としては濃厚に感じた。

8月11日(土) 長崎から東京へ。空港でのチェックインにはちょっと手間取った。東京に着いてからは修道院での作業に専念。

8月12日(日) 眠そうな顔が印象的。そんな中でのセッションだが、交流はぐっと深まった感じ。午後からは4グループに分かれての見学。わたしは明治神宮コースに参加した。日本の文化、習慣を知る機会になっただろう。

8月13日(月) 午前中はサンパウロでの仕事に専念。午後からイグナチオ教会へ直行。3時から「語らいの夕べ」が始まる。東京の場合、質問が多かったように思う。

8月14日(火) 成田空港から出発。空港までは行けなかったが、彼らの旅の安全を祈った。ジハドから電話があり、再会を約束した。

今回、記事作成のためメモ、インタビューなどを合わせると約51ページ近くとなった。それを全部報告できないのが残念。

最後に、忙しい日程の中、取材に応じてくださった皆様に心から感謝したい。



葉山 文子

小学校教諭

プロジェクトを振り返って

那須高原・長崎・そして東京。大移動14日間を共に過ごしサイドから生活面で応援してきた。

若者たちの成長は測り知れない。14日間を土台にして、どん

なふう未来に向けて成長していくのだろうか。信頼と期待で胸が弾む。現実の世界に戻った子どもたちが、近い将来、平和という「夢」を実現できることを祈りたい。また、日本で応援する若者たちも、それぞれの場で大いに学び、行動してくれることだろう。

振り返れば温かなサポートによって何とか無事

に14日間を過ごし、成田を発ち、無事にご両親の元に戻ったことを知らされて、ほっとしたのが本心である。

那須高原：山でシスター方、神父様方、皆様の温かさに支えられた6日間だった。3つの国の混合による皿洗いと食事準備班、食事の際のくじによる座席決めはその後の生活のコミュニケーションに機能したと思われる。

シスター方が、戸惑いながら工夫を重ねてくださった素晴らしい食事を提供してくださったことに感謝したい。子どもたちの食べ方、部屋の使い方に対して寛大に受け止めてくださったことに救われる思いだった。また、使用した個室の最終確認をする間もなく退出した朝、シスター方は「心配しないで」のひとことで気持ちよく送り出してくださった。

時を重ねるに従って、日本のリーダーや高校生が時間厳守を呼びかけたり鐘を鳴らしたりして、遅れがちなミーティングの時間を確保しようと気を配り、各部屋の片付けを進んで行くようになった。イスラエル・パレスチナ高校生の中にも進んで手伝う人がいた。

慣れない気候に加え、夜更かしによる体調不良を訴えるもの数名。水分補給には大いに気がつかなかった。夜更かしは彼らにとって自由を味わう貴重な時間だったのかもしれない。祈り中心の生活を送るシスター方には、ご迷惑をおかけしたに違いなく申し訳なく思う。

長崎・東京とプログラムが進むに従い、茶臼岳登山が話題になる事は少なかったが、登山はこの上もなく楽しく、大自然を楽しめたようである。「ほんとに楽しかった」の声を何度も耳にした。透き通るような瞳で山並みの美しさを吸い込まれるように見つめていた。神父様方による周到的な準備とリードに感謝申し上げたい。

長崎：中村神父様とその仲間・CANの高校生による細部にわたる完璧な準備と心配りによって、生活面での心配は、暑さ対策、水分補給のみであった。特に式典での水分補給には気を配ったが、そ

れもまた中村神父様以下、皆さんのおかげで全員、無事に、極暑の中で感動的な時を過ごすことができた。個々に健康面でも自覚、自己管理にも慣れてきた様子。ホームステイ先のご家庭には洗濯をお願いし、快く対応していただいた。散歩・見学・食事・買い物・花火・そして会話、さらには国際電話など、有意義な時間を過ごし、みんな、満足していた様子。パレスチナ・イスラエルの子どもたちにとって、心を開いて語り合える大切な時間だった由。体力回復もさせていただいた。

時間厳守、必要に応じての沈黙など、互いの痛みを伝え合い、聞き合う中で態度面での進歩が感じられるようになってきた。

長崎、原爆資料館の見学、語り部の廣瀬さんのお話に、高校生の変化は大きかったように思われた。今は、アメリカに個人的友人ができたと話す廣瀬さんに「アメリカの旗を見てどう思われますか」とイスラエルの女子高校生が質問すると「正直に言えば辛いです。でも、伝える使命を感じています」の返事が戻ってきた。

東京：8/11(土) 羽田到着は予定通り。荷物詰め込みの後、3方面に分かれて行動。

ディズニーランドコース

短くも時間厳守で、国を感じさせない交わりのひととき。

はとバスコース

銀座で食事など、静かな大人の時間。

江戸東京博物館

昼食は和食・神父様のおごりと大喜び、浅草も楽しんだ。

8/12(日) 午後 新宿方面・新宿ショッピング・明治神宮・都庁などに分かれて外出。それぞれが東京を味わった。全員健康であったのが幸い。

ミーティング中の水分調達には、国を問わずメンバーの高校生の手を借りることもあったが、使用した部屋の片付けには全員が動いてくれただろうか。この辺りまで協力できたらよかったかなと後から思った。日本的な感覚なのだろうか。



岩田 可愛

小学校教諭

「聖地のこどもを支える会」会員の葉山さんに誘われて、2006年3月、わたしはイスラエル・パレスチナの地を旅してきた。その旅は、2005年のプロジェクトに関わったさまざまな人の、「プロジェク

ト・その後」を知る旅でもあった。

2005年のプロジェクトに関わらなかったわたしは、テルアビブの空港で抱き合っただけで再会を喜ぶイ・パのメンバーの中であって、正直言ってなんとも複雑な、居心地の悪い思いがあった。翌日から始まったミーティングでも、「プロジェクト後、自分がどのように変わっていったか」を熱く語る参加者たちを見ながら、「プロジェクト前はいったいどんな子だったのかな……」などぼんやり考えるくらいで、やはり経験や思い出を共有できないもどかしさを感じていた。

そんな、ある意味「不完全燃焼の旅」を終えた後、今回のプロジェクトの話が持ち上がったと記憶している。仕事も忙しく、どう関わるか非常に悩んだが、結局スタッフとして参加することになった。プロジェクトの最初から関わることで、旅で感じた中途半端な自分を払拭したいと思ったからだ。

実際の準備には、1年あまりを費やした。この1年はわたしにとってあつという間とは言い難い。1日数時間にも及ぶミーティング、チャリティコンサートの企画や運営。これといった人脈のないわたしは、自分でコンサートを行い、そのチケット売り上げを寄付した。世代も生活環境も違うスタッフたちが、心血を注ぎ、あらゆることをしてこのプロジェクトを準備してきた。参加する高校生たちを目の前にするまでは、実体のないもののために働いているような気がしてならなかったが、3月の事前

研修で日本人高校生4人と初めて対面し、いよいよ準備からプロジェクトの実行へ、と動き出した。

事前研修のスケジュールは、朝から夜まで、内容の濃いものがぎっしりと詰まっており、特に高校生にはハードだったと思う。しかし4人とも最終日まで必死についてきてくれた。リーダーの石黒さんをはじめ、駆けつけてくれた前回の参加者の支えがあったからこそ、と思う。事前研修が非常に充実したものになったのは、リーダーをはじめスタッフが一丸となって支えあったからだ。

このままの流れで、一丸となって本番のプロジェクトに突入したかったが、なかなかそう簡単にはいかず、スタッフ全員が旅に参加するのは無理であること、イ・パの参加者の一部が間際まで決定しないなど、不安材料を抱えたまま準備が進んでいった。

プロジェクト中、わたしは旅に参加する側のスタッフとして、主に食事のこと、生活面でのフォローや健康面のチェック、買い出し等を担当した。それらの反省点や振り返りは別に記したが、2週間を通して感じたのは、いろいろな面での関係の難しさである。毎日のスケジュールに追われ、細やかな関係ができなくなっていた。イ・パのメンバーとはもちろんのこと、忙しくなると日本人同士でも打ち合わせができない。特に那須高原でのプログラム、ディスカッションの内容と進行に少し疑問を感じ、軌道修正するためにもスタッフミーティングを行うべきだったが、十分な意見交換ができなかった。「今、誰が、何を考えているのか」を把握することは、このような短期のプロジェクトでは大事なことだ。自分自身の反省として、心に刻みたい。

しかし、多くの反省点はあったとしても、このプロジェクトをやり終えた満足感はある。特に日本の高校生たちの成長は、わたしたちの予想を超え

たもので、とても頼もしかった。イ・パのメンバーにしても、初めは時間の観念や文化の違いに戸惑いながらも、少しずつ心を開いてわたしたちを受け入れてくれた。きっと彼らにとっても、この経験は忘れ難いものになるであろう。日本で得た感動

や友情を、どうか今後も持続して、さらに膨らませていってほしいものだ。

帰国の時は、抱き合って再会を約束した。できることなら、今度はテルアビブの空港で心からの喜びをもって再会を果たしたいと思う。

猪俣 一省

さいたま教区司祭 NPO 法人 聖地のこどもを支える会 監事

那須サポート

マイクロ・ナフム

聖地巡礼に出かける時に楽しみにしていることがひとつある。それは大男の名ドライバー、ユダヤ人のナフム氏に会えることである。井上弘子さんは聖地に行くと必ず彼を指名する。それはイスラエルのドライバーコンテスト第1位の腕前もさることながら、巡礼に来た日本人への心配りの素晴らしさに、パートナーとしてのすべてのことを任せられるからだろうと一人合点している。それで、那須高原キャンプの話がもちあがった時から、ミニ・ナフム、いやマイクロ・ナフムになってサポートできればと心に決めていた。今回成功裏に終わった第2回のプロジェクトの大海の一滴として、御笑覧いただきたい。

こころづもり

「'07 平和をつくる子ども交流プロジェクト」キャンプは、日本での最初の出会いの大切な数日間を、栃木県那須のベタニア修道女会の祈りの家「聖ヨゼフ山の家」で過ごすことになった。長崎へ向けてふさわしい準備をする場所、いわば、ひな鳥たちの巣となるのがこの山の家である。

すでに今年に入ってそれぞれのスタッフによって入念な準備が、急ぎ足だったけれど着々と進められていた。我がさいたま教区内で行われるこの大

切な期間を、いちばん外側でサポートしようと決めた。具体的には、買物などの車の手配と移動のためのマイクロバスの用意および登山計画がスムーズに進行するためのあらゆるフォローである。

下見

那須高原はけっこう知っているつもりだったが、入念に下見を行った。7月16日、あの柏崎の地震が起こった日だった。第一報はカーラジオで知った。梅雨明け前の那須は涼しかった。トイレや休憩所、ルートなどを何通りも実測しながら登山口まで登ると、そこは濃霧に包まれて、気温は15℃しかなかった。ロープウェイを使ってでも登山道の下見をしておきたかったが、できなかった。あの暖かい乾いた国の子どもたちが登って雨でも降ったらと心配になったが、リーダーは経験豊かな濱田神父さんなので、何とかするだろうと任せることにした。ずいぶん走り回ったが、夏の渋滞対策用の地図が役立って、まずまずの下見ができた。

山の家の一姉妹たち

「聖ヨゼフ山の家」は、今回のキャンプには絶好の場所だったようだ。部屋数、食堂の広さ、ミーティ





聖ヨゼフ山の家。

ングルールの配置や数など、貸し切り状態でピッタリの広さだったので、プログラムを進めてゆくには良い条件がそろっていた。ベタニアのシスター方は精いっぱいサービスで迎えてくださった。ふだんなら黙想者のための食事の提供などは手慣れているわけだが、今回のように食材の制限、ベジタリアン、食欲旺盛な若者相手となると大分勝手が違うのか、下見で立ち寄った時もずいぶん相談を受けた。プロジェクトのほうから適切な指示を受けているのに、まだまだ心配のようだった。さらに彼女たちの心配は那須名物の夏の雷だった。落雷で停電すると山の家の機能がアウトになってしまう。毎年そのようなことが起こるとのこと。自家発電までは手が回らず、これは祈るしかない。地球温暖化の影響で振幅の大きい気候の変化が進む中、これも気掛かりなことのひとつだった。それにしても毎回の食事はとても心のこもったもてなしだったと思う。特に登山の日の弁当はたいしたものだったと覚えている。

8月2～5日のサポート

- * 8月2日 山口神父さん登場
白河の街への買い出しと濱田神父さんの出迎

え。互いに面識がないので、空港での出迎えよろしくボードを用意しなければと心配していたが、神父というのはすぐに見分けがつく人種らしい。ひと目でわかったそう。

- * 8月3日～5日 土屋神父さん、猪俣担当

マイクロバスを白河から運ぶ。天候によっては今日が登山の日になっていたが、計画通りにプログラムが進行している。昼食後、前日からずっと部屋の中で缶詰状態で過ごしているので、白河のジャスコにショッピングに出かけることになった。異国でのショッピングは楽しいものだ。血の

通ったプログラム運営ができているなと思う。それにしてもあの広い店内をどう回ったのか、1時間きっかりにみんな帰ってきた。感心する。中にはジャパニーズ・ユカタを買った子もいたそう。濱田神父さんは長崎の海に備えて海水パンツを購入したとか。さっそくバスが役に立ってよかった。

この日は天気良すぎて明日の登山が心配なほど暑い。台風の進路が気になるが、もう少し雲が出ないと山登りにはキツすぎる。スタッフに水を向けるが、彼等はプログラムの展開と、日本の高校生たちの英語力のことで頭がいっぱいなようで、相手にしてもらえない。用意して来た雨具と帽子と軍手をみんなに配って、明日を天にまかせ。

- * 8月4日 茶臼岳に登る

各国が準備したプレゼンやウエルカムディナーには参加できずに、初めの雰囲気は人の話でしか窺い知ることができなかったが、やはり井上さんが心配していたように、プレゼンはギクシャクして始まったらしい。イスラエル・パレスチナの平和をつくる営みの一助として、日本人の子どもたちと共に汗する今日の登山が役に立つようにと願う。朝早く目覚めたので、バスでコースをひと回りして様子を見てくる。中腹から霧になる。ライトを点けて登るがロープウェイ駅をすぎると雲海の上に出る。

上天気である。予報では曇ってくるらしい。雨の心配はないようで一安心する。コースもマイクロバスの調子も問題ない。朝食に向かう。

9時出発。バス・ワゴン車とも満席になる。井上さんはガイド席に着いてマイクで、あれが竹林だとか日本の民家だのお墓だとか案内。こちらも久々に「マイクロ・ナフム」の気分を味わう。急な坂をローギアで登って登山口には10時頃に着いた。薄曇りで軽い西風が吹いている。登山にはよい条件である。駐車場も登山道もまだすいている中、濱田神父さんをリーダーに登ってゆく。うまくゆきそうだ。大人たちはロープウェイに4分ほど乗って山頂駅へ、そして思い思いに砂礫の道を散策する。ほっとする時間だ。井上さんとは久しぶりにゆっくり話すことができた。巡礼の時とはちがって互いに肩の荷をおろした気分をつかの間味わい、みんなで昼食。その頃登山隊は悪戦苦闘していたようだ。登るペースがちがいきすぎたり、写真を撮るのに熱中するものがいたりしてまとまらず、結局2つのグループで行動するとの連絡が入ったのは、予定より1時間も遅れてからだった。でもみんな元気とのことで安心する。その後も山の陰に入るとケータイがとばずに気をもむことも多かったが、軽いネンザの1人を除いては無事に下山して来た。登りはじめる頃にくらべて、ずい分リラックスした感じがして、15人の子どもたちとスタッフの一体感が強くなったように思えた。結果的にこの登山のプログラムは、天候に後押しされて良いタイミングで行われた絶妙な仕掛けだったようだ。その後立ち寄った乙女の滝でも同じような流れは続いていて、小さな滝にもかかわらず長時間交流を楽しんで、小雨が降りをはじめと幕になった程だった。緑豊かな那須高原の自然が若者たちの生活を引き裂くいろんな壁を壊すのに役立ってくれればと願っていたが、その通りになって来た思いで嬉しかった。全員沈没状態で「聖ヨゼフ山の家」に帰る。土屋神父さんは明日のミサのために自分の教会へと帰る。



楽しい交流のひとつ。[マ・メゾン光星]の入所者と「よさこい」を踊る高校生たち。

最終レポート

* 8月5日 「マ・メゾン光星」へ

今日は日曜日、午後から「マ・メゾン光星」の人々との交流会に呼ばれる。知的障害の方々との交流はどのように行われるのか気になっていたが、圧倒的な踊りと太鼓のパワーにのみこまれて何の違和感もなく2時間を超える一体感を味わう集いとなった。日本の子どもたちのスタンプもよかった。決してハシャがないで極東の情豊かに演じてくれて妙だった。多国籍の教会で司牧していると、同じ街に住む人々から妙に遊離して浮きあがっていることに気付かない日本の教会人に会おうが、風土に根ざしている自分の精神性を含めた生き方を振り返ることの必要性も感じさせてもらった。

山の家にもどると、夕食のバーベキューの野外会場を1人で準備している人がいた。雨が降らずに林の中でのパーティーがうまく営めることを願う。明日は巣立ちの日、今夜は羽もはえそろって来た若者たちが長崎本番に向けて、最後のみがきをかけるのだろう。

レンタバスを返す

白河でレンタバスを返す頃、大夕立ちとなった。

ああこれでは野外のバーベキューの献立では台無しになった。ライティングの準備もテーブルセッティングの苦労も実らなくて、彼は残念だったろうなあと思いながら、帰路の渋滞の列をのろのろと走っていた。でもあの子どもたちとスタッフなら、こんなハプニングなんか柳に風と受け流して、楽しい思い出に変えてゆくだろうと、のんびりかまえて稲妻と大雨の共演をたのしんだ。「巡礼の前の雨は

ゴールド」というフランスのことわざもある。新たなステージへの祝福のしるしのように思えた。それほどこの4日間で子どもたちは変化し充実していった。スタッフたちはこのことをもっとも味わったにちがいない。

バスを転がしてよかったと久しぶりに安堵感を味わえた。イスラエルの大ナフムも、きっとこんな感じなのかしらん。

地域スタッフ



長崎CANの
高校生スタッフ。

今村 江里加

長崎 CAN 高校生

わたしはこのプロジェクトのメンバーの中で、一番外国に興味のない人間だったと思います。海外で起こった事はTVやニュースで情報を得る……それだけでわたしは銃撃事件、自爆攻撃などを知った気でいました。このプロジェクトに参加するにあたって戦争や難民について書かれた本、また日本人が書いた簡単な哲学の本を読んで少しで

も考えに深さを持つようでしたが、しょせんは付け焼き刃。元々外国の情勢を真剣に知ろうとしなかったわたしには、みんなのディスカッションが別世界のように思え、参加していたみんなをととても遠い人たちに感じていました。改めて自分を情けなく思いました。紛争体験、家族、そして平和についてみんなが話し合っている中、わたしはそれら

を日本に置き換えて考えてみました。

日本は無差別殺人、自殺にまで追い込むいじめ、凶弾による殺人、そして最も恐ろしいことに家族内での殺人があります。日本は外国と戦争をしません。しかし、今の日本はいわゆる内部戦争状態です。命を大切にしない人が多いように思います。一方、このディスカッションでは命があつてよかった、家族が無事でよかった、という話がされていました。テロや戦争に巻き込まれたことはありませんが、もし大切な家族が殺傷されたら、悲しみや怒りが溢れてくるでしょう。ゆるせないという気持ちが生まれるでしょう。それが報復につながってしまうかもしれません。そう思うと自分の中で矛盾が溢れて考えが先へと進まなくなってしまうました。

戦争とはいったい何を恨めばいいのだろうか、とわたしはそればかりを考えていました。しかし、

小野 亜耶

長崎 CAN 高校生

わたしがこのプロジェクトに参加したのは、部活の先輩が前回参加していて、すごくよかったと聞いたこと、イスラエルとパレスチナの高校生と交流するなんて、一生に一度あるかないかのすごい機会だと思ったこと、平和について考える機会を作る手伝いをしたいと思ったからでした。

初めて長崎のメンバーと会ったとき、学年の差や学校の違いなどから最後までみんなでやっていけるか、すごく心配でした。それから月1回のペースで集まり、なかなか決まらないホームステイのことやそれぞれの役割の進み具合などを話し合ったりしました。夏休みになると今までの倍以上に忙しくなり、8月に入ると毎日集まり、朝から晩まで「語らいの夕べ」のビラ配り、歓迎の旗作り、お土産の買い出し、歓迎会の準備、会場設営や資料等

戦争の被害者たちはゆるしたいと思っていました。それは、憎しみを持っていて世の中は変わらないと分かったからだと思います。ゆるすことは憎むことよりも難しいものです。長崎は原爆の被害にあいましたが、原爆の痛みを受け入れたのだと思います。しかしそれも一種のゆるしなのかもしれません。わたしはこのプロジェクトに参加して平和の難しさを実感しました。ゆるしについてたくさん悩みました。その結果、某テレビ番組のキャッチフレーズである「愛は地球を救う」という言葉が頭に浮かび、まさにそのとおりだと思いました。人を愛することがゆるしへの一歩に繋がり平和への道しるべとなるだろう、という考えが、わたしがこのプロジェクトで得た大きな財産です。

このプロジェクトに参加できて本当によかったと思います。ありがとうございました。

の最終確認など、たくさんの事を前日までしました。みんな疲れが溜まっていますが、いつも笑顔で、6日を焦りながらも楽しみに待っていました。

いよいよやってきた6日、朝から歓迎会の準備をしていると、プロジェクターがスクリーンに映らないというハプニングなどがありながらも、空港で本体のメンバーに会うと、安心してみんなで泣いてしまいました。歓迎会では、日本らしさを出すために慣れない浴衣を自分たちで着て、司会進行をつとめました。イスラエル・パレスチナ・日本のメンバーに歓迎の旗に名前を書いてくれるよう頼んだ時、みんな快く書いてくれました。そして別れ際に日本語で「ありがとう」と言われた時には、今までの苦勞が報われた気がして本当に嬉しかったです。

イスラエル・パレスチナの高校生たちとも打ち解けて来た7日と9日、わたしもディスカッションを開けました。お祭りにも行けない、公共の交通機関は日本で初めて乗ったけど降りる時に怖い、友だちが銃を突き付けられているのに出くわしたことがある…。現地の人からそのまま伝えられる言葉には重みがあり、生まれてから今まで何気なくしてきた一つひとつがとてもすごいことなんだということが分かりました。そしてイスラエル・パレスチナの壁を越えて、いつも笑顔で楽しそうにしている彼らの気持ちを考えると、いたたまれない気持ちになり、胸が締め付けられる気がして、涙が止まりませんでした。

8月10日の「語らいの夕べ」は、とても嬉しいものでした。紛争は暴力で解決できないこと。過去に生きるのではなく、未来に生きること。ゆ

るしあい、歩み寄ることが平和への道ということ……本当にそうだと思います。相手を受け入れてみれば、相手の見え方は必ず変わり、友だちになります。友だちと命懸けで戦おうという人はいません。イスラエル・パレスチナに住むすべての人がそうになってくれたらと強く、強く願います。また、このプロジェクトが平和になるまでずっと続き、メンバーがそれぞれ、平和に向かって歩んでいけたらと思います。

わたしは平和について具体的に考えることを忘れかけていました。だから、このプロジェクトは、本当にプラスになるものばかりでした。これから、この夏に学んだことを広めるだけでなく、平和の実現を目指して何か活動していきたいと心から思います。



友情の笑顔。
長崎初日・歓迎会にて。

北里 綾香

長崎 CAN 高校生

このプロジェクトに参加して本当に今年の夏は実りの多い夏休みとなりました。3月に不安や楽しみを抱えながら、このプロジェクトへの参加を決めたことがまだ最近のように感じられます。以前はイスラエル・パレスチナと聞くと、世界史で習った、

ニュースで聞いたことがあるとただだけで、彼らについての知識が全くありませんでした。グループセッションや「語らいの夕べ」などで実際彼らの痛みを聞き、衝撃をうけ、自分がどんなに無知で、平和に対して疎かったのか改めて感じました。

メンバー、スタッフの6日間の長崎滞在中、わたしは何度も彼らは本当にイスラエルとパレスチナから来たのかと思うときがありました。しかし、いざ彼らの痛みを聞くと、いつもは笑って話しかけてくれている子たちから次々と話される毎日の不安や、死の恐怖などを聞いたことに衝撃をうけました。

わたしは長崎に住む者としてとても恥ずかしいことなのですが、今まで原爆資料館にただ怖いという印象しか持っていませんでした。毎回訪れては、涙を流し、目をつむっていました。しかし、このプロジェクトの準備中資料館へ行く機会が幾度もあり、その中で、資料館内をまわっているまだ幼い女の子とその父親を目にしました。その女の子が目をそらすと、「しっかり見なさい」と父親から言われており、その姿を目にして、わたしも逃げているはいけない、しっかりと戦争の痛みを知り、平和の大切さを長崎に育ったものとして発信して

いかなくなくてはならないと確信しました。そして日本がアジアの国々で行った大量虐殺や従軍慰安婦問題など、さまざまな残虐なことも忘れてはなりません。平和はこうすればやってくるのだという手引きがあれば今頃世界中の人々は平和に暮らしているでしょう。しかし、そうはいかないからこそ62年間戦争をしていない日本から平和を発信することができるのではないのでしょうか。

今回このプロジェクトに参加して平和の橋を架けることに少しでもお手伝いできたことを本当に感謝します。このような機会を与えてくださり、ありがとうございました。この出会い、そして対話を心にとめて、多くの人に今回学んだことを伝え、これからも平和を祈ります。無力なわたしですが、平和のためにできることから活動していきたいと強く思います。



平和祈念像（長崎・平和公園）

10 プロジェクト参加者名簿

参加高校生／リーダー／同行スタッフ

イスラエル・パレスチナ平和使節団

団長

Fr. Ibrahim Faltas (Jerusalem)
〈イブラヒム・ファルタス神父〉

イスラエル人高校生

Alexandra Boskovich (Tel Aviv)
〈アレクサンドラ・ボスコヴィッチ〉女

Avishag Yosephyan (Tel Aviv)
〈アヴィシャグ・ヨセフィアン〉女

Gal Rosenbluth (Tel Aviv)
〈ガル・ローゼンブルート〉女

Noam Shani (Gan-Yoshia)
〈ノアム・シャニ〉女

Peleg Bar-On (Tel Aviv)
〈ペレグ・バルオン〉男

パレスチナ人高校生

Jehad Farraj (Bethlehem)
〈ジハド・ファラージュ〉男

Nadine Handal (East Jerusalem)
〈ナディーヌ・ハンダル〉女

Nardine Jildeh (East Jerusalem)
〈ナルディーヌ・ジルデ〉女

Renato Bandak (East Jerusalem)
〈レナート・バンダック〉男

Yousef Rantisi (Ramallah)
〈ユーセフ・ランティシ〉男

イスラエル人リーダー

Tali Barel (Ramat-Efal)
〈タリ・バレル〉女

パレスチナ人リーダー

Ya' coub Ghazzawi (East Jerusalem)
〈ヤクーブ・ガザウイ〉男

イスラエル人引率者

Yaniv Shenhav (Tel Aviv)
〈ヤニーヴ・シェンハヴ〉男

パレスチナ人引率者

Antony Habash (Bethlehem)
〈アントニー・ハバシュ〉男

日本人高校生

川原 史織 (長崎市) 女

竹山 修平 (広島市) 男

中村 茉梨菜 (長崎市) 女

安井 一馬 (横浜市) 男

日本人リーダー

石黒 朝香 (豊橋市)

滝川 理紗 (長崎市)

横山 雄一 (広島市)

日本人同行スタッフ

井上 弘子 鈴木 信一 中村 満 (長崎)

濱田 壮久 猪俣 一省 (那須)

岩田 可愛 小西 羊一 葉山 文子

松本 みどり 磯部 雅子 (那須)

山内 堅治 (サンパウロ同行取材)

栗原 ちぐさ (通訳) 千葉 絵里 (通訳)

実行委員会／地域協力者

東京実行委員会

井上 弘子 鈴木 信一 猪俣 一省
中村 満 濱田 壮久
岩田 可愛 大屋 菁示 大屋 和江
小西 羊一 小西 一枝 後藤 秀次
中山 宏 中山 夕里亜 磯部 雅子
葉山 文子 松本 みどり 山崎 榮太郎
山崎 久美子 新 直己
石黒 朝香 滝川 理紗 横山 雄一

東京日程協力者

肥塚 倅司(事前研修)

JICA東京国際センター

駐日イスラエル大使館

駐日パレスチナ常駐総代表部

六本木フランシスカン・チャペルセンター

フランストラベルセンター

佐藤 克裕(グラフィックデザイン)

那須日程協力者

土屋 和彦 山口 明裕

聖ヨゼフ山の家(ベタニア修道女会)

慈生会マ・メゾン光星

長崎実行委員会

事務局

中村 満 入口 仁志 辻 喜美子

高校生スタッフ(CAN)

純心…中村 茉莉菜(プロジェクト参加)

活水…川原 史織(プロジェクト参加)

純心…江藤 礼 今村 江里加

矢竹 絵里 佐藤 真朋

活水…小野 亜耶 北里 綾香

ホームステイ先

今村 豪 江藤 直男 小野 芳彦

川原 史生 北里 由香 小林 津代

佐藤 香奈江 中尾 靖 轅川 三枝子

馬場 是明 安永 初義

長崎日程協力者

高見 三明 長崎大司教

山本 富夫(写真撮影)

森山 浩(写真展示)

廣瀬 方人(英語の語り部)

川尻 政秋

熊川 忠一(送迎担当)

純心女子高等学校 活水高等学校

長崎市(秘書課 原爆被爆対策部)

平和学習支援室 原爆資料館)

長崎カトリックセンター

11 支援団体と支援者名簿

協賛団体

独立行政法人 国際協力機構 (JICA地球ひろば)

助成団体

カリタスジャパン

独立行政法人 国際交流基金

独立行政法人 日本万国博覧会記念機構

後援団体

駐日イスラエル大使館

駐日パレスチナ常駐総代表部

カトリック新聞社

カトリック長崎大司教区

カトリック東京大司教区

カトリックさいたま司教区

サンパウロ

ドン・ボスコ社

女子パウロ会 あけぼの編集部

純心女子高等学校

活水高等学校

真生会館

支援団体 (27団体)

カトリック大阪大司教区シナピス

日本海洋掘削株式会社

木村洋行株式会社

北九州地区カトリック信徒使徒職協議会
道の会

カトリック麻布教会

カトリック高輪教会

カトリック豊四季教会

カトリック花巻教会

カトリック東山教会

カトリック吉塚教会

栄光学園 愛の運動委員会

久留米天使園修道院

聖ヨセフ修道院

東京カルメル会 女子修道院

福音の光修道会

ベタニア修道女会

フランシスコ会 田園調布修道院

カトリック大浦教会 教会学校の子供達

厳律シトー会 天使の聖母トラピスチヌ修道院

シヨファイユの幼きイエズス修道会

聖フランシスコ病院修道女会 長崎修道院

聖フランシスコ病院修道女会 姫路修道院

ベトレヘム外国宣教会

宮崎カリタス修道女会 井萩第二修道院

慈生会マ・メゾン光星

横浜雙葉学園 土曜会

(順不同)

一般支援者 (396名 匿名10名)

相澤 朱実	伊藤 裕幸・みどり	大田 輝男	河野 豊	今 満里子
相葉 昌子	伊東 夫佐	太田 晴子	川原 史生	近藤 廣子
青山 博子	井上 くわ	大田 洋子	川平 俊子	崔 海珍
青山 美恵子	井上 春代	大谷東洋・恵美子	檜原 輝久義	斉藤 英夫
浅沼 誠子	井上 英彦・つや子	大友 幸子	川村 栄子	斉藤 真理・由紀
東 宣子	井上 弘子	大西 茂雄・美恵	川村 昕司	栄林 ヒサ子
東 幸江	猪俣 一省	大畑 家寿子	川村 直道	坂本 雄郎
安達 マサエ	今井 泉	大森 いくえ	川本 和子	坂本 恵子
新 圭子	今村 信之・知子	大屋 菁示・和江	菊池 崇文・弘子	桜井 房子
新 直己	入井 智子	大八木 汎子	北原 豊子	佐々木 清
天野直秀・裕子	岩下 直子	大山 聖一	木戸 知子	郷家 政男・かな江
安部 安子	岩田 可愛	岡 捷子	喜山 聖子	佐藤 アツ子
雨宮 信子	岩田 幸枝	緒形 葉子	金 マリア	佐藤 治
安藤 幸子	岩田 卓三	岡田 友治	木村 道子	佐藤 俊彦・朝子
飯澤 和枝	岩本憲嗣・八智子	緒方 貴子	工藤 里代	佐藤 政信・トシ
五十嵐 京子	上原 正臣	小川 千都子	窪 宏太郎・久子	佐藤 美津子
五十嵐 洋枝	植松 敦子	小川 真佐枝	栗原 健	佐藤 光子
池田 美江子	氏家 阪枝	小川 美知子	栗原 慶子	佐野 澄子
池永 廣美	宇田 八重子	奥原 芳子	栗原 ちぐさ	更谷 哲哉
伊沢 五郎	内田 芳人	尾崎 和子	黒河内 玉枝	塩原 いね子
石川 和子	梅津 明生	忍足 舜吾	呉 佳代子	重野 よしを
石川 宣道・まなか	江尻 迪子	小田 淳	小池 章子	島 照子
石川 ゆかり	江波戸 晴夫	小田 浩昭	小池 久子	島田 みち子
石黒 朝香	江村 紀美子	小野 修	合志 たづ子	島原 みどり
石黒 利昌・陽子	遠藤 恵美子	小野 有五・妙子	小久保 俊三	島本 恵子
石崎 田鶴子	遠藤 香恵子	甲斐 恵美子	後藤 秀次	清水 志おり・三千子
石津 恭子	及川 幸子	甲斐 節子	小坂田 さち子	清水 紀代子
石村 信子	呉 蓮子	加藤 喜代子	小坂田 裕子	下條 善子
和泉 紀代子	大川 章代	加藤 恵子	輿石 修古	庄司 篤
磯部 雅子	扇谷 良廣・ウタ子	加藤 千恵子	小谷 美絵子	白柳 隆明
板倉 るり子	大黒 洋介	加登本 拡	小西 羊一・一枝	進 緑
市村 光生	大澤 博之	蕪木 直江	小林 明子	菅波 昭子
伊藤 多恵子	大沢 美智子	鎌田 まさ子	小林 寛治・藤子	菅野 ウメ
伊藤 安以	大澤 由紀子	川井 章・美智子	小林 久美子	鈴木賢一・知子
伊藤 瑛子	大沢 洋一郎	河角 広子	小林 節子	鈴木 信一
伊藤弘・ふさ子	大島 功	川中 敏子	小宮 静江	鈴木 登喜子

鈴木 規子	田村 忠義	白 景守	松田 喜代子	山口 裕
鈴木 みち子	田花 安子	橋本 和子	松田 タキ子	山口 和也
鈴木 美津子	塚原 宏	服部 智裕	松本 信子	山口 千代子
須田 茂乃	辻 知子	羽戸 廣子	松本 みどり	山崎 彰
須藤 美千子	土本 志保子	林 一江	松本 美根子	山崎 幸子
砂川 まり子	土屋 正彦	林 朋子	真山 かほる	山田 恵子
外山 憲子	都藤 清美	葉山 文子	丸口 久江	山田 千秋
高井 多可ゐ	手子 ヤエノ	原 清・瑛子	丸山 幸一	山田 康子
高岡 節子	寺田 和子	久田 葉子	右田 拓磨	山ノ井 秀子
高島 文枝	寺田 京子	肥田 潔	三島 八重子	山本 恭子
高田 留奈子	得田 照	檜山 しげじ	水上 みち子	山本 幸子
高野 千草	富澤 由利子	平賀 徹夫	水谷 寿々子	山本 知子
高野は る子	内藤 歌子	夫 福敬	水野 三千代	杠愛子・隆志
鷹觜 達衛	内藤 和子	深沢 瑠璃子	道又 賢一	横山 政尚
高橋 浜子	中 具巳	深田 久子	光藤 操	横山 雄一
高橋 要順	長沢 美抄子	深堀 純子	宮井 政子	吉川 八重子
高平 好郎・たつみ	中澤 リナ	深堀 柱	宮内 暁子	吉川 陽子
高山 早代	中島富美子	福崎 康代	宮川 園絵	吉田 恵子
田川 照子	中島 英一	福田 青柳	宮倉 満子	吉田 静代
瀧 陽子	長島 由紀子	藤井 明子	宮田 いそ子	吉田 矩子
滝川 理紗	永野 博信	藤代 真知子	宮野 美智子	吉田 三代江
武井 博	永峯 美代子	藤村 宏子	宮本 クララ	吉田 有子
武田 真理	中村 ミツノ	藤本 保子	三輪田 明美	吉村 美紀子
建部 正秋	中村 有里子	藤原 伸子	村岡 秀子	四谷 和子
田島 久仁子	中本 徹信	船橋 良子	村上 則子	李 アンナ
立川 教子	中山 宏・夕里亜	古川 モト	村上 泰子	ロランド・ピエール
立石 圭子	永吉 恵子	古本 佳世子	村田 由紀子	渡辺 薫子
立林 久美	西川 武志	古屋 敦	望月 大信	渡辺 こずえ
立脇 和夫	西嶋 由紀子	古屋 恵子	森孝一・立藤昇子	渡辺 征子
田中 あお	西田 紀子	堀口 明美	森本 明子	渡辺 千津子
田中 英	仁藤 秀子	堀口 弥生	八木 康江	渡部 朋子
田中 志郎	二宮 広子	本間 早苗	安田 美知子	渡部 美佐子
田中 節子	任 明江	前島 郁子	安原 鈴子	渡辺 光江
田中 伸枝・祐子	野口 紀世子	真栄田 由紀子	矢田部 公仁子	渡辺 禮子
田中 翠	野坂 静子	牧口 君枝	八尋 八洲	
田辺 知之	野田 健太郎	榎谷 紀子	山内 恭子・真人	
谷 陽美	野田 寛	増満 由美子	山内 雄策	
谷口 寿美枝	野本 芳子	松井 瞭博	山来 真理子	(五十音順・敬称略)

2007年5月23日 朝日新聞

紛争地の高校生 平和学ぶ旅

紛争が続くイスラエルとパレスチナの高校生を招き、日本の高校生と旅をしながら平和について語り合う「平和をつくる子ども交流プロジェクト」を、東京のNPO法人などが今夏に計画している。戦後50年の06年に続いて2回目。今回は長崎市や那須高原（栃木県）を訪れる。

イスラエルとパレスチナから10人

弘子理事長）などがつくる実行委員会。イスラエルとパレスチナの高校生5人ずつが8月初めに来日し、2週間にわたって長崎県や那須高原などの高校生4人と一緒に那須高原で共同生活をしたり、長崎で平和の尊さを学んたりする。

05年夏のプロジェクトには広島や長崎などの高校生7人が参加。イスラエルとパレスチナの

高校生ら12人と東京、広島、長崎を巡った。長崎では原爆資料館を見学。被爆者の話も聞き、参加者同士で平和をテーマに話し合ってきたを深めた。

実行委は、郵便振替（00190・2・889658）などによるプロジェクトへの資金援助を呼びかけている。問い合わせは実行委事務局（03・33379・5571）へ。

夏、長崎などで交流

計画しているのは、紛争による貧困に苦しむ子どもらに教育費を送っているNPO法人「聖地のこどもを支える会」（井上

イスラエル・パレスチナの
高校生招き平和を考える

「対話を通してお互い理解」



イスラエル・パレスチナの高校生を招き、日本の高校生と平和を考える「イスラエル・パレスチナ・日本 平和をつくる子ども交流プロジェクト」が2日、那須町で始まった。5年ほど経つこのプロジェクト、参加者は互いの歴史の深い違いを察しているが、対話による相互理解に期待を示していた。

イスラエルとパレスチナの高校生を招き、日本の高校生と平和を考える「イスラエル・パレスチナ・日本 平和をつくる子ども交流プロジェクト」が2日、那須町で始まった。5年ほど経つこのプロジェクト、参加者は互いの歴史の深い違いを察しているが、対話による相互理解に期待を示していた。

那須で交流プロジェクト

プログラム2日目の3日、3カ国の学生約20人は発表会形式で自国の普段の生活や文化を紹介。ただ、パレスチナの現状やイスラエル建国史などの説明では、互いの認識の違いに戸惑いを見せる学生もいた。

イスラエルのヤニー・ブ・シェンハブさん(18)は「歴史は一本の糸のようなもの、歴史の断片で現え方が変わると話した。また、イスラエル兵に組

父を殺されたパレスチナ人のシハド・フアラシ(18)は「感情的に複雑な時もあるが、対話を通じてお互い理解できれば」と期待を寄せた。広島学院高2年の竹山 健平さん(18)は「今まで是人ごとだった。生の声を聞いて急に身近になった」。さらに「今後(両国の関係も)勉強したい」と述べた。

同プロジェクトは、イスラエル・パレスチナで教育支援を続ける、NPOの法人「虹の子どもを支える会」(井上弘子理事長)とエルサレム・カトリック教区主催の「イアラビム・ファルタス」神父が「同じく平和、開たりのある両者の間に対話の機会を作ろう」と始めた。井上理事長は「プロジェクトを通じて、未来を担う平和の『若木』を育てたい」と意気込んでいる。

参加者は3日、四野を出発後、長崎で平和の尊厳を学ぶ。

交流通じ「平和」学ぶ

高校生が市長を訪問



市長を訪ねている「平和をつくる子ども交流プロジェクト」のメンバー

の国にも第二次世界大戦後戦争をしていない日本を訪問してほしいと思っただ」などとあいさつ。田上市長は「長崎での経験を通じて、自分の中に平和の心を育ててほしい。参加者で長崎純心女子高3年の中村美穂さん(18)は「実際に戦争を経験している長崎の高校生は、止める方法を具体的に考えている。私は長崎の被爆の実相を伝えていかなければとあつたため感じた」と話した。

一行は、十一日まで長崎市に滞在し長崎原爆資料館などを見学。十二日に東京に向かう。

紛争が続くイスラエルとパレスチナの高校生を招き、日本の高校生と平和を考える「イスラエル・パレスチナ・日本 平和をつくる子ども交流プロジェクト」が2日、那須町で始まった。5年ほど経つこのプロジェクト、参加者は互いの歴史の深い違いを察しているが、対話による相互理解に期待を示していた。

同プロジェクトは、長崎純心女子高3年の中村美穂さん(18)は「実際に戦争を経験している長崎の高校生は、止める方法を具体的に考えている。私は長崎の被爆の実相を伝えていかなければとあつたため感じた」と話した。

一行は、十一日まで長崎市に滞在し長崎原爆資料館などを見学。十二日に東京に向かう。

「日本の文化を学び、他

平和をつくる子ども交流プロジェクト

イスラエルとパレスチナの高校生

紛争越え交流 信頼へ

イスラエルとパレスチナの高校生を日本に招き、日本の高校生と共に平和に向けた「出会いの絆（けい）」を行う。第3回「平和をつくる子ども交流プロジェクト」(主催・尚実行委員会)が井上弘子委員長が七月三十一日から八月十五日まで行われた。イスラエル、パレスチナから各五人、日本から四人の高校生が参加し、スタッフと共に日本各地を回り、八月十三日に東京・麹町教会で、まとめとなる「講座会」を語らうの夕べ、平和への希望を語った。

このプロジェクトは、合点と協力して実現した。が、多岐を歩いた。聖地の貧しい子どもたちを支援するNPO(特定非営利活動)法人「聖地」が、今年、一行は聖地高の中、長崎と回り、自然の恵みと友情を深め、それぞれの文化を知ると共に、両国での暮らしと苦しみを感じ合ひ、平和のために何

お互いに 苦しみがある
八月十三日の「夕べ」は、ファルタス神父の講演が始まった。「いつか、イスラエルとパレスチナ人が、互いに、悪いことをしたと、無駄、大

切なのは、私たちは何をして来たか。この高校生たちは私たちの未来、私たちの未来です」



「語り合い」で笑顔を見せる高校生たち

日本からの竹山修平さん(高校二年)がクループの変化を説明した。「最初は表面的なつきあいは、紛争状況に話が及ぶと、思はずの反動が出て、日本人はついでにいじわるな気がして、その後の話の聞き取りも難しくなってきた。その後、お互いの痛みを分かち合う時間から変化してきた。」

わあ、たけと、最後にはほほほと笑った」と話し、パレスチナからのナイル・ロマン・セルブール(18)は「お互いに苦しみがあることが分かった。進いを見いだすために、ここに来った。苦しみのおかげがあれば、隣国の助けがあること、平和をつくること、それができると語った。

最後に「平和宣言」として「互に、尊敬、そして愛の受け贈り私たちの間に壁を上げる」ことなど、全員で誓った。

その一人、竹山修平さん(高校二年)は「平和は大勢の希望だけれど、具体的にどうするかを考えている人は少ない。具体的にアブローチさんや進平さんみたいな人が参加した」と語った。

子どもプロジェクト
平和をつくる
交流

イスラエル―パレスチナ―日本

“心の壁取り除かれた”

高校生が長崎など各地で「対話」

「平和をつくる子どもプロジェクト」実行委員会（以下「実行委」）は、8月13日、イスラエル、パレスチナからの高校生を招き、日本の高校生と交流して、世界平和の推進を目的とした「心の壁取り除かれた」交流プロジェクトを開催した。このプロジェクトは、長崎、広島、福岡と福岡県上三河郡の3県で開催される。今回は、福岡の長崎で、長崎の長崎県立長崎高等学校、8月13日には福岡県立高等学校（福岡・西宮）の両校が参加し、14日（土）に長崎市内の長崎県立長崎高等学校で、長崎県立長崎高等学校の生徒と交流した。



長崎県立長崎高等学校で交流するイスラエル・パレスチナ・日本の高校生

「心の壁取り除かれた」交流プロジェクトは、長崎県立長崎高等学校の生徒と交流した。このプロジェクトは、長崎、広島、福岡と福岡県上三河郡の3県で開催される。今回は、福岡の長崎で、長崎の長崎県立長崎高等学校、8月13日には福岡県立高等学校（福岡・西宮）の両校が参加し、14日（土）に長崎市内の長崎県立長崎高等学校で、長崎県立長崎高等学校の生徒と交流した。

また、初めに訪れた日本をめぐって「対話」が行われ、長崎県立長崎高等学校の生徒と交流した。このプロジェクトは、長崎、広島、福岡と福岡県上三河郡の3県で開催される。今回は、福岡の長崎で、長崎の長崎県立長崎高等学校、8月13日には福岡県立高等学校（福岡・西宮）の両校が参加し、14日（土）に長崎市内の長崎県立長崎高等学校で、長崎県立長崎高等学校の生徒と交流した。

この交流は、長崎県立長崎高等学校の生徒と交流した。このプロジェクトは、長崎、広島、福岡と福岡県上三河郡の3県で開催される。今回は、福岡の長崎で、長崎の長崎県立長崎高等学校、8月13日には福岡県立高等学校（福岡・西宮）の両校が参加し、14日（土）に長崎市内の長崎県立長崎高等学校で、長崎県立長崎高等学校の生徒と交流した。

2007年9月1日 よきおとずれ

平和をつくる子ども交流プロジェクト

手と手はつながる

「心の壁取り除かれた」交流プロジェクトは、長崎県立長崎高等学校の生徒と交流した。このプロジェクトは、長崎、広島、福岡と福岡県上三河郡の3県で開催される。今回は、福岡の長崎で、長崎の長崎県立長崎高等学校、8月13日には福岡県立高等学校（福岡・西宮）の両校が参加し、14日（土）に長崎市内の長崎県立長崎高等学校で、長崎県立長崎高等学校の生徒と交流した。



長崎県立長崎高等学校の生徒と交流した。このプロジェクトは、長崎、広島、福岡と福岡県上三河郡の3県で開催される。今回は、福岡の長崎で、長崎の長崎県立長崎高等学校、8月13日には福岡県立高等学校（福岡・西宮）の両校が参加し、14日（土）に長崎市内の長崎県立長崎高等学校で、長崎県立長崎高等学校の生徒と交流した。



長崎県立長崎高等学校の生徒と交流した。このプロジェクトは、長崎、広島、福岡と福岡県上三河郡の3県で開催される。今回は、福岡の長崎で、長崎の長崎県立長崎高等学校、8月13日には福岡県立高等学校（福岡・西宮）の両校が参加し、14日（土）に長崎市内の長崎県立長崎高等学校で、長崎県立長崎高等学校の生徒と交流した。

今月の
特集

理解されるよりも理解することを

— イスラエル・パレスチナ・日本の高校生たち —



聖イグナチオ教会ヨセフホールで（東京）



「平和祈念像」の前で（長崎）

「平和をつくる子ども交流プロジェクト実行委員会」は、長引く紛争に苦しむイスラエルとパレスチナ双方の高校生が日本の高校生とともに、平和を学ぶために、耶須、長崎、東京への旅を企画しました。彼らと同行しながら、彼らが各地で体験したことをレポートするとともに、インタビューを通して高校生たちが日本で感じたことを語っていただきました。

（編集室）



ディナーのメニューは？

「6分間の壁」の模擬体験
左ノアムさんと右、レナート君



ヤニーブさん



ショッピングに行きました。



ジハド君のグリーンカード



ボールゲーム

午前8時に朝食。「オハヨウゴザイマス」の音が食堂に響く。9時30分から3か国によるプレゼンテーション。トップバッターは日本。日本の地理、4つの気候、日本の文字、日本の宗教事情、戦時中の軍隊、核兵器の実験、原爆、日本の教育事情、その問題点などについて解説した。

8月3日(金)

午後5時にウエルカムディナー。食堂には3か国の国産が掲揚され、料理はシスターの手作り。鶏の丸焼き、カニ、ビーフ、鴨のソーセージ、牛タン、デザート、飲み物など、国産、宗教を考慮した心温まるものが食卓に並んでいた。このディナーにはシスターやマネゾン光景の方がたも数名参加。

「洗濯機、風呂掃除に使う用品などの説明。」
昼食後、自己紹介。順番は日本の習慣に従ってジヤンケンで決める。その後、ヤニーブさんの指導のもとでボールを使ったゲーム、椅子を使ったゲーム、最後には3人のチームによる本当か嘘かのゲーム。ボーカルフエイスの高校生もいて、笑いが絶えなかった。

午後8時に朝食。「オハヨウゴザイマス」の音が食堂に響く。9時30分から3か国によるプレゼンテーション。トップバッターは日本。日本の地理、4つの気候、日本の文字、日本の宗教事情、戦時中の軍隊、核兵器の実験、原爆、日本の教育事情、その問題点などについて解説した。

8月3日(金)

午後5時にウエルカムディナー。食堂には3か国の国産が掲揚され、料理はシスターの手作り。鶏の丸焼き、カニ、ビーフ、鴨のソーセージ、牛タン、デザート、飲み物など、国産、宗教を考慮した心温まるものが食卓に並んでいた。このディナーにはシスターやマネゾン光景の方がたも数名参加。

続いてパレスチナのプレゼンテーション。パレスチナ難民の生活、海外への移住などを説明し、数名が自分たちの生活体験を語った。さらにレナート君とノアムさん(イスラエル人)が分組の壁(高さ約9m)の模擬体験をした。「壁は人を分断してしまいます。でも僕はよりよい未来の希望と平和を作ります」という言葉は印象的で、ジハド君が1日証明書やグリーンカードを見せてくれた。

※記事の続きは「家庭の友」でござんください。



聖ヨセフセミナーハウス
ウェルカムディナーにて (那須)



聖ヨセフセミナーハウス (那須)



成田空港にて



左・滝川さん、右・石黒さん



セミナーハウスの庭で (那須)



成田空港にて

那須編

2007年8月1日 (水)

都内の気温は30度の猛暑。午後6時20分にイスラエルとパレスチナの高校生たちを乗せた飛行機が成田空港に到着。入国手続きを済ませ、ホールに現れたのは午後7時2分。外は蒸し暑いが空には星がチラホラ。これからの旅を暗示するかのような希望の星に見えた。やがて宿泊地の那須高原へ向けてバスが出発。席は日本の高校生と交互に座り、すでに会話が弾んでいる。中には「し、ま、ま、い」と日本語でのカウンターの仕方を学び、パーフェクトに答えているパレスチナの高校生。日本の文化や伝統を学習している高校生も。長旅の疲れをまったく感じさせない。

高原ということもあり、都心のような暑さはない。庭間の草花がとても生き生きとしている。庭を散策していると談笑しているイスラエルとパレスチナの高校生に出会った。平和を願う象徴的。遅めの朝食。鈴木信一神父(聖パウロ修道会)が小さなメッセージとともに、初り、メデイテーション(自分の家族、両親、兄弟姉妹のことを思いつつ)。そして「いただきます」の発声。この言葉は真前にしっかりと定着した。生活に関するオリエンテーション。担当は2年前、このプロジェクトに高校生として参加した石黒朝香さんと滝川理紗さん。セミナーハウスの使い勝手、シヤンプ

次第です」と挨拶。さらにパレスチナ側の責任者アントニー・ハバシユさんとイスラエル側の責任者ヤニーヴ・シニンハヴさんが挨拶。途中、車窓からは花火が見え、一行を歓迎するかのようだった。バスは午後11時10分、那須の聖ヨセフセミナーハウスに到着。一日の疲れを癒して床についたのは12時過ぎだった。

8月2日 (木)

2007

イスラエルーパレスチナー日本

平和をつくる子ども交流プロジェクト

報告書

主 催——'07平和をつくる子ども交流プロジェクト実行委員会

共 催——CHILDREN WITHOUT BORDERS

主 管——NPO法人 聖地のこどもを支える会

〒164-0013 東京都中野区弥生町1-19-1-201

TEL & FAX 03-3379-5571

URL <http://seichi-no-kodomo.org>

e.mail seichi@k.email.ne.jp

編集協力 サンパウロ

印刷所 日本ハイコム(株)

発行日 2007年12月 2日



主催 '07 平和をつくる子ども交流プロジェクト実行委員会
共催 CHILDREN WITHOUT BORDERS
主管 NPO法人 聖地のこどもを支える会

協賛団体：独立行政法人 国際協力機構 (JICA地球ひろば)

助成団体：カリタスジャパン 独立行政法人 国際交流基金 独立行政法人 日本万国博覧会記念機構

後援団体：駐日イスラエル大使館 駐日パレスチナ常駐総代表部 カトリック新聞社 カトリック長崎大司教区 カトリック東京大司教区 カトリックさいたま司教区 サンパウロ ドン・ボスコ社 女子パウロ会 あげほの編集部 純心女子高等学校 活水高等学校 真生会館

支援団体：カトリック大阪大司教区シナピス 日本海洋掘削株式会社 木村洋行株式会社 北九州地区カトリック信徒徒職協議会 道の会 カトリック麻布教会 カトリック高輪教会 カトリック豊四季教会 カトリック花巻教会 カトリック東山教会 カトリック吉塚教会 栄光学園 愛の運動委員会 久留米天使園修道院 聖ヨセフ修道院 東京カルメル会女子修道院 福音の光修道会 ベタニア修道女会 フランシスコ会 田園調布修道院 カトリック大浦教会 教会学校の子供達 巖律シトー会 天使の聖母トラピスチヌ修道院 ショファイユの幼きイエズス修道会 聖フランシスコ病院修道女会 長崎修道院 聖フランシスコ病院修道女会 姫路修道院ベトレヘム外国宣教会 宮崎カリタス修道女会 井荻第二修道院 慈生会マ・メゾン光星 横浜雙葉学園 土曜会

支援者：約410名の方々からご支援をいただきました。

(順不同)